

大 学 院 履 修 案 内

平成 17 年度

(2005 年度)

慶 應 義 塾 大 学

法 学 研 究 科

まえがき

本書は、大学院法学研究科における履修の方法、手続き、講義内容等を記載したものです。学生諸君は本書を大学院学則と併せて熟読し、なお不明な点は学習指導に尋ねて、各自の方針を決定してください。

学習指導 民事・公法学専攻 小林 節
政治学専攻 添谷 芳秀

目 次

ま え が き	
平成17年度(2005年度)学事関連スケジュール	3
一般注意事項	4
履修申告方法	14
履修要項	17
は じ め に	
Ⅰ 開講科目と単位数および分野	17
Ⅱ 課程修了の要件	22
Ⅲ 履修方法	23
Ⅳ 入学前の履修単位の認定について	26
Ⅴ 修士論文提出について(在学1年目に修士論文を提出する場合)	26
Ⅵ 後期博士課程の研究指導体制について	27
Ⅶ 学位請求論文作成について	31
Ⅷ 留学について	32
Ⅸ 在学期間の延長について	33
X 法学政治学論究について	33
XI 後期博士課程特別研究奨励費について	41
XII 後期博士課程の受験外国語と外国語等学力判定制度について	41
XIII 奨学金について	41
講 義 要 綱	
修士・後期博士課程共通設置科目	48
修士課程設置科目	51
後期博士課程設置科目	119
教職課程	156
国際センター設置講座	157
知的資産センター設置講座	203
関係規程抜粋	205
各種申請用紙	

平成17年度(2005年度)学事関連スケジュール

成績証明書発行(2年生以上)	4月1日(金) 12時30分～	
慶應義塾大学在学研修プログラムガイダンス	4月4日(月) 13時～14時30分	528番教室
教育実習事前指導I(今年度実習予定者)	4月5日(火) 14時45分～15時45分	517番教室
外国語教育研究センターガイダンス	4月6日(水) 16時30分～18時	531番教室
入学式	4月7日(木) 9時	西校舎ホール
履修案内等書類配布	4月7日(木) 10時30分～11時30分	527番教室
ガイダンス	4月7日(木) 13時	民事・公法学 527番教室 政治学 532番教室
教職課程ガイダンス	4月7日(木) 16時30分～18時	517番教室
〃 (2006年度実習予定者)	4月7日(木) 18時10分～19時10分	513番教室
春学期授業開始	4月8日(金)	
履修申告日	4月13日(水) 9時～17時	学事センター窓口
開校記念日(休業)	※4月23日(土)	
在学料等納入期限(全納または春学期分納)	4月28日(木)	
履修申告科目確認表送付(本人宛)	5月上旬(掲示を出します)	
健康診断	5月上・中旬	
履修申告修正受付	5月6日(金)～10日(火)(予定)	
修士課程2年生修了見込証明書発行	5月6日(金)以降	
博士課程3年生単位取得退学見込証明書発行		
春学期補講日	7月11日(月), 15日(金)	
春学期授業終了	7月14日(木)	
春学期末試験(この期間は授業は行われません)	7月19日(火)～27日(水)	
夏季休業	7月28日(木)～9月21日(水)	
三田キャンパス一斉休業	※8月9日(火)～15日(月)	
秋学期授業開始	9月26日(月)	
9月学位授与式	9月29日(木)	
在学料等納入期限(秋学期分納)	10月31日(月)	
秋学期補講日(1)	11月18日(金) 午前	
三田祭(準備・本祭・片付を含む)(休講)	11月18日(金) 午後～11月24日(木)	
休学願提出期限(今年度分)	11月30日(水)	
冬季休業	12月23日(金)～1月5日(木)	
三田キャンパス一斉休業	※12月28日(水)～1月5日(木)	
授業開始	1月6日(金)	
福澤先生誕生記念日(休講)	※1月10日(火)	
秋学期月曜代替講義日	1月18日(水)	
秋学期補講日(2)	1月20日(金)	
秋学期授業終了	1月21日(土)	
秋学期末試験(この期間は授業は行われません)	1月23日(月)～2月4日(土)	
福澤先生命日	2月3日(金)	
春季休業	2月上旬～3月下旬	
学部入学試験	2月上・中旬	
学業成績表送付(本人宛)	3月中旬	
3月学位授与式	3月29日(水)	

(注1) ※印の期間には学事センター窓口業務を執り行いません。証明書発行等も行わないので注意してください。

(注2) 事情により日程・教室は変更があり得るので、掲示板等に注意してください。変更がある場合は掲示板への掲示が優先します。

一 般 注 意 事 項

I 学 生 証 (身 分 証 明 書)

1. 学生証は、諸君が慶應義塾大学大学院生であることを証明する身分証明書です。同時に慶應義塾大学学生健康保険互助組合員証、および本塾図書館入館票を兼ねています。
2. 学生証は次のような場合に必要となるので登校の際常に携帯しなければなりません。
 - (1) 本塾教職員の請求があった場合
 - (2) 各種証明書および学割証の交付を受ける場合
 - (3) 各種試験を受験する場合
 - (4) 通学定期券または学生割引乗車券を購入の際、およびそれを利用して乗車船し係員の請求があった場合
3. 再交付手続
学生証を紛失したり、汚損した場合は、写真（縦4cm横3cm カラー光沢仕上げ）1枚を添えて学事センターで再交付を受けてください。新しい学生証は原則、当日発行いたします。ただし、機械のメンテナンス、故障等により当日発行できないこともありますのでご了承ください。
学生証の紛失、裏面シールの紛失については、手数料として2,000円が必要です。
4. 返 却
再交付を受けた後、前の学生証が見つかった場合や退学・修了などで離籍した場合はただちに学事センターへ返却しなければなりません。

II 掲 示 板

1. 学生諸君への通達事項は、すべて大学院校舎1階の掲示板に掲示されます。毎日機会あるごとに、掲示板に注意してください。掲示に注意しなかったために、諸君自身が不利益を被ることもあります。
なお、他研究科・学部設置科目を履修した場合は、その科目を設置している研究科・学部の掲示板を見てください。諸研究所、各センター設置科目・講座等については、各研究科掲示板の右側にある共通掲示板および学部共通掲示板をご覧ください。
2. 主な掲示事項
授業の休講・補講、時間割の変更、教室の変更等毎日の授業に直接関係ある緊急通達、各試験の実施要領、学事日程、呼出し等。休講・補講、呼出しについてはインターネットに繋がるパソコンまたは携帯電話（i-modeのみ）により学事Webシステム（<http://gakuji2.adst.keio.ac.jp/>）においても確認できます。
また、掲示の一部は塾生ページ（<http://www.gakuji.keio.ac.jp/>）でも確認できます。

Ⅲ 試験・レポート等

1. 試験

随時授業時間内に行われます。別途指示がある場合には、掲示されることがありますので、掲示板にも留意してください。

2. レポート

レポート提出は、教室および研究室で直接教員に提出する場合と、学事センターに提出する場合があります。学事センター窓口への提出を指示された場合は、学事センター指定のレポート提出用紙（2枚複写）に必要事項を記入し、添付してください（2枚とも）。レポート提出用紙は学事センターおよび西校舎一階掲示板前に備えてあります。

3. 成績通知

修士課程・後期博士課程とも学業成績表は3月中旬に本人宛に発送します。（ただし、成績証明書は次年度より発行します。）

Ⅳ 諸 届

下記事項はすべて学事センターで取り扱います。

1. 休学願・退学届・就学届

「病気その他やむを得ない理由により欠席が長期にわたる場合には休学することができる」（学則第125条）

本年度休学する場合は、11月末日までに指導教授および学習指導の許可（押印が必要）を得たうえで休学願を学事センターに提出してください。病気を理由に休学する場合は、医師の診断書を添付してください。休学期間は当該年度末（3月31日）までとします。休学が次の年度に及ぶ時は、改めて許可を得なければなりません。休学および留学の期間が終了した場合は、速やかに就学届を提出しなければなりません。なお、病気を理由に休学をしていた場合には併せて復学を認める医師の診断書を提出してください。

退学予定者は、退学届に本人・保証人の署名捺印の上、学生証を添えて学事センター窓口へ提出しなければなりません。

2. 留 学 願

「研究科委員会が教育上有益と認めたときは、休学することなく外国の大学の大学院に留学することを許可することがある。」（学則第124条）

詳しくは、学事センター法学研究科係に問い合わせてください。

3. 住所変更届（本人・保証人）、保証人変更届、改姓（名）届

各届とも学事センター所定の用紙に記入のうえ速やかに窓口へ届け出てください。学生証の記載事項変更も同時に行ってください。郵送および電話による届け出は、受け付けません。

必要書類（所定用紙は学事センターにあります）

- ・住所変更届：在学カード
- ・保証人変更届：変更届、在学カード、誓約書（本人・保証人押印）、保証人住民票

・改姓（名）届：改姓（名）届，在学カード，誓約書（本人・保証人押印），戸籍抄本，学生証再交付願
また，学生総合センター学生課に提出する「学生カード」に新住所等を記入しても，正式な届とは見なされません。必ず学事センターに所定の届を提出してください。

なお，履修上の連絡，あるいはその他の重要な事柄の処理に際し，これらの変更届が出されない場合は，極めて重要な支障をきたすことがありますので，十分に注意してください。

V 各種証明書

証明書の発行，申し込み，受け取りいずれの場合でも学生証が必要です。

在学料等が未納の場合，すべての証明書が発行できません。

1. 証明書自動発行機で即時発行する証明書（和文）

※料金は改定されることがあります。

在学証明書	1 通200円
成績証明書（4月1日12時30分～）	
修士課程修了見込証明書（5月6日～）	
履修科目証明書（6月1日～）	
修士課程修了見込証明付き成績証明書（5月6日～）	1 通400円
学割証（JR 各社共通）	無 料
健康診断証明書（6月中旬～年度内）	1 通200円

注① 稼働時間

学事センター事務室内発行機：学事センター事務取扱い時間内

南校舎1階設置発行機：9時～20時 [休日および大学休業日は除く]

メンテナンス，故障等により，証明書発行機を停止することがあります。使用する時期や枚数に注意し，あらかじめ早めに準備してください。

② 学割証は1人1年間10枚まで発行。有効期限は発行日から3か月以内（有効期限内でも離籍した場合は無効）。各種学生団体の課外活動に必要な学割証は学事センターに申し出てください。

③ 各種証明書等で厳封を必要とする場合には，学事センターに申し出てください。（自動発行機で発行した証明書は厳封できません。）

④ 健康診断証明書は6月中旬以降，定期診断受診者を対象に発行されます。

なお，奨学金申請等で6月中旬以前に証明書が必要な場合は，保健管理センター三田分室受付に相談してください。

2. 学事センター窓口で即時発行する証明書（英文）

※いずれも1通200円。（料金は改定されることがあります）

(1) 英文在学証明書（4月1日12時30分～）

(2) 英文修了見込証明書（5月6日～）

(3) 英文成績証明書（4月1日12時30分～）

2003年4月以降の入学者は証明書自動発行機で発行できます。その他の学生については、従来どおり窓口での発行となります。ただし、2004年4月以降、窓口で一度英文証明書の申請・交付を受ければ、その翌日から証明書自動発行機での発行が可能になります。

3. 学事センター窓口で申し込み、日数を要して発行する証明書・文書

前記以外の証明書・文書等（例：英文履修科目証明書，他大学院受験等のための形式指定の調査書等）の発行に関しては、余裕をもって学事センター窓口で相談のうえ申請してください。なお、交付には和文書類は申請後標準3日，英文書類は申請後標準1週間日数を要します。

VI 学事センターの窓口

1. 学事センター事務取り扱い時間

(1) 授業期間中は次のとおり取り扱います。

月～金曜日…… 8時30分～18時10分

【なお、各学部・研究科に関する相談・問い合わせは、次の時間帯でお願いします。】
8時30分～16時30分

(2) 休業期間中は次のとおり取り扱います。

月～金曜日…… 8時30分～11時30分，12時30分～16時30分

土曜日・日曜日・祝日・義塾が定めた休日および大学事務の休業期間中は閉室となります。

※事務取り扱い時間を変更する場合，および事務室の閉室については，掲示等でお知らせします。

2. 窓口業務

- (1) 学籍・成績・履修に関すること
- (2) 授業・試験・レポート等に関すること
- (3) 時間割に関すること
- (4) 休講・補講に関すること
- (5) 追加試験の申し込み（学部設置の科目）
- (6) 留学願・休学願・退学届・住所変更届・保証人変更届等
- (7) 学生証の発行
- (8) 成績証明書・在学証明書等各種証明書の発行
- (9) 教室に関すること
- (10) 通学証明書の発行

落とし物，学生カード提出は学生総合センター学生生活支援窓口が取り扱います。

修了後の成績証明書等の申込・発行は，塾員センター（北館3階）で行います。

VII 教員を訪ねる場合

授業のある日に研究室または教員室を訪ねてください。

○専門科目担当専任教員（教授・助教授・専任講師・助手）…… 研究室（三田研究室棟）

○日吉専任教員および塾外からの出講者（講師）…… 教員室（南校舎2階）

VIII 学生総合センター窓口

学生総合センターには、主に課外活動・課外教養・奨学金および学生健康保険互助組合を担当する学生生活支援窓口、就職進路支援を行う就職・進路支援窓口があります。ここでは、学生生活を送るうえで何かと関係の深い学生総合センターについて、窓口業務を中心に紹介します。

学生生活支援

○教室等の使用申込み受付

公認学生団体が会合のために教室を使用したい時は、使用希望日の4日前（休日を除く）までに申し込んでください。休日・試験期間中・休業期間中の使用はできません。（「VI教室使用申請について」も参照）

使用できる時間は次のとおりです。

月～金曜日 9：00～18：00（ただし、第一校舎は20：00まで）

土曜日 9：00～18：00（全校舎）

音楽団体指定時間

月～金曜日 18：10～20：10

土曜日 13：00～18：00

なお、教室以外に利用できるスペースとして、学生談話室A・Bと音楽練習室がありますので、使用したい場合は学生生活支援窓口にお問い合わせください。

○山食・西校舎学生食堂ホール・北館学生食堂の使用申込み受付

公認学生団体・教職員・OB・研究会等が、山食や生協食堂・北館学生食堂をパーティー等で利用したい場合は、学生生活支援窓口で使用申込みをし、予約してください。さらに、予約後1週間以内に学内集会届を提出し、許可を得る必要があります。学内集会届の提出を怠った場合は予約は取り消されますので注意してください。なお日曜日・祝日は利用できません。

○学外行事届の受付

公認学生団体や研究会で、合宿、コンサート、パーティーなどの学外行事を行う場合には、その4日前までに届け出てください（学生教育研究災害傷害保険の項参照）。なお、団体割引、減税証明書等の必要があれば申し出てください。

合宿等で団体割引が必要な場合についても学生生活支援窓口で受け付けています。

○組織届の受付

クラブ、サークル等を新設する場合は、所定の組織届を提出してください。組織届の提出がないと、学生団体公認申請等の諸手続を行うことはできません。公認申請の詳細については学生生活支援窓口で各自で問い合わせをしてください。

○学内における掲示・配布

ポスターやチラシ・パンフレット等を学内で掲示・配布する場合は、学生生活支援窓口へ届け出て、場所等の指示を受けることが必要です。

○備品使用申請の受付

公認学生団体で、ステッカー、ワイヤレスマイク、塾旗、水差、椅子、机等を借用したい場合は、使用希望日の4日前までに申請してください。

○郵便物の取り扱い

外部から送付される各学生団体宛の郵便物は、学生生活支援窓口備え付けのメールボックスに区分けしておきますので、学生責任者は定期的に取りに来るようにしてください。なお、個人宛の郵便物は一切取り扱いません。

○車両入構申請の受付

塾生の車両入構は認められていませんが、やむをえず車両入構の必要がある場合は、入構希望日の4日前までに申請してください。

○学生ラウンジの使用

南校舎1階の学生ラウンジは、個人の利用ができます。開室時間は8:45～21:00です。室内での飲食はできません。

○伝言板および「DENGON」の利用

学生ラウンジ横の黒板および、第一校舎南西角の伝言板「DENGON」は、塾生間の連絡用として自由に利用してください。A4用紙1枚のみ掲示可能ですが、必ず伝言者の学部・学年・氏名・連絡先を明記してください。

○その他

学生総合センター「大学生生活懇談会」では見学会、講演会、討論会等の催物を随時行っていますので、積極的に参加してください。また、学生生活支援窓口には、財団法人大学セミナーハウス、展覧会の招待券・割引券等も置いてあります。

遺失物は学生生活支援の受付窓口で取り扱っています。

○奨学金

学生生活支援窓口において、概ね4月初旬から奨学金案内を配布し、出願受付を行います。

・慶應義塾大学奨学金〔給費〕

5月下旬に出願受付を行います。募集日程は西校舎ロビー学生総合センター掲示板に掲示します。

・慶應義塾大学特別奨学金〔給費〕

家計支持者の死亡・失職等により家計状況が急変し、経済的に学業の継続が困難になった者を援助することを目的とします。募集日程は西校舎1階中央ホール学生総合センター掲示板に掲示します。

・日本学生支援機構奨学金〔貸費〕

4月中旬に出願受付を行います。第一種（無利子）と1999年度から設置された、第二種（きぼう21プラン）（有利子）があります。その他に家計急変者を対象とした緊急採用（第一種）・応急採用（第二種）があります。

・地方公共団体、社・財団法人等の各種奨学金

募集は主に4・5月に行います。募集日程はその都度、西校舎1階中央ホール学生総合センター掲示板に掲示します。

・指定寄附奨学金〔給費〕

募集は主に4月に行います。募集日程はその都度、西校舎1階中央ホール学生総合センター掲示板に掲示します。

○奨学融資制度（奨学金付き学費ローン）

学生諸君の学費の調達の手助けになるよう配慮した制度で、学生本人に金融機関が低金利で学費を直接貸し出しする方式です。在学生であれば、誰でも応募することが可能です。在学中の借りに伴う利子は、規程に従い、慶應義塾が奨学金として給付します。

入学年度等により、適用制度が異なりますので、詳細は学生生活支援窓口までお問い合わせください。

○学生健康保険互助組合

保険証を提示し、病院や診療所で受診した場合、健康保険が適用された自己負担分について、学生健保から医療費給付が受けられます。給付を受けるための手続きは、医療機関によって異なりますので、以下に従って手続きしてください。なお、給付方法は銀行振込となりますので、口座登録が必要です。

(1) 慶應病院で受診した場合

病院で診察を受ける際、保険証と学生証を提示してください。また「医療給付金振込口座届」を学生生活支援窓口へ提出し、振込口座を登録してください。通院は受診月の翌月20日に、入院は翌々月20日に、給付金が振り込まれます。

(2) 一般病院で受診した場合

学生生活支援窓口においてある「医療費領収証明書」に、病院で1か月ごとの診療内容を記入してもらい、塾生記入欄を各自記入して、学生生活支援窓口へ提出してください。ただし、「学生氏名」「保険点数または保険適用金額」「負担割合」の3点が明示された領収証が発行されている場合は領収証の添付でかまいませんが、必ず「医療費領収証明書」に保険者番号、傷病名等を記入して提出してください。受診月を含め、4か月以内に提出されない場合は無効となります。振込日は証明書を提出した月の翌月20日です。

組合ではこのほか、契約旅館に対する宿泊費補助や、海の家、スキーハウスの開設などを行っています。さらに、日吉塾生会館内にトレーニングルームも設置しています。詳しくは、入学時に配付した「健保の手引き」（学生総合センターにも置いてあります）をご参照ください。

就職・進路支援

就職担当は、就職活動に関するさまざまな情報を収集して提供しています。企業からの求人票・説明会案内をはじめ、会社案内、OB・OG情報などを、南校舎地下1階の就職担当事務室、1階の就職資料室にて、自由な利用に供しています。就職担当のホームページには求人企業一覧やさまざまな説明会案内などを掲載しています。

また就職活動支援の一環として、10月から2月にかけて多様な専門家等による講演会、就職ガイダンス、公務員志望者のための説明会、OB・OGや内定者によるディスカッションなどを開催しています。こうした催しはビデオテープに収録し、後日貸し出しも行っています。

就職担当は就職活動の進め方を解説した『就職ガイドブック』を作成し、3年生全員に配布しています。また皆さんが就職活動をするなかでわからないこと、困ったことがあった場合など、いつでも個別相談に応じています。

就職担当を、皆さんの進路決定や就職活動におおいに利用してください。

学生相談室（西校舎地下2階）

学生相談室は、学生生活の中で当面するさまざまな問題や悩みについての個別の相談に応じています。それと共に、小集団の中で自己をみることで自己成長を促す「サイコドラマ」や「エンカウンター・グループ」の行事も行っています（このスケジュールは相談室に問い合わせてください。）

相談内容に関しては、それがいかなる種類のものであっても、個人の秘密を厳守しますし、すべては来談者とカウンセラーの間のこととして扱われますので、気軽に相談に来てください。

学生総合センター窓口取扱時間

—学生生活支援，就職・進路支援—

月～金曜日…… 8時30分～17時

※都合により閉室することがあります。

土曜日……閉室

—学生相談室—

月～金曜日…… 9時30分～16時30分

土曜日……閉室

昼休み……11時30分～12時30分

学生教育研究災害傷害保険について

諸君の教育研究活動中の不慮の災害事故補償のために、大学で保険料の金額を負担し、日本国際教育支援協会の「学生教育研究災害傷害保険」に加入しています。この保険の適用を受ける「教育研究活動中」とは次の場合をいいます。

(1) 正課を受けている間

講義，実験・実習，演習または実技による授業（総称して以下「授業」といいます）を受けている間をいい，次に掲げる間を含みます。

① 指導教員の指示に基づき，卒業論文研究または学位論文研究に従事している間。

ただし，もっぱら被保険者の私的生活にかかわる場所において，これらに従事している間を除きます。

② 指導教員の指示に基づき，授業の準備もしくは後片付けを行っている間，または授業を行う場所，大学の図書館・資料室もしくは語学学習施設において研究活動を行っている間。

(2) 学校行事に参加している間

大学の主催する入学式，オリエンテーション，卒業式などの教育活動の一環としての各種学校行事に参加している間。

(3) (1)(2)以外で学校施設内にいる間

大学が教育活動のために所有，使用または管理している施設内にいる間。ただし，寄宿舍にいる間，大学が禁じた時間もしくは場所にいる間，大学が禁じた行為を行っている間を除きます。

(4) 学校施設外で大学に届け出た課外活動を行っている間

大学の規則に則った所定の手続きにより，大学の認めた学内学生団体の管理下で行う文化活動または体育活動を行っている間。ただし山岳登山やハングラライダーなどの危険なスポーツを行っている間を除きます。

保険金は本人（被保険者）の申請に基づき支払われますので，上記活動中に万一事故にあった場

合は、学生生活支援窓口で相談のうえ、所定の手続きを行ってください。また、本保険の適用が円滑に行われるため、ゼミ合宿を学外で行う場合、および学内学生団体が学外で活動する場合は、その都度「学外行事届」を提出してください。

その他この保険に関する詳細については、直接学生生活支援窓口で尋ねてください。

任意加入の補償制度について

任意加入の補償制度としては、保険と共済の2つがあり、加入希望の場合は直接それぞれに申し込むかたちになっています。

「学生総合補償」保険は、(株)慶應学術事業会(慶應義塾関連会社)に、「学生総合共済」保険は慶應生活協同組合に、資料請求してください。

連絡先 (株)慶應学術事業会 TEL. 03-3453-6098

慶應生活協同組合 TEL. 045-563-8489

学生カードの提出について(学生カードの提出によって住所変更の届けとすることはできません。)

次に従って提出してください。

1. 提出学年

全学年

2. 提出方法

提出日：4月末日まで

提出先：学生総合センター学生生活支援窓口

3. 記入上の注意

学生カードは諸君の在学中に活用する資料ですので必ず提出してください(やむをえず提出日に提出できなかった場合でも、後日必ず学生生活支援窓口に提出してください)。

IX 定期健康診断について

定期健康診断は、学校保健法に基づいて全学年を対象に年1回実施しています。必ず受診してください。

未受診の場合には、「体育実技」の履修および健康診断証明書の発行は出来ません。また、学割証(学校学生生徒旅客運賃割引証)の発行もできません。

X 緊急時における授業の取り扱いについて(三田)

交通機関ストライキ、台風・大雨・大雪・地震などの各種自然災害により鉄道等交通機関の運行が停止した場合や、政府や気象庁から「東海地震注意情報」が発せられた場合などの授業の取り扱いは次のとおりとします。

1. 鉄道等交通機関運行停止時の授業の取り扱い

【対象事由】

1. 交通機関のストライキ

2. 台風・大雨・大雪・地震などの各種自然災害によるもの

【対象路線】

- ・山手線
- ・中央線（東京－高尾間）
- ・京浜東北線（大宮－大船間）
- ・東急（電車に限る）

のいずれか1路線の全区間または一部区間において運行停止となった場合

【時間・対応策】

1. 午前6時30分までに運行を再開した場合は、平常どおり授業を行います。
2. 午前8時までに運行を再開した場合は、第2時限から授業を行います。
3. 午前10時30分までに運行を再開した場合は、第3時限から授業を行います。
4. 正午までに運行を再開した場合は、第4時限から授業を行います。
5. 正午を過ぎても運行が再開されない場合は、当日の授業を休講とします。

【その他】

授業開始後に運行停止となるような場合は、状況により授業の短縮や早退など別途措置を講じません。

掲示や構内放送、下記のホームページによる大学からの指示に従ってください。

<http://www.gakuji.keio.ac.jp/index.html>

※交通機関の運行状況に係わらず、大規模な災害や事故等が発生した場合の授業の取り扱いについては、状況によりその都度指示することとします。

2. 政府や気象庁から「東海地震注意情報」が発せられた場合の授業の取り扱い

首都圏・東海地方を中心とする大規模な地震発生が予想され、政府や気象庁から「東海地震注意情報」が発せられた場合の授業の取り扱いは下記のとおりとします。

[1] 「東海地震注意情報」が発せられた場合、ただちに全学休校とします。

[2] 地震が発生することなく「東海地震注意情報」が解除されたときの対応は、交通機関運行停止時の場合に準じます。

XI 早慶戦(野球)が行われる場合の授業について

授業は1時限のみとし、2時限以降は応援のため休講とします(3回戦以降もこれに準じます)。

雨天等により試合が中止になる時は、神宮球場の判断によります。

神宮テレフォンサービス TEL. 03-3236-8000

履修申告方法

I 申告方法について

1. 履修申告に際しては、時間割形式の「履修届」および「履修申告用紙」の二種類を提出してください。
2. 時間割は変更することがありますので提出日直前に確認してから記入してください。
3. 履修申告は、指定された期日に必ず行ってください（なお、やむを得ない理由がある場合、事前の提出を認めます）。

4月13日（水） 9時～17時 学事センター窓口
（修士・後期博士同日同時間）

4. 履修申告を期日に行わない者は、退学の処置をすることがあります（学則第161条）。
5. 履修申告科目確認表を5月上旬に発送します。受け取り次第内容を確認してください。もしも、履修確認表に学事センターからのメッセージが記入されている場合や、登録科目に誤りがある場合は、至急学事センターに履修確認表を持参の上、修正申告を行ってください。履修確認表が5月10日までに届かない場合は学事センター窓口申し出てください。確認表は再発行しませんので、年度末まで大切に保管してください。この確認を怠ったために生じた問題（申告漏れ、科目違い等）については大学側は一切責任を持ちません。確認期間は掲示により指示しますが、この期間経過後は、確認が終了したものとみなします。
6. 届出をしていない授業科目を受験しても一切無効であり、単位は取得できません。
7. 留学（学則第124条）が認められた者および予定の者の履修申告については、学事センター法学研究科係まで問い合わせてください（履修要項Ⅷ「留学について」も参照してください）。

II 時間割形式の「履修届」の記入について

1. 時間割中に記載された〔春集〕〔秋集〕とあるのは、〔春学期集中〕〔秋学期集中〕を表わします。
2. 時間割中に記載された「科目名」に付けてある（ ）書きは、自専攻（各人が属する専攻）科目として認められる専攻を表します（民……民事法学専攻、公……公法学専攻、政……政治学専攻）。
3. 履修する科目名・担当者名、下欄論文指導の担当者名を赤い で囲んでください。
4. 他研究科・学部の設置科目を履修する場合は、該当する時限の枠内に授業科目名・担当者名を赤字で記入し、 で囲んでください。なお、他研究科の設置科目で、指導教授が「他専攻科目（修了単位に含められるもの）」として履修を認めるものである場合には、科目名のところに授業担当者の認印を受けてください（後述履修要項Ⅰの3「その他の科目」参照）。
5. 時間割形式の「履修届」は、最終的に指導教授の承認印を受けて学事センターに提出してください（「履修申告用紙」への承認印は必要ありません）。学事センターでは検印を押した上、その場で本人に返却しますので各自の控えとして保管してください。

Ⅲ 「履修申告用紙」(マークシート用紙)の記入について (記入には HB か B の鉛筆を使用)

1 学籍等の記入方法

研究科、専攻、学年、氏名、学籍番号および提出日を記入してください。学籍番号は数字で記入するとともに、該当する数字をマークしてください。修士または博士どちらかに○印をつけてください。なお、学科欄の記入は必要ありません。

2 履修科目の記入方法

- (1) 記入にあたっては、科目名、教員名と登録番号(5桁)に十分注意してください。
- (2) 複数の教員が担当する科目は、時間割上段に記載されている教員名を記入してください。
- (3) 1つの授業科目には1つの登録番号が付いています。

複数の曜日・時限にわたって開講している授業科目についても、必ず登録番号は1か所のみ付いていますので、その登録番号をマークすることで、他の時限についても登録されます。この場合、番号の付いていない曜日・時限に別の科目を登録することはできませんので注意してください。

- (4) 形態欄は、その科目の形態(春・秋・通年)を○で囲み、曜日・時限を記入してください。
- (5) 履修申告欄は **A**、**B** 欄によって構成されています。どちらの欄に記入するかは下記のとおりです。ただし、同一科目を **A** 欄および **B** 欄の両方に記入する必要はありません。

〈**A** 欄に記入する授業科目〉

- ・修士課程在籍者：法学研究科修士課程の時間割に記載されている科目
- ・後期博士課程在籍者：法学研究科後期博士課程の時間割に記載されている科目

〈**B** 欄に記入する授業科目〉

- ・他研究科および諸研究所開講科目を履修する場合
- ・学部設置されている科目を自由科目として履修する場合
- ・後期博士課程在籍者が法学研究科修士課程の時間割に記載されている科目を自由科目として履修する場合

B 欄記入上の注意事項

分野欄：下記に従って2桁の数字を記入しマークしてください。

〈修士〉

〈後期博士〉

B 欄分野	分野番号	科目区分
11	01-04-01	他専攻科目
88	01-30-01	自由科目(指定)※
99	01-30-02	自由科目

B 欄分野	分野番号	科目区分
11	02-03-01	他専攻科目
99	02-30-01	自由科目

※該当者のみ(後述、履修要項Ⅲ参照)

- (6) **無効マーク**(**A** 欄・**B** 欄に共通)にマークすると、その枠内について無効にすることができます。訂正は消しゴムを使用して修正することができますが、跡が残ったり、黒くこすれたりした場合は、この「無効マーク」を利用してください。

3 履修申告用紙の再交付について

- (1) 履修申告用紙提出前の科目の訂正および変更等は，なるべく「無効マーク」を使用して無効にした上で別の記入欄に正しい科目を登録してください。それでも訂正し切れない場合は交換しますので，その履修申告用紙を持参の上，学事センター窓口申し出てください。
- (2) 交付された履修申告用紙では記入欄が足りない場合も学事センター窓口申し出てください。そして複数枚の申告用紙を提出する時には，申告用紙左上の欄（ 枚目／ 枚中）を記入してください。

IV 修正申告について

修正期間はあくまでも「修正」の期間ですので「変更・追加・削除」は一切認められません。登録科目に誤りがあり，追加・削除の場合は，修正申告用の履修申告用紙を使用してください。修正申告用の履修申告用紙は，修正申告の際に学事センターで配付します。

履 修 要 項

はじめに

履修要項は、諸君の大学院における研究の大事なドキュメントです。これから履修あるいは研究をするにあたり不明な点がある場合には、まず指導教授の指示を受け、適宜、学事センター法学研究科係や学習指導に問い合わせるようにしてください。

ふだんの研究等につきましては指導教授と連絡を密にすることはもちろんですが、履修科目の決定や論文の作成・提出、留学や休学、奨学金・特別研究奨励費の申請等に際しても、指導教授に相談して、その指示を受けることが肝要です。

I 開講科目と単位数および分野

法学研究科に開講される科目と単位数および分野は次のとおりです。今年度開講されない科目もあります。また、ここに掲げる授業科目のほか、各専攻において適当と認める授業科目を設置しています。詳細は講義要綱で確認してください。

1. 修士課程設置の科目（各専攻の自専攻科目）

(1) 民事法学専攻

科 目 名	単 位	備 考
合 同 演 習	4	
私 法 学 基 礎 理 論	4	
外 国 法 (英米)	4	
外 国 法 (独)	4	
外 国 法 (仏)	4	
法 哲 学 特 殊 講 義	4	
司 法 制 度 論	4	
民 法 特 殊 講 義	4	
民 法 特 殊 演 習	4	
商 法 特 殊 講 義	4	
商 法 特 殊 演 習	4	
民 事 訴 訟 法 特 殊 講 義	4	
社 会 法 特 殊 講 義	4	
国 際 私 法 特 殊 講 義	4	
法 制 史 特 殊 講 義 I ~ IV	各4	※

(2) 公法学専攻

科目名	単位	備考
合同演習	4	
外国法(英米)	4	
外国法(独)	4	
外国法(仏)	4	
法哲学特殊講義	4	
司法制度論	4	
憲法特殊講義	4	
憲法特殊演習	4	
行政法特殊講義	4	
行政法特殊演習	4	
国際法特殊講義	4	
国際法特殊演習	4	
刑法特殊講義	4	
刑事訴訟法特殊講義	4	
刑事学特殊講義	4	
刑事法特殊演習	4	
社会法特殊講義	4	
法制史特殊講義 I ~ IV	各4	※
法医学	4	

(3) 政治学専攻

科目名	単位	備考
政治思想論特殊研究	2	
政治思想論特殊演習	2	
政治思想論合同演習	2	
政治・社会論特殊研究	2	
政治・社会論特殊演習	2	
政治・社会論合同演習	2	
日本政治論特殊研究	2	
日本政治論特殊演習	2	
日本政治論合同演習	2	
地域研究論特殊研究Ⅰ～Ⅷ	各2	※
地域研究論特殊演習Ⅰ～Ⅴ	各2	※
地域研究論合同演習	2	
国際政治論特殊研究	2	
国際政治論特殊演習	2	
国際政治論合同演習	2	
憲法特殊研究	4	
憲法特殊演習	4	
憲法合同演習	4	
行政法特殊研究	4	
行政法特殊演習	4	
行政法合同演習	4	
国際法特殊研究	4	
国際法特殊演習	4	
国際法合同演習	4	

※修士課程設置の「法制史特殊講義」はⅠ～Ⅳ、「地域研究論特殊研究」はⅠ～Ⅷ、「地域研究論特殊演習」はⅠ～Ⅴと区分されていますが、これは、教職課程履修上の区分であり、学位取得に際しては、法学研究科の他の複数開講される科目と同様に扱われます。なお、教職課程を履修する場合は、その履修方法について、教職課程センターで確認してください。

2. 後期博士課程設置の科目（各専攻の自専攻科目）

(1) 民事法学専攻

科 目 名	単 位	備 考
合 同 演 習	4	
民法（身分法）特殊研究	4	
民法（身分法）特殊演習	4	
民法（財産法）特殊研究	4	
民法（財産法）特殊演習	4	
商法（企業法）特殊研究	4	
商法（企業法）特殊演習	4	
商法（海法）特殊研究	4	
商法（海法）特殊演習	4	
国際私法特殊研究	4	
国際私法特殊演習	4	
民事訴訟法特殊研究	4	
民事訴訟法特殊演習	4	
社会法特殊研究	4	
社会法特殊演習	4	

(2) 公法学専攻

科 目 名	単 位	備 考
合 同 演 習	4	
憲 法 特 殊 研 究	4	
憲 法 特 殊 演 習	4	
行 政 法 特 殊 研 究	4	
行 政 法 特 殊 演 習	4	
国 際 法 特 殊 研 究	4	
国 際 法 特 殊 演 習	4	
刑 法 特 殊 研 究	4	
刑 法 特 殊 演 習	4	
刑事訴訟法特殊研究	4	
刑事訴訟法特殊演習	4	
刑事学特殊研究	4	
刑事学特殊演習	4	

(3) 政治学専攻

科目名	単位	備考
政治思想論特殊研究	2	
政治思想論特殊演習	2	
政治思想論合同演習	2	
政治・社会論特殊研究	2	
政治・社会論特殊演習	2	
政治・社会論合同演習	2	
日本政治論特殊研究	2	
日本政治論特殊演習	2	
日本政治論合同演習	2	
地域研究論特殊研究	2	
地域研究論特殊演習	2	
地域研究論合同演習	2	
国際政治論特殊研究	2	
国際政治論特殊演習	2	
国際政治論合同演習	2	
憲法特殊研究	4	
憲法特殊演習	4	
憲法合同演習	4	
行政法特殊研究	4	
行政法特殊演習	4	
行政法合同演習	4	
国際法特殊研究	4	
国際法特殊演習	4	
国際法合同演習	4	

3. その他の科目

他専攻および他研究科に設置されている科目で、指導教授が履修を必要と認める科目については、「他専攻科目」として修了の単位に数えることができます（科目担当者と指導教授の印が必要。前述履修申告方法「Ⅱ時間割形式の「履修届」の記入について」参照）。ただし、後期博士課程在学者が修士課程設置の科目を履修する場合は対象外となります。学部および各研究所に設置されている科目を履修した場合には、成績表に記載されますが、課程修了に必要な単位としては扱われません（自由科目）。

4. 法学研究科の分野表

修 士		後 期 博 士	
科目区分	分 野	科目区分	分 野
自 専 攻 科 目	01-03-01	自 専 攻 科 目	02-02-01
他 専 攻 科 目	01-04-01	他 専 攻 科 目	02-03-01
合 同 演 習	01-02-01	合 同 演 習	02-01-01
外 国 法	01-01-01		
自由科目（指定）	01-30-01		
自 由 科 目	01-30-02	自 由 科 目	02-30-01

II 課程修了の要件

1. 修士課程

修士課程の修了要件は次のとおりです。

学則第40条 民事法学を専攻する者は、同専攻に設置された授業科目の内から24単位以上を含めて、法学研究科の定める授業科目の内から32単位以上を履修しなければならない。これらの単位の内には、同専攻に設置された合同演習若しくは総合合同演習の単位を各年度4単位以上、2年にわたり履修して、合計8単位以上含まなければならない。初年度においては、外国法4単位以上を含む合計24単位以上を履修することを原則とする。

② 公法学を専攻する者は、同専攻に設置された授業科目の内から24単位以上を含めて、法学研究科の定める授業科目の内から32単位以上を履修しなければならない。これらの単位の内には、同専攻に設置された合同演習若しくは総合合同演習の単位を各年度4単位以上、2年にわたり履修して、合計8単位以上含まなければならない。初年度においては、外国法4単位以上を含む合計24単位以上を履修することを原則とする。

③ 政治学を専攻する者は、同専攻に設置された授業科目の内から、24単位以上を含めて、本大学大学院の定める授業科目の内から30単位以上を履修しなければならない。

(以下省略)

学則第43条 修士課程の修了要件は、第40条に定めるところに従い、法学研究科に設置又は認定されている授業科目中32単位以上の授業科目を修得し、第109条に定める要件をみたすこととする。ただし、政治学専攻にあつては、授業科目の修得単位数は30単位以上とする。

② 修士論文を提出しようとする者は、当該年度において論文指導教員の指導を受けなければならない。

学則第109条 課程修了の認定は、研究科委員会が行う。

② 修士課程の修了要件は、大学院に2年以上在学し、各研究科修士課程所定の単位を修得し、かつ研究上必要な指導を受けた上、修士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学

期間に関しては、優れた業績を挙げた者については、大学院に1年以上在学すれば足りるものとする。

(以下省略)

2. 後期博士課程

後期博士課程の修了要件は次のとおりです。

学則第47条 後期博士課程に在学する者は、各年度において前条に定める授業科目につき、各専攻に設置された合同演習又は総合合同演習を含めて4単位以上を履修しなければならない。ただし、政治学専攻にあっては、論文指導を受けようとする教員の担当する又は指示する授業科目4単位以上を履修すれば足りる。

(以下省略)

学則第50条 博士課程の修了要件は、各年度において第47条に定める単位を修得し、第109条に定める要件をみたすこととする。

学則第109条 課程修了の認定は、研究科委員会が行う。

② (省略)

③ 博士課程の修了要件は、大学院に5年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学し、研究科博士課程所定の単位を修得し、かつ研究上必要な指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を挙げた者については、大学院に3年(修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。)以上在学すれば足りるものとする。

(以下省略)

*なお、上記要件の内、学位論文の審査および最終試験を除き、所定の教育課程を終えた段階で終了する場合は「単位取得退学」として扱われます(p.30「⑤ 在学期間の延長か単位取得退学か」の箇所を参照してください)。

Ⅲ 履修方法

具体的履修については、本書熟読の上、必ず指導教授と相談して決定してください。不明な点は、学事センター法学研究科係または学習指導に問い合わせてください。

1 修士課程：履修上限について

学則第40条第5項「各学年における授業科目の履修は、自由科目を除き40単位を超えることができない。」

2 修士課程：民事・公法学専攻の授業履修について

(1) 自由科目(指定)の履修義務について

修士課程：民事・公法学専攻留学生の一部に対する学部授業履修について民事・公法学専攻留学生

のうち、法律学の基本的専門科目の履修に不足のある者は、次のように学部専門科目16単位の履修が義務づけられています。

- ① 法学部法律学科設置の憲法Ⅰ・民法Ⅰ・刑法Ⅰの3科目に学部法律学科目の任意の1科目を加えた合計16単位を履修する。
- ② 上記の法律学科設置の憲法Ⅰ・民法Ⅰ・刑法Ⅰの3科目については、他学部（他学科）設置の憲法Ⅰ・民法Ⅰ・刑事法をもってそれぞれ代替することができる。
- ③ 前2項目については、学部の授業として履修するものであって、修士課程の履修要件である32単位には含まれないが、初年度に履修を求められている24単位に含まれるとともに履修上限の40単位にも含まれるものとする。
- ④ 従来履修した科目は、本人の申し出により上記の指定科目の一部を履修したものと評価して16単位の履修を軽減することがある。その場合には、履修を証明する文書を持参しなければならない。

注：履修にあたっては、指導教授の指導を受けなければならない。

- (2) 修士課程を1年で修了する場合、学則第40条第1項、第2項の「同専攻に設置された合同演習若しくは総合合同演習の単位を各年度4単位以上、2年にわたり履修して合計8単位以上含まなければならない」については、1科目（4単位）で十分と解してください。なお、履修にあたっては、十分に指導教授と相談してください。

3. 修士課程：政治学専攻の授業履修について

- (1) 授業履修にあたっての注意

学則第40条第3項では「政治学を専攻する者は、同専攻に設置された授業科目の内から、24単位以上を含めて、本大学大学院の定める授業科目の内から30単位以上を履修しなければならない」とありますが、授業科目の履修にあたり以下の点を配慮してください。

- ① 30単位のうちには、同専攻に設置された授業科目中、論文指導を受けようとする教員の担当または指示する授業科目を、各年度2単位以上含むこと。
- ② 初年度においては、合計20単位以上を履修すること。
- ③ 特殊研究、合同演習を履修するにあたっては論文指導担当教員以外の教員による担当科目も履修すること。

- (2) 自由科目（指定）の履修義務について

1998年度の学則の改正に伴い、これまで修士課程政治学専攻の修了要件であった基礎授業科目を廃止しました。基礎授業科目は、入学者の多様化と増加に対応するために、基礎知識の体系的教育の必要性が認識された結果、設置されたものでした。ところが、履修が入学者すべてに義務づけられていたために、基礎的な知識は十分で、より高度な知識の習得を求める者にとっては無用の負担を強いることになっていました。そこで、基礎授業科目は廃止とし、それに代わり専攻領域の研究に専念できるように学則を改正しました。

ただし、他大学・他学部からの入学者あるいは社会人入学者等は、政治学の基礎的知識の履修が不十分という場合が考えられます。これらの場合には、法学部政治学科に設置されている政治学関連科目1科目ないし各部門の基礎的な専門科目のうち1～2科目、あるいはその双方（最大限3科

目)の履修が義務づけられることになりました。履修を指示された者は、それらの科目に合格しない限り、修士論文の提出は認められませんので注意してください。

履修の方法は次のとおりです。

- ① 学習指導が該当する学生を判断し、指導教授に通知する。
- ② 通知を受けた指導教授は、該当する学生にどの科目の履修を義務づけるかを検討する。
- ③ 指導教授を通じ、研究科委員会に履修指定科目を申請、決定する。
- ④ 学生は、指導教授の指示により、指定を受けた科目の履修登録を行う。ただし、研究科委員会の決定が履修申告時に間に合わないことがあるので、その場合には履修修正期間に必ず行うこと。申告を怠った場合には、その年度の成績はつかないので注意すること。
- ⑤ 自由科目(指定)は、基礎的な知識を補うために履修するものであり、修士課程の履修要件である30単位には含まれない。ただし、初年度に履修を求められている20単位には含まれる。

4. 専修ユニットの導入について(修士課程)

法学研究科では、1998年度から修士課程の一部に専修ユニットを実験的に導入しました。専修ユニットは、学際的なスペシャリストを養成することを目指すもので、法学研究科の設置科目だけでは学ぶことができない分野を含めた学習・研究を可能にするものです。

2005年度に設置される専修ユニットについては、4月以降掲示板等を通して案内する予定です。専修ユニットを選択する院生は、その履修について、コーディネーター教員の指示を受けてください。

当面は、コアになる法学研究科設置科目に加えて、他研究科設置科目を履修することになりますが、将来的には他大学院研究科の設置科目を履修することも考えられます。

なお、専修ユニットは、これまでの研究科修士課程の教育制度にとって代わるものではなく、院生の履修にあたってモデルメニューを提供することによって、体系的な学際的履修を促進するものです。

5. 学部授業の履修について

学部授業および同等レベルの授業の履修は学則上自由科目としてしか履修できませんが、やむを得ない事情がある時は、指導教授が研究科委員会に申請し、審議を経た上で課程修了の単位として許可される場合があります。しかし、各専攻の趣旨に沿った科目が許可の対象となりますので申請された科目がすべて履修可能となるわけではありません。

6. 特殊演習について(修士・後期博士課程)

① 特殊演習の設置目的と履修できる学生の範囲

学則に見られる特殊演習を、政治学専攻においては、原則として以下のような要領で実施します。特殊演習は、担当教員の論文指導を受けている学生を中心に、論文指導対象学生の効果的な研究指導および修士論文、学位論文等各種論文作成指導を行うことを主たる目的として設置されています。こうした目的をもって設置される大学院ゼミであると考えてください。

原則として特殊演習に参加できる学生は、当該授業科目担当教員を論文指導教員としている者の他に指導下にある研究生に限ります。

② 特殊演習と論文指導

特殊演習の実施方法、内容については担当教員が決定しますが、担当教員の判断により設置しない場合もあります。しかし、従来の個別的な論文指導は特殊演習の設置いかんにかかわらず現行のまま存続しています（特殊演習が設置された場合には、原則として論文指導対象学生は履修しなければなりません）。

③ 特殊演習設置の理由

近年、大学院在籍者数の増大により、一専修授業科目あたりの出席者数が増えたこと、また、一教員当たりの論文指導対象学生が増えたため、論文指導対象学生に対する研究、教育活動が不十分になるとの懸念が生じたためです。

④ 法律学科、他学部専任者を主たる担当者とする特殊演習授業にあってはこの限りではありません。

7. プロジェクト科目について（修士・後期博士課程）

社会環境の急激な変化にともなって教育体制を拡充することが求められていますが、法学研究科では、現代社会にふさわしいもので、従来の法学研究科に欠けていたテーマを取り上げるために、1998年度からプロジェクト科目を導入しました。

プロジェクト科目には、講義形式と演習形式がありますが、多くの場合、特定の問題に関して、塾内外の専門家をゲスト・スピーカーとして招き、そのレクチャーと参加者全員によるディスカッションを通じて特定問題を深く解明することを目指しています。

各プロジェクト科目の詳細は、講義要綱を参照してください。

IV 入学前の履修単位の認定について

「法学研究科修士課程に入学する前に他大学院において履修した授業科目についてその修得した単位を入学後の法学研究科の単位として認定することがある」（学則第42条第4項）。認定された単位は、学則第42条第3項により履修を許可された単位を含め10単位を超えない範囲で課程修了に必要な単位として算入されます。認定を希望する場合は、所定の申請書（学事センターで受け取る）に必要な書類を添付し、指導教授および学習指導の承認を得たうえで、学事センターに提出してください。提出の期限は、第1学年次の5月10日とします。

なお、認定された単位は、修士課程の履修要件である32単位（政治学専攻にあっては30単位）には含まれますが、初年度に履修を求められている単位24単位（政治学専攻にあっては20単位）には含まれません。

V 修士論文提出について（在学1年目に修士論文を提出する場合）

修士論文は、通常2年間にわたり在学し、民事・公法学専攻に所属する者は32単位以上（前述Ⅲ履修方法2-(2)を参照）を、政治学専攻に所属する者は30単位以上を履修合格した上で、必要な論文指導を受けて提出し、研究科委員会の審査を受けることになっています。ただし、学則第109条第2項では、在学1年で修士論文を提出することを認めています。

この場合に政治学専攻では、以下のように修士論文提出の条件が定められています。

- ① 履修した授業科目の成績が優れ、かつ修士論文の内容が最低限2年およびそれ以上在籍した者により提出された修士論文と同等以上の優れた内容を持ち、修士論文として要件を満たしていると認定できる場合であること。
- ② さらに、
 - (a) 第1学年度内に学則第40条第3項に従って30単位以上を履修し合格すること（したがって、第1学年度内に修士論文の提出を希望する者は、履修申告時に30単位以上を申告しなければならない）。
 - (b) 学年度末の修士論文審査に合格しなければならないが、修士論文提出にあたり、さらに論文提出要件を付加することがあるので、第1学年度修士論文提出予定者は学習指導の指示に従うこと。

VI 後期博士課程の研究指導体制について

1. はじめに

後期博士課程に在学できる最大限の期間は6年間です（学則第128条）。この間に以下の要件を満たすと後期博士課程を修了することができます（学則第50条、第109条）。

- ① 3年以上（学則第109条〔学則第50条但書〕により、法学研究科委員会において特に優れた研究業績を挙げたと認められた場合は1年以上）在学し、
- ② 各年度において学則第47条に定める必要な単位を修得し、
- ③ 研究上必要な指導を受けたうえ、
- ④ 学位論文の審査および最終試験に合格すること

従来、3年から6年の期間内で、学位論文を完成させることができず、④の要件を欠くため、「単位取得退学」となることが圧倒的に多いようです。後日、「課程博士」として博士論文を提出することもできますが、論文の提出時期が遅れますと、大学院後期博士課程に在学していたことを前提にした「課程博士」としての審査を受けることができなくなり、「論文博士」としての審査となります。そこで、法学研究科は③の要件を充実させ、後期博士課程の在学期間内に博士論文の完成を積極的に奨励するための研究指導体制を設けました。この体制は、在学期間中の研究成果の発表を義務的に課した点に特色がありますので、以下の新指導体制の説明を熟読し、その目的と内容を十分に理解して、その上で自己の研究成果をまとめるようにしてください。

2. 博士論文

後期博士課程の目的は「専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う」（大学院設置基準）ことにあり、具体的には修士課程における必要な授業科目の履修（コース・ワーク）を基礎として、博士論文作成のための研究指導を受けることです。

制度上後期博士課程の標準年限は3年とされ、1年から6年の間に学位論文を提出することが期待されます。後期博士課程第1学年次の春学期に、指導教授の指導の下に「研究計画書」を提出して論文作成に取りかかり、第3学年次秋学期半ばまでに論文を完成して研究科委員会に提出し、審査に合

格の上、第3学年次学年度末に学位が授与されることを想定しています。しかし、現実には3年間で学位論文を完成することはかなり困難であるため、法学研究科委員会としては、学生諸君の学位論文作成を少しでも容易にするため、次のような研究指導体制をとっています。すなわち、「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」「合同論文指導（論文指導Ⅲ）」という項目を設け、それぞれについて合格の判定を得たことで研究上必要な指導を終了したことにし、それによってはじめて博士論文を提出することができるという仕組みです。

① 研究計画書

博士の学位を取得しようとする者は、学位論文研究計画書を法学研究科委員会に提出しなければなりません。研究計画書は論文の構成や研究方法の設計自体に係るものですから、単に何を研究するかという対象の選定や「テーマ」の案ではありません。したがって、計画書を提出し、研究科委員会で承認を得た以上、頻繁に内容を変更することは望ましくありません。提出は指導教授の承認を得た上で、次の要領に従ってください。

この計画書は、他の研究者、学生からの照会の便宜のために学事センターで閲覧させています。

1. 提出期限 後期博士課程第1学年次の6月3日（他専攻，他研究科，他大学院より進学した者はコース・ワークを必要とする場合もあるので，その場合に限っては第2学年次の6月3日の提出を認めますので，事前に学事センターに申し出てください。）
2. 提出場所 学事センター窓口
3. 作成要領 以下の事項を明確にしてください。
 - (a) 対象とするテーマ
 - (b) 研究課題（あるいは論点，問題の所在，仮説）
 - (c) 研究上の意義（先行研究との関連）
 - (d) 研究上用いる手法，分析方法
 - (e) 利用する主たる資料，情報，データ
 - (f) 研究の時間的計画・その他の制約（外国調査，フィールドワーク等）
 - (g) 研究の発表の方法（特に，合同論文指導までに二本の学術論文を発表する「積上方式」と，統一的な論文を一括して用意する「一括方式」のどちらかをとるかは十分検討してください）
4. 提出部数 3部（コピー可）
5. 書 式 A4判縦，横書き，ワープロ使用4,000～6,000字（1頁1,000～1,200字），200字詰原稿用紙20～30枚程度，バインドして製本するので余白を十分に取ってください。表紙は本書巻末にとじ込まれている所定用紙を使用，残り2部はそのコピーをつけてください。
6. 計画の変更 研究の変更は1年間は認めないので，計画書は慎重に考慮して作成してください。前年度に提出した研究計画書の内容・方式に変更があった場合は，新しい計画書3部と変更届（所定用紙：学事センターにて配布）を指導教授および学習指導の承認を得て提出してください（提出期限6月3日）。

② 積上方式

積上方式とは研究計画書に基づいて論文作成にとりかかり，完成した部分から順次指導教授の指

示により、学術雑誌、学術書に発表、公刊し、学位論文を完成する方式です。具体的には学位論文の一部を1本の学術論文として学術雑誌、学術書に公刊した時、申請に基づき研究科委員会の審査に合格すれば「論文指導Ⅰ」に合格の評価が与えられます。ついで次の1本を公刊した時、同様に「論文指導Ⅱ」に合格の評価が与えられます。「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」に合格した場合、「合同論文指導研究発表会」で学術雑誌、学術書に公刊を予定された3本目の論文（これに1,2本目の論文の内容を加味することができる）を発表し、この審査に合格すれば「合同論文指導（論文指導Ⅲ）」に合格の評価が与えられます。「論文指導Ⅰ・Ⅱ」については、論文指導採点申請書（所定用紙：本書巻末とじ込み）にて学事センターに申請してください。申請にあたり、論文発表の学術雑誌、学術書が掲載に際し「審査制度」を採っていない場合には、指導教授の推薦状（論文指導採点申請書の裏面）を添えてください。

なお、論文の掲載が「法学政治学論究」の場合は必要ありませんが、「法学政治学論究以外」の場合は審査のための論文を2部提出してください。

③ 一括方式

一括方式とは研究計画書に基づいて論文作成にとりかかり、ほぼ論文を完成する見通しがたった段階で、指導教授の指示により「合同論文指導研究発表会」で中間報告を行い、必要な手直しを加えて学位論文を完成する方式です。

具体的には学術雑誌、学術書に公刊の予定された「学位論文中間報告」が完成した段階で研究科委員会に原稿を提出し、「合同論文指導研究発表会」で報告し、審査に合格すればその学年度末に「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」「合同論文指導（論文指導Ⅲ）」の全てに同時に合格の評価が与えられます。ただし、「合同論文指導研究発表会」で報告する研究の基になる原稿は質・量の両面で、少なくとも「積上方式」の「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」「合同論文指導（論文指導Ⅲ）」として発表される3本の論文に相当するものでなければなりません。また、公刊が予定された論文についての報告の場合は、「論文指導（一括方式）採点申請書」（所定用紙：本書巻末とじ込み）に当該学術雑誌または学術書の編集者による証明書を添付しなければなりません。

※積上・一括方式のどちらを選ぼうとも論文審査の対象となる論文は、後期博士課程入学以降に公刊されたものでなくてはなりません（入学以前に完成し公刊準備されていた論文は審査の対象とはならないので論文公刊のタイミングに注意してください）。

※一括方式による論文指導の採点の具体的な手続きについて

1 手続の概要

- (1) 論文指導の採点を希望する者は、論文指導採点申請書と論文2部を学事センターの窓口に出す。これは、合同論文指導発表会の資格の認定申請を兼ねるものである。
- (2) 法学研究科委員会は、申請に基づき提出された論文を基に申請者に発表資格があるかどうかを審査するため、指導教授以外の適当な法学研究科委員を1名審査員と定め、審査を委嘱する。
- (3) 審査員の審査に基づき、委員会は資格の有無を判断する。
- (4) 資格が認められた場合は、申請者は発表会で発表することができる。
- (5) 発表会での発表に関しては、資格審査員のほかに法学研究科委員の中から審査員1名を選びこの2名の審査員と指導教授が発表と提出された論文に基づき論文指導の採点案を作成する。
- (6) 報告の行われた後の最初の法学研究科委員会は、審査員の採点結果を審議して可否の判定を行う。

2 発表資格認定のための基準

論文は質量ともに積上方式の3論文に相当するものでなければならない。

3 発表資格認定者

指導教授を除いた論文の内容に適切な法学研究科委員（1項(2)参照）

4 認定に要する期間

申請が研究科委員会に出されてから1か月以内

5 申請の受付

学事センター窓口

6 申請に必要なもの

申請書および論文2部

7 論文指導の採点

発表と論文を基に、2項の基準に照らして指導教授と法学研究科委員2名で採点案を作成する（1項(5)(6)参照）。なお、積上方式の場合は、論文指導Ⅰ、論文指導Ⅱについて合格の判定を受けている場合は、特に資格審査は行いません。合同論文指導の審査のために特に法学研究科は、審査員2名を選び審査にあたります。このための手続きは、上記の一括方式の手続きと同じです。

④ 合同論文指導研究発表会

「合同論文指導研究発表会」は、民事・公法学、政治学それぞれに年2回、各学期末に開催を予定しています。従来の例では6月下旬と1月下旬の金曜日ですが、やむを得ぬ場合の変更もあり得るので注意してください。専任者および後期博士課程単位取得退学者、研究生、慶應法学会会員は、専攻のいかにかわらず、自由にどちらの「研究発表会」にも出席ができます。なお、修士課程、後期博士課程在籍者は民事・公法学、政治学いずれかの研究発表会に出席しなければなりません。「研究発表会」の報告者は、申請の時点で「積上方式」の場合は研究計画に基づく論文（目安として「学術論文」2本程度）が発表され「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」についての合格の判定を得ている者、「一括方式」の場合は報告予定の論文が質・量の両面で、少なくとも「積上方式」の「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」「論文指導Ⅲ（合同論文指導）」として発表される3本の論文に相当するもので、研究科委員会の審査に合格した者でなければなりません。司会、コメンテーターは主として専任教員が担当します。なお、報告者は発表用レジュメを指定の書式を使い事前に配布可能なように準備しなければなりません。持ち時間は、一人1時間で、その内容は報告45分、質疑応答15分です。報告者の募集は、春学期については6月上旬（関連掲示は4月下旬）に、秋学期については12月中旬（関連掲示は10月下旬）に行います。

合同論文指導研究発表会で発表する場合の資格は上記説明のとおりですが、このための応募者がいない場合はそれに関係なく、誰にでも自己の研究を発表する機会を与えています。

⑤ 在学期間の延長か単位取得退学か

後期博士課程に3年以上在学し、定められた単位を修得し、「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」「合同論文指導（論文指導Ⅲ）」に合格した場合、(1)引き続き在学して学位論文を完成する方式と (2)単位取得退学し、在宅（在外）研究を続けて学位論文を完成する方式のいずれかを選択しなければなりません。(1)の方式を選択した場合は1年毎に「在学期間延長願」を提出し、許可されれば、

後期博士課程入学後休学期間を除いて6年に達するまで在学を延長できます。休学期間を除いて6年に達した時は単位取得退学になります。

なお、(2)の方式の場合は、各学期末に文書で指導教授に研究の進行状況を報告しなければなりません。また3年以内に博士論文を提出する目処がある場合に限り、三田メディアセンターの図書貸出を受けることができる「塾員貸出券」(有料)を発行しています。詳細は図書館1階メインカウンターをたずねてください。

有効期間：申込日より6ヶ月もしくは1年

サービス範囲：三田メディアセンターに関しては大学院生と同等の貸出規則を適用する。日吉、理工学、湘南藤沢の各メディアセンター、白楽サテライトライブラリーへの入館・閲覧が可能。他大学図書館への紹介状の発行。

⑥ 課程博士と論文博士

課程博士の場合は後期博士課程に在学し、定められた単位を修得し「論文指導Ⅰ」「論文指導Ⅱ」「合同論文指導(論文指導Ⅲ)」に合格し、かつ課程在学中あるいは単位取得をした場合には入学後6年以内に学位論文の審査に合格すれば『課程博士』の学位が与えられます。これに対して『論文博士』の場合は、まず学位論文を審査することについて研究科委員会の承認を必要とし、その上で論文の審査に合格し、さらに大学院後期博士課程の修了者と同等以上の学識があるという学識の承認を受けなければなりません。

⑦ 論文発表誌

専攻領域によっては必要に応じて論文が発表できる適当な学術雑誌のない場合もあります。そのため平成元年度より従来の「大学院論文集」にかわる「法学政治学論究」を発刊しました。なお、経過措置として当分の間、従来の「大学院論文集」も発刊します。雑誌刊行のため、大学院修士課程あるいは後期博士課程に入学した者は「論文刊行費」を納めなければなりません。「法学政治学論究」に論文を発表しようとする者は後述の投稿規程を参照してください。論文は、同編集委員会の審査に合格しなければ掲載されません。「大学院論文集」は従来どおり原則として指導教授の推薦があれば掲載されます。

VII 学位請求論文作成について

1. 使用言語について

- (1) 修士論文および博士論文は原則として日本語で作成してください。
- (2) ただし、下記において、日本語以外の外国語で作成することを認めることがあります。

① 修士論文

論文題目提出日前(11月中旬頃)までに、使用する外国語、論文のレジюме、日本語で作成・提出しないことの合理的理由を記した文書を、指導教授の承認(署名捺印)を得たうえで、指導教授の手を経て法学研究科委員会に提出し、その承認を得なければなりません。

承認された場合には、論文提出時に日本語で書かれた論文要旨(6,000字)を併せて提出しなければなりません。

② 博士論文

日本語で作成・提出しないことに、より積極的な理由がある場合には、使用する外国語、論文のレジュメ、その理由を記した文書を、指導教授の承認（署名捺印）を得たうえで、指導教授の手を経て法学研究科委員会に提出し、その承認を得なければなりません。なお、論文博士において、指導教授が居ない場合は、それに代わる研究科委員の承認（署名捺印）を得たうえで、研究科委員の手を経て法学研究科委員会に提出し、その承認を得なければなりません。

いずれにおいても、承認された場合には、論文提出時に日本語で書かれた論文要旨（6,000字）を併せて提出しなければなりません。

2. 製本について

(1) 学位論文は、原則として「A4判縦」とします。

- ① 縦書き、横書きの別は問わない。
- ② ワードプロ使用が望ましい。

(2) 製本について

- ① 本文の縦書き、横書きにかかわらず、原則として「A4判縦」で製本する（縦書きの場合は右綴じ、横書きの場合は左綴じとする）。
- ② 製本の表紙の表示は、本文の縦書き・横書きに合わせるものとする。
- ③ 製本の背文字は、本文の縦書き・横書きにかかわらず縦書きとする。
- ④ 製本時のレイアウト、表示内容は、後述の見本を参照のこと。
- ⑤ 製本は、黒表紙で、白または金文字とする。
- ⑥ 製本の業者は指定しない。

(3) 製本の部数について

学位論文は、審査のため3部提出する（3部とも製本することが望ましい）。

3. 三田メディアセンターからの修士論文複写許諾協力依頼

三田メディアセンター（図書館）では修士論文を保存し利用に供しています。利用者が修士論文を学術目的のために「複写する」ことに対し、現行の著作権法下では、事前に著作権者からの許諾を必要としています。

修士論文を学事センターに提出する際に、「修士論文複写許可回答用紙（メディアセンター用意）」に必要事項を記入の上、提出してください。なお、今年度の学位授与名簿に記載されなかった場合は、メディアセンターが責任をもって破棄します。

VIII 留学について

国外留学申請書を提出し許可されると、「休学することなく外国の大学の大学院に留学することができる」（学則第124条第1項）。留学申請が認められて留学した場合は、「1年間に限り在学年数に算入される」（同条第2項）。留学（期間延長を含む）を希望する場合は、所定の申請書に必要な書類を添付し学事センターに提出した上で、学習指導の承認を得てください。帰国後も速やかに必要な書類を学事

センターに提出してください。

また、「留学中に修得した授業科目の単位は（学則第42条第4項により認定された単位を含めて10単位を超えない範囲で）課程修了に必要な単位として認定されることがある」（同条第3項）。単位認定を希望する場合は、申請書（所定用紙：学事センターで受け取ることにその旨記した上に、単位取得認定に必要な書類（授業のシラバス、成績証明書等）を添付して学事センターに提出してください。研究科委員会および同単位取得認定小委員会の審議を経た上で、学則の規定に従って認定を行います。認定には1か月以上の期間がかかることがあるので、申請は各学期前半に行ってください。

もちろん、留学申請でなく休学して留学することもできますが、休学であるのでこの場合の留学期間は在学年数に算入されず、また外国の大学の大学院で修得した単位は上記のように単位認定されることはありません。留学期間中の在学料等については、本書巻末の「留学期間中の学費の取扱いに関する規程」を参照してください。

IX 在学期間の延長について

在学期間延長については既に説明したところですが、申請の理由が妥当であれば、最長在学期間（6年間）の範囲内で1年単位で延長が認められます。しかし、定員との関係で、延長の理由が妥当でしかも最長在学期間内であっても、延長を認めない場合もあります。この場合には希望すれば「研究生」（学則第153条）として認められることがあります。在学期間延長の場合や定員との関係で研究生になった場合の授業料等については、本書巻末の「大学院在学期間延長者並びに年度途中の修了者に対する在学料その他の学費に関する取扱い内規」を参照してください。

在学期間延長が認められた学生は年度の始め、指導教授に承認印を貰い、定められた日時に履修届を学事センターに提出してください。授業を特に履修・合格する必要はありませんが、論文作成について具体的に指導を受けることとなりますので、指導教授の授業に出席することが望まれます。なお、在学期間延長中に退学した場合は単位取得退学となります。

X 法学政治学論究について

「法学政治学論究」刊行のための費用の一部は、諸君が論文刊行費として納入したものに基いているので下記に掲げた投稿規程に従って奮って応募してください。投稿された論文は、掲載に適しているか否かを専門の編集委員によって毎回厳格に審査されるので投稿したら必ず掲載されるというものではありません。雑誌は発刊されるたびに掲示を出すので、決められた期間内に受け取ってください。この配布期間内に取りに来なかった場合は、受け取れなくなるので注意してください。

『法学政治学論究』投稿規程

1. 投稿資格

原則として大学院法学研究科修士課程以上の在学学生、研究生、修士の学位を有する者および後期博士課程単位取得退学者とする。ただし、大学卒の者であっても、研究機関、マスコミ・言論機関、その他企業・団体の研究部門等において研究に従事している者に対しては、門戸を開放する。

2. 原稿内容

法律学，政治学，社会学に関する学術論文

3. 原稿形式

- ① 本誌の使用言語は日本語である。また本誌は原則としてすべて掲載時には縦組みである。
- ② ワードプロセッサ・ソフトウェア（以下ワープロソフトとする）で作成し，打ち出した原稿を提出する。提出は執筆要領（後記12.）に示すとおり，縦組みでも横組みでもよいが，**本誌は縦組みであるので，年号，日付，数字等の数詞表記はあらかじめ縦組みを前提として執筆すること。**
- ③ 手書き原稿・ワープロ専用機使用の場合は，投稿規程を三田学事センターで入手し，それに基づいて執筆すること。
- ④ 数式等が多く，性質上横組みが相当と思われるものについては横組みでの掲載をまれに許可することもあるが，その場合は，提出前に編集委員会に問い合わせること。また許可を受けた場合には，数詞等の表記については横組みを前提として準備すること。

4. 原稿分量

- ① 現在の投稿の趣旨に従い，総字数を3万2千字以内とする。
- ② ワープロソフトで執筆する際の原稿分量は**1行40字の1頁20行で800行以内**（注を含める）とする。図および表は，1点あたり10行分（400字相当）に換算する。ワープロソフト使用時の注の体裁は本文と同様とする。**総行数を厳守すること。**
- ③ 投稿者は自ら原稿を検証し，原稿提出時に総行数を申告する。

5. 提出原稿の受理について

規定字数，原稿形式および提出方法（後記7.）の遵守は，提出原稿の受理についての形式的な必要条件である。この要件に合致していない原稿は審査しない。

6. 論文提出・刊行期日（各年）

	*提出期日	刊行期日
春季号	11月15日	3月15日
夏季号	2月10日	6月15日
秋季号	5月15日	9月15日
冬季号	8月16日	12月15日

*当日が休日に当たる時はその翌日。その翌日が振替休日に当たる時は翌々日。

7. 提出方法

本論文2部（散逸しないように綴じること）とフロッピー・ディスク（後記12. 執筆要領Ⅲ参照）に次の書類を付し封筒に入れて，学事センター窓口へ持参，または郵送すること。郵送の場合は，提出期日必着。遅延は，一切認めない。提出した論文は，審査の合否にかかわらず，一切返却しない。

- ① 提出用紙（所定用紙：本書巻末とじ込み。指導教授の推薦印を付すこと）
- ② 論文標題（2種類。後記12. 執筆要領Ⅱ ①参照）
- ③ 論文細目次（全ての見出しを掲記）
- ④ 論文要旨（1,000字程度）
- ⑤ 履歴書（所定用紙：慶應義塾大学大学院法学研究科に在籍していない者のみ添付）
- ⑥ 審査結果を通知するための封筒2通（長型3号（120×235）を用意し，宛先を明記し，90円の

切手を貼付すること)

(②～⑤の提出部数はオリジナル1部、コピー1部の合計2部のこと)

(注) 持参、郵送を問わず、必ず論文の控を取っておくこと。

8. 論文掲載費

論文刊行費を納めていない者(研究生および現在慶應義塾大学大学院法学研究科に在籍していない者)については、掲載費として20,000円を徴収する。掲載費は、審査合格の通知を受けた時、納めるものとする。

9. 審査結果の通知

審査結果は提出された封筒を利用して連絡する。結果発送は翌月の中旬以降に行う。

10. 論文提出受付窓口

直接の場合 慶應義塾大学三田学事センター窓口

郵送の場合 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学三田学事センター法学研究科係

11. 問合せ先 問い合わせは郵送またはFAXで行うこと。

郵送の場合 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

(注) 封筒表面左下に「論究問合せ」と記入し、返信用封筒(宛先記入の上、90円切手を貼付)を同封すること。

FAXの場合 03-5427-1578

慶應義塾大学研究室内

法学部教授 小山 剛(編集委員会幹事)

12. 執筆要領

I 原稿について

- ・表記が論文の中で、不統一にならないように細心の注意を払うこと。
- ・誤字脱字がないように注意すること。
- ・日本語として正確な表現であるかまた適切な表現であるかを、チェックすること。

II 原稿の体裁について

① 標題

- ・審査に際し、誰が著者であるかを伏せるため第一頁には、標題のみを書く。なお、別に、原稿と同種の紙に標題、氏名および在籍大学院名、課程、学年もしくは在職機関名と地位を書いて添付すること。

② 目次

- ・用紙をあらため、章・節相当の見出し(下記③参照)のみで作成する。

③ 本文

- ・用紙をあらためて書き出すこと(目次の余白に続けて書き出さない)。
- ・見出しには、第、章、節等の文字を使用せず(スペースの余裕がないため)、見出し番号は以下に統一する。

章 一、二、三 ……………

節 (一)、(二)、(三) ……………

項 1, 2, 3 ……………

目 (1), (2), (3) ……………

- ・見出し番号と見出し文句との間は1字あけて、点は付けない。本文における、章、節相当の見出しの前後は1行あける。
- ・本文中で既に発表された自説に言及する場合、著者が誰であることを伏せるため、その学説の主張者として氏名を書き、「私がかつて指摘したように……」といった、この論文の著者が誰であるか分かるような表現は用いないこと。
- ・引用文は、引用文であることを明示するため、鉤括弧でくくる。長文の引用の場合は、独立した段落とすることが望ましいが、その際には、本文よりも1字下げて書く（原則として、本文よりも小さな活字で組むので、括弧は不要）。
- ・ワープロソフトで執筆する際、和文は等幅フォントの全角、欧文は等幅フォントの半角を用いること。日本語のフォントと欧文のフォントは同じものを用いること。サイズは11ポイント以上とすること。

④ 注

- ・注は文末注とし、本文末尾に一括して掲げる。番号は全体を通し番号とする。注の書き出しは用紙をあらためる。ワープロソフトの注機能を使用する場合、体裁は半角算用数字とする。注のフォントも本文と同じものを用い、サイズは11ポイント以上とする。（「マイクロソフト・ワード」の注機能を用いる場合には、本文を40字20行に設定した上で、脱稿後あらためて注を編集し、行間を2行とるように体裁を整えることとする（後記、「マイクロソフト・ワード」の場合の設定事項③を参照）。
「一太郎」の場合には本文の体裁が注の領域の行間には反映されるが、フォントサイズには反映されない可能性があるため、念のため注の領域を全選択して11ポイントとすること。）
- ・ワープロソフトの注機能を使用しない場合、体裁は(1)とする。
- ・著者が誰であることを伏せるため、引用文献の著者名については氏名を書き、拙著、拙稿等の語は使用しないこと。

⑤ 図表

- ・図および表の原稿は、本文原稿とは別にし、組込箇所を本文原稿中の希望箇所上部に「表1入る」という形で指示する（ただし、組み上がりの体裁上、必ずしも指示通りにいかない場合がある）。
- ・図および表は、1点ごとに1枚に書くこと（1点が数枚にわたったり、数点を1枚に書いたりしない）。
- ・手書きの場合、図は、方眼紙に少し大きめに、表は集計用紙に書くことが望ましい。用紙は本文原稿用紙と異なってもよい。
- ・見出しは、表1、図1という形に統一する。

⑥ その他

- ・原稿は必ずダブル・クリップで綴じること。
- ・本文および注原稿全体を通して、通し番号（ページ数）を付す。
- ・図および表の原稿は別に綴じ、本文および注原稿からの通し番号を付す。

・ワープロソフト設定事項については、本投稿規程末尾を参照のこと。

Ⅲ 提出形式について

・原稿は、以下の形式にのっとして作成し提出すること。

- ① 活字原稿（ワープロソフトからプリントアウトした原稿，ならびにそのファイルとテキストファイルの2つを保存したフロッピー・ディスク）を提出する。
- ② ワープロソフトのファイルで提出する者も，不測の事態に備えてテキストファイルを必ず添付すること。
- ③ **ワープロソフトによる提出の場合，フロッピー・ディスクのラベルにも，論文の総行数を記載することとする。**「マイクロソフト・ワード」の場合，「ツール」－「文字カウント」で文末注を含めた行数が，論文の総行数となる。「一太郎」の場合，「ツール」－「文書の文字数」で「脚注も数える」をチェックした状態の行数が，論文の総行数となる。

・提出物の注意点

- ① **論文は紙に打ち出した原稿とともに，その原稿を作成したワープロソフトのファイル，およびテキストファイル（MS-DOS形式）の2つのファイルを保存したフロッピー・ディスクを必ず提出すること。**提出するテキストファイルでは，注もテキストとして打ち出す。また，フロッピー・ディスクのラベルに使用オペレーション・システム（Windows / Mac など），使用ソフト名とバージョンを記す。
- ② 原則として，1.44MBで初期化（フォーマット）した2HDのフロッピー・ディスクで提出する。
- ③ 審査は紙面によって行われるため，万が一両者の内容が異なる時，紙面の方が優先される。

・打ち出し時の注意点

- ① 横書きまたは縦書きのいずれでもよい。横書きの場合は，A4判・無地（無罫線）の用紙を縦置きにして打ち出す。縦書きの場合は，A4判・無地（無罫線）の用紙を横置きにして打ち出す。
- ② 本文も注も，ともに文字は11ポイント以上の大きさにすること。
- ③ 文字以外の論文の要素（図および表）は，本文中に含めず，別紙に1枚ずつ印刷し，本文原稿中に組込箇所を指示すること（指示方法は前記Ⅱ⑤）。表などをエクセル等のソフトで作成した場合は，印刷所で利用できる場合もあるので，原稿ファイルとは別ファイルとして，同一のフロッピー・ディスクに保存して提出すること。
- ④ 固有名詞などについて JIS 漢字コードに規定されている以外の漢字を使用する場合や，機種依存の特殊文字や記号については，原稿には別の記号（例えば ■，★，＝ など）を仮に入力しておき，後で，打ち出した原稿に赤字で手書きすること。なお中国簡体字は可能な限り，JIS 漢字コードに定められている漢字に置き換えること。注などにおいてギリシア，ロシア，アラビア各文字やハングル等を使用する場合には，あらかじめ編集委員会に問い合わせ，指示を受けること。

「マイクロソフト・ワード」の場合の設定事項〔Microsoft Word 2002 による〕

① 「ページ設定」

投稿規程に定められているとおり，1頁40字×20行とする。余白は，上下左右とも25mmとする。

（操作）「ファイル」－「ページ設定」

－「文字数と行数」

- 「文字数と行数を指定」、文字数40字、行数20行とする。
 - 「フォントの設定」、日本語・英数字用ともに等幅の明朝体（MS 明朝・JS 明朝など）で11ポイントとする。
- － 「余白」
- 上下左右とも25mm と設定する。
- ② 句読点（句読点も全角に設定）
- （操作） 「ツール」－「オプション」
- － 「文字体裁」
- 「文字間隔の調整」を「間隔をつめない」と設定する。
- ③ 「注」
- 「マイクロソフト・ワード」の場合、本文のページ設定が注の領域に反映されない場合がある。したがって注の領域は、執筆が終了した段階で以下のように体裁を整えることとする。
1. 注の領域を全選択する。
 2. 「書式」－「段落」で、行間を「2行」と設定する。
- ④ オートコレクト機能
- オートコレクト機能の「箇条書き」の機能をオフにすること。
- （操作） 「ツール」－「オートコレクトのオプション」の「入力オートフォーマット」の項目で、箇条書きの項目のチェックマークを外す。

「一太郎」の場合の設定事項〔一太郎バージョン11による〕

- ① 「文書スタイル」
- 投稿規程に定められているとおり、1頁40字×20行とする。余白は、上下左右とも25mm とする。
- （操作） 「ファイル」－「文書スタイル」－「スタイル」と進むと出てくる。
- － 「文書スタイル」の画面で
- 「字数・行数優先」にチェックマークを入れる。字数40字、行数20行とする。
 - 同一画面の「マージン」の欄で上端、下端、左端、右端ともに25mm と設定する。
 - 同じ「文書スタイル」の画面で「フォント」の画面を開き、「和文フォント」の欄を等幅の明朝体（MS 明朝・JS 明朝など）と選択し、「欧文フォント」の欄で「和文フォント」を選択する。
- 同一画面の「文字サイズ」の欄でフォントのサイズを11ポイントとする。
- ② 「注」
- 文末注とする設定等は次の通り。
- （操作） 「挿入」－「脚注／割注／注釈」と進んで、
- － 「脚注」の画面で、
- 「脚注オプション」を選択して、その画面で脚注番号の数字種類を選択して半角アラビア数字に設定する。
 - 同一画面下部の「脚注エリアの位置」を文書末に設定する。

XI 後期博士課程特別研究奨励費について

後期博士課程在籍者を主たる対象者とし、学生の研究助成のために、特別研究奨励費を、法学研究科では1993年度より設置しています。同奨励費の概要・取得資格・条件については春学期中に発表するので掲示に注意してください。

XII 後期博士課程の受験外国語と外国語等学力判定制度について

1. 後期博士課程入学のための受験外国語は、法学研究科委員会の認める外国語（母国語を除く）2国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語・スペイン語・ロシア語・朝鮮語・日本語以外の語学を希望する場合は、問い合わせてください）です。ただし、1つの外国語については、史料読解か統計学のいずれか一方を選択し、これをもって代替することができます。

〈注〉 史料読解—古代から昭和10年代までを含む

受験生は、その専攻分野に関わりなく、1つの外国語の代わりに史料読解か統計学のいずれか一方を自由に選択することができるものとする。

2. 以下の要領で後期博士課程受験のための外国語等学力判定制度を置く。

- ① 本塾法学研究科修士課程在学者については、修士課程入学後実施される秋期および春期日程の大学院入試の外国語試験（史料読解、統計学を含む）を何回でも受験することができ、これに合格すれば、後期博士課程入試におけるその外国語の受験を免除する。
- ② この制度による認定は、本塾法学研究科修士課程に在学した者については、原則として修士学位取得後、3学年度にわたって有効とする。
- ③ なお、本塾法学研究科修士課程に在学した者については、前項の有効期間中、「外国語等学力判定制度」による入試の受験資格を有するものとする。
- ④ 手続き等の詳細は掲示する。

XIII 奨学金について

日本学生支援機構（旧 日本育英会）大学院奨学金と慶應義塾大学大学院奨学金の本年度の出願要項は次のとおりである。

なお、その他外部財団奨学金を含めた奨学金案内（大学院生用・留学生用）および、平成9年度より実施している慶應義塾大学大学院奨学融資制度についての案内を、学生総合センター学生生活奨学金窓口で配布中なので、出願を希望する者は必ず受け取ってください。

日本学生支援機構（旧 日本育英会）大学院奨学金

日本学生支援機構大学院奨学金を希望する者は、次の要領により出願してください。

なお、内容については変更を生じることがありますので、別途案内書や掲示等で必ず確認してください。

1. 出願資格・貸与月額・提出書類等

別紙「奨学金案内」および「日本学生支援機構奨学金を希望する皆さんへ」を参照してください。

2. 日本学生支援機構の推薦は1年生が主で、2年生以上については日本学生支援機構の採用予定数は少ないので、それを考慮に入れて出願してください。

3. 出願についての注意点

① 提出期限及び場所：西校舎学生総合センター掲示板で発表します。

② 収入基準について

出願者本人の総収入金額（配偶者がいる場合は、本人及び配偶者の合計収入）が下表の収入基準額以下であること（金額は変更されることがある）。

種 類	第一種（無利子）		第二種（有利子）		併用貸与	
	修士課程	博士課程	修士課程	博士課程	修士課程	博士課程
収入基準額	416万円	472万円	595万円	798万円	316万円	332万円
収入基準額超過の許容範囲	収入基準額の30%以内		なし	なし	なし	なし

総収入金額とは、金銭・物品など父母等からの給付、奨学金、アルバイト収入、定職収入、その他の収入（利子所得、配当金等）により、本人が1年間に得た金額です。

※第一種奨学金に限り収入基準を超えても、特殊な事情が認められる場合は、推薦（出願）ができることがありますので、窓口にご相談ください。

③ 健康診断について

大学で実施する所定の定期健康診断を必ず受けてください。万一受診を怠った場合は、奨学生採用後であっても採用が取り消されることがあります。

④ その他

(1) 提出期限・提出場所は掲示で確認のうえ、厳守してください。期限後の受付は一切いたしません。

(2) 推薦決定者を5月中旬西校舎学生総合センター掲示板に受付番号で発表します。

(3) 採用決定は、日本学生支援機構より採用通知が届き次第（6月中旬予定）、学生総合センター掲示板に受付番号で発表します。

(4) 不明な点がある場合は、早めに学生総合センター学生生活奨学金窓口にお問い合わせください。

慶應義塾大学大学院奨学金

慶應義塾大学大学院奨学金を希望する者は、次の要領により出願してください。なお詳細については、奨学金案内や掲示等で確認してください。

1. 出願資格

- 大学院に在籍する学生で、研究の意欲を持ち、経済的に修学が困難であること。
- 学業成績・人物共に優秀で健康であること。
- 外国人留学生は私費の者で出入国管理及び難民認定法第4条第1項第6号に該当する者、及び経過措置としての第4条第1項第16号の3を有する者。

2. 奨学金額（給費）他

	奨学金額（給費）	採用期間	
日本人修士課程	400,000円	1年間 (毎年出願可)	採用は2回まで（平成10年4月以降入学者対象）
日本人後期博士課程			採用は3回まで
私費外国人留学生修士課程			採用は2回まで
私費外国人留学生後期博士課程			採用は3回まで

3. 提出書類

提出書類の詳細については、「奨学金案内」を参照してください。

4. 出願についての注意点

- ① 提出期限・提出場所：西校舎学生総合センター掲示板で確認してください。
- ② 家計基準について（下記の基準内でないと出願できません。なお、この基準については変更があるかもしれませんので、再度確認のうえ出願してください。）
 - ・修士課程……本人と配偶者の総収入金額が703万円以下の者。
 - ・博士課程……本人と配偶者の総収入金額が798万円以下の者。
- ③ 健康診断について
大学で実施する所定の定期健康診断を必ず受けてください。万一受診を怠った場合は、奨学生採用後であっても採用が取り消されることがあります。
- ④ その他
 - (1) 提出期限・提出場所は掲示で確認のうえ、厳守してください。期限後の受付は一切しません。
 - (2) 採用決定は、6月下旬の予定で、願書記載の本人現住所宛に通知します。
 - (3) 採用決定の時期が遅いので、在学料はあらかじめ振り込んでおいてください。
 - (4) 不明な点がある場合は、早めに学生総合センター学生生活奨学金窓口にお問い合わせください。

*小泉信三記念大学院特別奨学研究生については学事センター窓口にお問い合わせください。

奨学融資制度

慶應義塾大学大学院への入学時および在学期間中、学費等の調達に苦勞することなく研究に打ち込めるよう配慮した制度で、大学院生本人に金融機関が学費等を直接貸与する方式をとります。在学期間中は元金の返済が据え置かれ、各人が在学期間中に支払った利子については、年度ごとの申請により審査を行い、慶應義塾から奨学金として給付されることがあります。

この制度は、平成9年度より運営されてまいりましたが、一部制度の改正を行い、平成15年度入学生より次ページの「Nプラン」が適用されております。ただし、当該課程への入学年度および前課程での制度利用の有無により、利用する制度が異なりますので、詳細については学生総合センター学生生活奨学金窓口へお問い合わせください。

奨学融資制度（Nプラン）概要

	第 一 種	第 二 種
対 象 者	平成15年度以降の当該課程入学者。ただし、平成14年度以前に大学学部・大学院修士課程において奨学融資制度を利用し、卒業・修了後1年以内に当該課程に進学した者を除く。	
応 募 資 格	主たる家計支持者の年収が、給与所得者は800万円以上、事業所得者は400万円以上であること。	主たる家計支持者の年収が、給与所得者は800万円未満、事業所得者は400万円未満であること。
融 資 期 間	<ul style="list-style-type: none"> ・最長10年（在学中の元金返済据置期間を含む初回借入から返済終了まで） 修士…修了後8年以内で返済 博士…修了後7年以内で返済 ・融資期間は課程および初回融資学年により異なります。 	
融 資 限 度 額	<ul style="list-style-type: none"> ・学生納付金の範囲内。 ・在学中の総融資金額は500万円が限度。ただし、金融機関の審査基準の範囲内。 ・利用にあたっては金融機関の審査を受けていただきます。 	
担 保	不 要	
連 帯 保 証 人	親 等	親等および義塾
金 利	<ul style="list-style-type: none"> ・変動金利（年2回見直し） ・一般の教育ローンより低金利になっています。 	
融資取扱金融機関	義塾の指定する金融機関	
利 子 給 付	在学期間中（標準修業年限内）、本人の申請に基づき、その年度に支払った全額を、翌年度（6月末頃）一括して、奨学金として支給。（ただし、支給対象者は奨学規程に基づく）	
団体信用生命保険	原則加入	
退 学 し た 場 合	融資金全額を一括繰上返済していただきます。	
申 請 期 間	奨学融資制度案内および掲示等で確認してください。	
在 学 中 の 支 払 い	<ul style="list-style-type: none"> ・在学中は元金返済据置となります。ただし、据置期間を超過した者（留学、休学、留年等）は所定の手続が必要となります。手続の内容によっては、金融機関で改めて審査が必要です。 ・利子の支払いは融資実行の翌月から発生し、本人の口座から毎月自動引き落とし。 	
修 了 後 の 返 済 等	<ul style="list-style-type: none"> ・修了後は元利均等分割払いとなり、本人の口座から元金と利子を毎月自動引き落とし。 	
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・原級に留まった場合、当該年度・学期は申請できません。 ・住所・氏名等の変更がありましたら、速やかに大学と取扱金融機関にご連絡ください。 	

*詳細は奨学融資制度案内で確認してください。

平成17年度の募集についてはすでに締め切っています。平成18年度の募集要項は10月に掲示します。以下は平成17年度の募集要項ですが、参考までに掲げます。

平成17年度小泉信三記念 大学院特別奨学研究生募集

◇出願資格

- 本塾法学部第4学年に在学し、平成17年度大学院法学研究科修士課程に進学する者。
- 修士課程第1年次に在学する者。
- 修士課程に在学し、平成17年度後期博士課程に進学する者。
- 後期博士課程第1・2年次に在学する者で、将来研究者となることを志望している者。

◇待遇

奨学研究生には奨学金として月額3万円を給付し、その期間は1年とする（ただし、再度応募することができます）。

◇出願書類

- 1 願書・履歴書（所定用紙：学事センターにて配布）
- 2 論文（現在の研究をまとめたもの、4000字程度）
- 3 成績証明書（大学学部1年から申請時までのもの） 各1通
- 4 健康診断書 1通

◇出願期間

平成16年11月8日（月）～12日（金）

◇出願場所

学事センター窓口

◇選考方法

面接による

面接日：11月29日（月） 16：30～

面接場所（控室）、面接時間については、出願時にお知らせします。

◇発表

平成17年5月頃、研究支援センターより本人宛に直接通知。（採用者のみ）

*その他

後期博士課程在学者については日本学術振興会特別研究員の制度があります。詳細は、研究支援センター（研究室棟1階）に問い合わせてください。

講 義 要 綱 ・ シ ラ バ ス

- * 講義の内容とその順番は授業の展開等に応じて変更されることもあります。
- * またその他の項目についても変更される場合があります。

修士課程設置科目

後期博士課程設置科目

全専攻共通

プロジェクト科目・医事刑法

教授	加藤久雄
客員教授	児玉安司
講師	小林寿一
講師	平野美紀
講師	小西聖子
講師	内田雅人
講師	中島千鶴

授業科目の内容：

最近、医療現場で、刑事法的視点からの解決を迫られる事件が多発している。それらに関して伝統的な犯罪論や刑法解釈論では解決が難しく、新たな理論の構築が要請されている。

今年度は、新たに客員教授 児玉安司(弁護士・医学博士)、講師 小林寿一(科学警察研究所・司法心理学・心理学博士)、講師 小西聖子(武蔵野大学人間科学部教授・司法精神医学・医学博士)、講師 中島千鶴(ロンドン経済大学犯罪学研究所所長・医事管理)、講師 内田雅人(極東アジア犯罪防止研究所教官)、講師 平野美紀(東京都精神医学総合研究所所員)の6名が加わり、テーマも医療管理行政や新薬治験、高額医療と保険医療、遺伝子診断と保険拒否、病院経営とリスク・マネジメント、臓器不足と臓器売買など英米語圏における医事刑法をめぐる諸問題について研究していきたい。外国人講師や外部の専門家を招待して充実した演習にしていきたい。今年度は、土曜日隔週の集中で行ってほしい。講師全員が英語での講義も可能なので、英語での論文作成の指導や講演・講義も随時行ってほしい。帰国の学部学生の聴講も歓迎する。

プロジェクト科目・欧州統合（秋学期）

ジャン=モネ	チェア	教授	田中俊郎
法務研究科	教授	庄司克宏	
専任講師	細谷雄一		

授業科目の内容：

The European Union strives to establish a new

order in Europe. While the EU attempts to deepen its construction through the Maastricht Treaty, the Amsterdam Treaty, the Nice Treaty and the Treaty establishing a Constitution for Europe, it has enlarged its scope to South and East, from 15 to 25 member states on May 1 2004.

This year, the seminar will focus on the enlargement and the deepening of the EU, trying to shed more lights on the historical development, to analyze its problems and outline future perspectives on the subject.

プロジェクト科目・国際新種契約法

教授	池田真朗
教授	北澤安紀

授業科目の内容：

扱う予定の内容は、国際金融関係、無体財産関係、ライセンス、技術移転、電子商取引関係の契約である。

プロジェクト科目・公共政策論（春学期）

公共政策論

教授	小林良彰
教授	大山耕輔
教授	河野武司

授業科目の内容：

プロジェクト科目「公共政策論」の目的は、政府が行う公共政策がどのように形成され、どのように実施されているかという問題について、多角的かつ総合的な視点から実証分析を試みることである。政治学の視点から公共政策のプロセスを総合的に分析する試みは、いくつかの研究はあるものの十分行われているとはいえない。誰がどのように公共政策を形成・実施し、その結果どうなったのかという一連の政策プロセスを分析することで、わたしたちは政治や行政の特質や構造を明らかにすることができるだろう。

多様な政策プロセスに接近するには多様なアプローチが必要である。そのようなアプローチには、安全保障から環境、福祉にいたる多様な争点ごとの比較、先進国や途上国を含む国ごとの比較、あるいは時間的・歴史的な比較などが考えられる。このため、多様な関心をもつスタッフや学生がこの授業に参加するだけでなく、政策研究に携わっている他大学の専門家や、実際の政策プロセスに関わっている実務家などにも、時に授業でお話しいただく必要がある。

プロジェクト科目・公共政策論（秋学期）

公共政策論

教授 小林良彰
教授 大山耕輔
教授 河野武司

授業科目の内容：

プロジェクト科目「公共政策論」の目的は、政府が行う公共政策がどのように形成され、どのように実施されているかという問題について、多角的かつ総合的な視点から実証分析を試みることである。政治学の視点から公共政策のプロセスを総合的に分析する試みは、いくつかの研究はあるものの十分行われているとはいえない。誰がどのように公共政策を形成・実施し、その結果どうなったのかという一連の政策プロセスを分析することで、わたしたちは政治や行政の特質や構造を明らかにすることができるだろう。

多様な政策プロセスに接近するには多様なアプローチが必要である。そのようなアプローチには、安全保障から環境、福祉にいたる多様な争点ごとの比較、先進国や途上国を含む国ごとの比較、あるいは時間的・歴史的な比較などが考えられる。このため、多様な関心をもつスタッフや学生がこの授業に参加するだけでなく、政策研究に携わっている他大学の専門家や、実際の政策プロセスに関わっている実務家などにも、時に授業でお話いただく必要がある。

プロジェクト科目・政治思想研究（春学期）

政治思想研究の新しいアプローチ

教授 萩原能久
助教授 田上雅徳

授業科目の内容：

ここ数年来、政治思想研究部門では様々なテーマを設定し、そのテーマにそってそれぞれの学界の最前線で活躍中の講師をお招きして、講義と質疑応答の時間をもったあと、翌週にその講義をもとにした院生主体の討論を繰り返すという形でプロジェクトを展開してきた。本年度は、「近代世界における公私関係の変容とシチズンシップの政治学」というテーマで10名程度の講師をお呼びする予定である。政治思想史、精神史、フェミニズム、法哲学、法制史、社会史、比較政治思想、イスラム宗教学、社会学といった分野での第一人者を、参加予定者の希望も勘案しながら、現在選定作業中であるので、具体的なプログラムは開講時に示したい。

プロジェクト科目・政治思想研究（秋学期）

教授 萩原能久
助教授 田上雅徳

授業科目の内容：

春学期の継続。秋学期のみの参加を希望する者は相談に乗る。

修士課程設置科目

民事法学専攻

外国法（英米）

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

本年度は、証拠法について研究する予定である。証拠法は、陪審制をとるコモンロー国家においては、公正な裁判を行うのにとっても重要である。そして、その切り口から、アメリカ法における公正の理念を理解する努力をするつもりである。資料は、授業中に適宜、配布する。

外国法（英米）

職権主義との比較におけるイギリス当事者主義刑事司法制度研究

客員教授 倉田 靖司

授業科目の内容：

裁判員制度が導入されようとしている現在、これを可能な限りスムーズに始めさせ、発展させるためには、我が国の刑事司法制度が、どのような特徴を持ち、どのような問題を抱えているのか（それともいないのか）ということを検証・認識する必要があると考える。そのために、当事者主義に基づく陪審制の母国であるイギリスの刑事司法制度を、職権主義に基づく参審制度を発達させてきたドイツの刑事司法制度と対比しつつ理解し、我が国の今後を考える手がかりの一つとしたい。

外国法（英米）

アメリカの裁判

客員教授 田中 利彦

授業科目の内容：

アメリカの法制度は、規制緩和、司法制度改革など一連の改革論議において、多くの論者が何らかの形で念頭に置いたモデルであった。しかし、アメリカの具体的な法制度がわが国の制度のモデルとして適切かということについては様々な議論があるだろう。

本講義では、こうした観点から、アメリカの民事、刑事の司法制度およびその運用について、わが国の制度との比較において考察する。

外国法（英米）

コモンローの現代的意義

講師 西山 敏夫

授業科目の内容：

春学期は、英米公法成立の課程を概観した後、米国憲法に関する体系的な論点講義および、統治機構、連邦と州の関係に焦点をあてた主要な判例研究を行う。

秋学期は、英米私法について考察するが、特にその根本であるコモンロー成立の経緯特徴について概観した後、信託・フィデューシャリーに焦点を当て、コモンローの現代的意義について検証してみたい。また講義の後半では金融取引、企業買収に関する基本的な英文契約書の読み方についての演習も行い最近の生きた英米法についての基本的知識を紹介したい。

外国法（独）

（共同担当）教授 加藤 久雄

（共同担当）専任講師 フィリップ・オステン

授業科目の内容：

今年は、加藤教授とオステン講師との共同担当となり、2人で学部と大学院のドイツ法の演習を行うことになる。

本演習は、ドイツ法・ドイツ法学に関する原書（ドイツ語文献）を理解できるようにすることを目的とするものである。

学部学生には、法学研究科の入試の外国語科目に合格できるよう、また、修士課程の院生には、博士課程進学の条件である学力等判定試験に合格する実力を身につけるような指導をしていきたい。

さらに、博士課程の院生には、DAADの試験に合格できるよう指導する。

共同担当者は2人とも刑事法専攻者であるが、演習の内容は、公法・私法に限らないので、政治学科や他学部の学生・院生の聴講も大歓迎である。

外国法（仏）

法務研究科 教授 金山 直樹

授業科目の内容：

本講義は、フランス法的なるものに多角的かつできるだけ直接迫ってみようとするものである。フランス法は、その歴史的な発展過程においても、また現代における法のあり方においても、個性と特色を有している。本講義では、その最新の状況に至るまでを視野に入れながら、できるだけその多様な相に多角的に接することができるように努めたい。今年度は、200年を

迎えたフランス民法典に関する最も神聖なテキストとなった、カルボニエの『民法典』論を精読し、翻訳する。

民法特殊講義

家族法研究

教授 犬伏由子

授業科目の内容：

受講者と相談の上決定するが、夫婦・親子に関する個々の論点については判例・学説を検討し、家族法の基礎理論についての議論も行いたいと考えている。なお、余裕があれば、比較法的検討も行いたい。

民法特殊講義

担保執行法改正の検討と課題

講師 花房博文

授業科目の内容：

本講義は担保・執行法の改正をテーマとして、近時の社会・経済情勢の中で担保法制に求められている諸問題を、学理のおよび実務的アプローチの双方から抽出・検討する。

また、平成以降の担保権（とりわけ抵当権）に関する判例の変遷を網羅的に考察し、今回の改正が各判例との関係でどのような意義をもつかを検討する。

本講義では、以上のような検討を通して、実務上の要請と学理的な問題意識との相違を理解し、これからの担保法制に求められる課題と判例の射程等を考察しようとするものである。

民法特殊講義

契約法の基礎研究 19

講師 山田卓生

授業科目の内容：

英米の契約法は、日本の契約法とは種々の点で相当ことなるが、両者を比較することにより、新たな視点を発見し、示唆を得ることができる。英米契約法に関する最近の注目すべき論文2～3篇を、丁寧に読んで、現代契約法の当面する諸問題を考えたい。

民法特殊演習

(共同担当) 教授 齋藤和夫

(共同担当) 講師 山根眞文

授業科目の内容：

金融法務－その理論と実務－

担保法特殊講義

(共同担当) 教授 齋藤和夫

(共同担当) 講師 櫻井一成

授業科目の内容：

担保・執行・倒産－その理論と実務－
(民事執行法や倒産法・民事再生法の研究)

民法合同演習

教授 齋藤和夫

教授 池田真朗

教授 犬伏由子

教授 西川理恵子

教授 北澤安紀

助教授 武川幸嗣

法務研究科 教授 片山直也

法務研究科 教授 六車明

法務研究科 教授 北居功

法務研究科 教授 金山直樹

法務研究科 教授 平野裕之

法務研究科 教授 鹿野菜穂子

授業科目の内容：

最近の最高裁判決の検討。各自のリポートを中心に、全員の討議により研究する。学年初めに、判決を指示する。

商法特殊講義

会社法に関する高度な講義

教授 加藤修

授業科目の内容：

前半は、①会社定款目的論、②会社の営利法人性、③会社の社団性、④株式売買単位、⑤株式譲渡の制限、⑥株式会社における議決権、⑦議決権代理行使論、⑧株主総会の開催、⑨株主総会の儀式化と形骸化、⑩取締役会の権限、⑪株主代表訴訟論という会社法の重要問題について、どのようにして問題意識を持ち、それをどのように学問的に解決すべきかについて講義がなされる。後半は、受講者が各自の問題意識のもとに、どのように会社法上の重要問題を学問的に解決すべきかをレジュメを用意し口頭報告する。

商法合同演習

商法における学問承継と創造的新展開のための集団指導演習

教授 加藤 修
教授 宮島 司
教授 山本 爲三郎
教授 鈴木 千佳子
教授 島原 宏明
法務研究科 教授 山手 正史

授業科目の内容：

商法に関する重要問題や基本問題について、参加者各自の問題意識に基づく研究報告を受け、参加者による検討と担当者による集団指導を行う。研究報告の水準は、学会における学術報告と同等あるいはそれ以上であることが期待される。

民事訴訟法特殊講義

ドイツの教科書の講読

教授 坂原 正夫

授業科目の内容：

日本民事訴訟法の母法であるドイツ民事訴訟法の教科書を講読して、ドイツの状況を認識したうえで、日本民事訴訟法の問題を考察してみようという授業です。

使用するテキストはコンパクトなものです（縦 19.4cm、横 12.8cm の大きさで、本文 608 頁）、判決手続と強制執行手続を扱っています。日本でいうと、1冊で民事訴訟法と民事執行法を説明している教科書ということになります。記述は簡潔で分かりやすいドイツ語で書かれていますし、説明の仕方が初学者のことを考えています。すなわち冒頭に具体的な設例を挙げて、次にその問題の解決のために必要な理論を説明し、最後に設例の解答を示すという手法です。

このようなことから、テキストは日本の民事訴訟法を勉強した後にドイツ民事訴訟法を勉強する場合に、入門書や案内書として最適です。しかも利点はそれだけではありません。文献欄が充実しているので、ある争点に関してドイツの判例・学説の状況を概観するのに大変に便利な本です。

テキストの著者について若干の説明をします。この本の初版（1978年）の著者は Freiburg 大学の Peter Arens 教授でした。ところが教授が 1991年に急逝されたために、5版（1992年）は Dresden 工科大学の Wolfgang Lüke 教授が Arens 教授から引き継ぐ形で担当しました。そのために 5版と 6版（1994年）の

著者は、Arens 教授と Lüke 教授の連名となっています。そして 7版（1999年）からは Lüke 教授の単独名で出版されるようになりました。なお Wolfgang Lüke 教授は、慶應義塾大学の名誉博士である Gerhard Lüke 名誉教授（Saarlund 大学）のご子息です。

民事訴訟法特殊講義

教授 三木 浩一

授業科目の内容：

民事訴訟法に関する外国文献の講読または国内判例の検討を行う。

民事訴訟法特殊講義

国際民事訴訟法における裁判管轄を考察する

講師 栗田 陸雄

授業科目の内容：

ドイツ法の原典講読を通じて国際裁判管轄の問題を考察する。

民事訴訟法合同演習

最高裁判事事例研究

教授 坂原 正夫
教授 三木 浩一
法務研究科 教授 春日 偉知郎
法務研究科 教授 中島 弘雅
法務研究科 教授 三上 威彦

授業科目の内容：

民事手続法に関する判例を素材にして、民事訴訟法（関連法令を含む）の演習を行います。取り上げる判例は主に最高裁の最新の判例ですが、それ以外にも過去の最高裁の判例や最新の下級審の判例も取り上げます。なお民事事例研究だけでなく、修士論文提出予定者の中間発表会、学会発表を予定している研究者の事前の報告会、海外の有名教授のセミナー等が開催されることがあります。

知的財産権法特殊講義

知的財産権の基本的理解と履修者各自の専攻分野との関連の研究

講師 紋谷 暢男

授業科目の内容：

特許法、実用新案法、意匠法、商標法、不正競争防止法等広義の工業所有権法、および著作権法、更には種苗法、半導体集積回路の回路配置に関する法律等、

知的財産権法の全領域を、本質を中心に、交錯関係も含めて、特に現代的な問題点につき簡単に概説する。然る後、履修者の選択した任意なテーマにつき、各自の報告を中心として、演習方式で検討してゆく。

国際私法特殊講義

講 師 横 山 潤

授業科目の内容：

1898年に立法された『法例』は日本の国際私法の主要法源ですが、現在、その全面改正の作業が進行中です。とくに、国際契約および国際債権譲渡、国際不法行為についてはその内容が一新されようとしています。これらの事項についての立法案をふまえながら、その解釈論上の諸問題を検討したいと思っています。

司法制度論

欧州連合における民事司法を中心とする比較法的考察

法務研究科 教 授 春 日 偉知郎

授業科目の内容：

欧州連合における民事手続法の最先端の動向を把握し、国際的な視野から民事手続法制の比較検討を試みる。具体的には、欧州連合の域内において、各国民事司法制度および民事手続法制の統一化がどのように計画され、具体化されているかについて調査・翻訳し、その内容を分析する。また、その機能について手続法の国際調和の観点から考察し、欧州連合における司法統一の方向性を探り、国際民事手続法の調和とその限界について考えてみたい。

社会法特殊講義（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教 授 田 村 次 朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTOにおける小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法特殊講義

労働法・社会保障法分野における法的問題点・裁判例の特殊研究

助教授 内 藤 恵

授業科目の内容：

労働法・社会保障法の分野における最近の問題点を、新しい裁判例の研究を通じて考察することを目的とします。出来るならば、学部の段階で労働法及び社会保障法の講義を既に履修している方にご参加戴きたいと思います。

但し毎年履修者が少人数なので、その希望を伺いつつ、テーマ及び進め方を変更します。従って、上記科目を履修していない方であっても、その希望に添う形で理論研究をしたこともあります。講義は概ね各履修者の報告とそれに関するディスカッションで進めます。

社会法特殊演習（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教 授 田 村 次 朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTOにおける小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法合同演習（秋学期集中）

21世紀の社会法構築に向けて

教 授 田 村 次 朗

助教授 内 藤 恵

授業科目の内容：

規制緩和・構造改革の潮流のなかで、競争政策は経済政策の一翼としてその重要性が認識されている。しかし、競争政策の内容は論者によって様々に解釈され、時として特定の政策目的のために、競争政策の語が歪曲されている場合も少なくない。そこで、本講座では、競争政策の原点である競争法の理念とその思考形式について、判例分析を通じて検討を進める。Oliver Wendell Holmes 判事の指摘のとおり「法は経験であり」(The life of the law has not been logic, but experience), 経験は判例を通じて熟成される。

徹底した判例分析を中心として、競争法的発想方法論について理解を深めることが目的となる。

法哲学特殊講義（秋学期集中）

講師 井上 達夫

授業科目の内容：

社会主義体制は崩壊したが、リベラル・デモクラシーもまた、様々な矛盾・ディレンマを孕み苦悩している。現代世界におけるリベラル・デモクラシーの存在条件・射程を原理的・哲学的に再考する重要な理論的業績を素材にして、討議を行う。

本年度は、上記テーマに関する英語文献の読解と討議を行い、関連問題に関する参加者の自由報告も適宜とりまぜて討議を発展させる。参加者は報告だけでなく討議に積極的に参加することを期待される。

法制史特殊講義Ⅳ

中世ローマ法学の展開ーバルトルスの法学理論の研究ー

教授 森 征一

授業科目の内容：

古代ローマ法と近代ヨーロッパ法の橋渡しをし、普通法（*ius commune*）の時代を基礎づけた、中世ローマ法学の巨星バルトルスの法学理論を学ぶことが、本講義の目標です。

法制史特殊講義Ⅳ

教授 霞 信彦

授業科目の内容：

明治期における、わが国の刑事法に関する諸問題をとりあげ、これまでの先学の研究成果に立脚しつつ、史料や文献の輪読を通じて、理解を深めてみたいと考えている。

法制史特殊講義Ⅳ

日仏法文化交流史

教授 岩谷 十郎

授業科目の内容：

本講義では、フランス外務省外交史料館に所蔵される、日本政府お雇い法律顧問ボアソナードによる在日フランス公使館一等書記官コラン・ド・ブランシー宛書簡を読む。民法典論争によるフランス法派の敗北の危機が迫った明治中期の日本にあつて、親仏派日本人および在日フランス人は、フランス本国からの援助を背景に公使館の協力を得て、フランスの威信をかけた文化戦略を企てる。この授業で扱うボアソナードの書

簡は、彼が離日に至るまでの日々、いかに日本におけるフランスの影響力を保持するか、との問題に腐心した彼の姿を物語っている。学界未見のこの史料について、授業では、担当者がタイプで起こした書簡の原稿を配付し、それに基づいて読解を進めてゆく。

法制史合同演習

法文化の翻訳と移入

教授 森 征一

教授 笠原 英彦

教授 岩谷 十郎

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

本演習は、日本の近代期に出された代表的な法律学文献を参加者一同による輪読を通して深く理解し、内外の関連文献を参照しつつ、今日の日本の法学的前提がどのように歴史的に形成されてきたのかを考えることを目的としている。

03年度までは、西周訳『権利闘争論』をとりあげ、イェーリングの原典とその各国語訳とを対照させ、日本における権利概念の定着を問題としてとりあげた。昨年度は、穂積陳重『法典論』をとりあげ、日本民法典を中心とした各国近代期における法典編纂の問題を様々に議論した。

今年度については、江木衷『法律解釈学』（明治18年）を素材として、近代日本における法解釈理論の出発点を見極め、その後の展開を各国の法解釈学的状況との比較から考えることを予定している。

法制史総合合同演習

教授 霞 信彦

文学部 教授 長谷山 彰

授業科目の内容：

履修者が興味をもつ、日本法制史に関する題材を選び、それについての研究発表をおこなうとともに、担当者が問題点の指摘や研究内容に対するコメントを加えることを通じて、法制史研究のための基礎的な知見を涵養していきたいと考えている。さらにそれが、各自の研究論文作成の土台となればよいと思う。

政府規制産業法特殊演習

電力・ガス・テレコム等の規制

教授 藤原 淳一郎

授業科目の内容：

電気事業法、ガス事業法、電気通信事業法の3つの

事業法の改正を受けた制度設計が始まり、かつ独禁法改正も予想される。これらのトピックスをはじめ、問題提起的な内外文献を講読する。

国際租税法特殊講義

講師 ムザール・ハンス・ペータ

授業科目の内容：

国際租税法の事例を取り上げ分析する。

租税法特殊講義（秋学期集中）

租税法基本判例の研究

助教授 吉村典久

授業科目の内容：

租税基本判例の判例研究を行います。実務および理論において、判例はきわめて重要な意味を持っております。判例を無視して、租税訴訟における弁論を組み立てることもできませんし、また、理論を構築することもできません。本講義の目標は、判例の事実を理解し、判例の位置づけを明確にするとともに、判例の射程距離を正確に読む能力を養成することにあります。

租税権利救済法特殊講義

租税訴訟の理論と実務

(共同担当) 教授 小林 節

(共同担当) 講師 野本昌城

(共同担当) 講師 平野朝子

授業科目の内容：

租税紛争の法的解決をなしうる能力を修得しうるよう

- 1 行政事件訴訟法（民事訴訟法を含む）の理論
- 2 租税訴訟に係る法廷実務（要件事実論、訴状・答弁書・準備書面等の作成方法、陳述および尋問方法）
- 3 租税判例研究などを教授実施します。

租税手続法特殊講義（春学期）

行政手続、不服申立てと国税通則法

講師 藏重有紀

授業科目の内容：

行政手続法、行政不服審査法及び行政事件訴訟法の概要を理解するとともに、これらと国税通則法との関係及び国税不服審判所の役割を理解できるようにする。

法と人工知能総合演習

講師 吉野 一

授業科目の内容：

法律人工知能について総合演習を行う。法律人工知能は、相談事例を入力すると、法的推論を行い、法的判断を出力するシステムである。それはまた法的推論過程や法の構造を分かりやすく示してくれる。法律人工知能は、法的知識の構造を解明し、その構造を論理式化してコンピュータに登載することによって実現される。それは法的実践に役立つばかりでなく、法学研究および教育にも非常に役立つ。法律人工知能の研究の進展は近時めざましいものがある。その研究成果は、法哲学などの基礎法の分野の研究に取り入れられているばかりでなく、民法、民事訴訟法、憲法、行政法、税法、知的財産権法などの実定法の諸分野の研究にも応用することが期待されている。本総合演習では、これまでの法律人工知能の諸研究成果に学びつつ、法と法的推論の構造を明らかにし、学問としての実定法学のしっかりとした理論的視点と基盤を獲得することを旨とする。

国際取引法特殊演習

(共同担当) 教授 西川理恵子

(共同担当) 講師 萩原康弘

授業科目の内容：

国際投資・商取引（対外投資と国際貿易）を行うに当たりどのような法的問題が生じるか、およびその問題をどのように解決するかという点を主に考察する。今年度は、特に、この問題を金銭の動きという観点から考えてみたい。すなわち、投資および取引の決済に関しての為替、金融、国際銀行業務などを中心とした法的問題を考察する。

本演習の目的は、これらの問題に関する各国の法を比較研究し、知識を深めながら問題に対処する能力を形成することである。講師の萩原先生の国際取引法弁護士としての豊富な実務経験を踏まえて、ケーススタディを中心に議論を進める予定である。

公 法 学 専 攻

プロジェクト科目・公務員制度改革と民主主義

教授 小林 節
講師 佐久間 健一
講師 尾西 雅博
講師 花岡 信昭

授業科目の内容：

現在、国家レベルで公務員制度改革が進行している。その政策形成を担当する官僚と、それを継続的にwatchしてきたジャーナリストと、それに参加している理論家が一堂に会して、問題点を分析する。

プロジェクト科目・市民生活の安全と警察に関する比較法的研究

教授 大沢 秀介
教授 小山 剛
講師 太田 裕之

授業科目の内容：

本プロジェクト科目では、最近注目されている人間の安全保障という観点から、その中心的な役割を担う警察その他にかかわる法制度を比較法的な視点に立って検討を加える。

外 国 法（英米）

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

本年度は、証拠法について研究する予定である。証拠法は、陪審制をとるコモンロー国家においては、公正な裁判を行うのにとっても重要である。そして、その切り口から、アメリカ法における公正の理念を理解する努力をするつもりである。資料は、授業中に適宜、配布する。

外 国 法（英米）

職権主義との比較におけるイギリス当事者主義刑事司法制度研究

客員教授 倉田 靖司

授業科目の内容：

裁判員制度が導入されようとしている現在、これを可能な限りスムーズに始めさせ、発展させるためには、我が国の刑事司法制度が、どのような特徴を持ち、どのような問題を抱えているのか（それともいな

いか）ということを検証・認識する必要があると考える。そのために、当事者主義に基づく陪審制の母国であるイギリスの刑事司法制度を、職権主義に基づく参審制度を発達させてきたドイツの刑事司法制度と対比しつつ理解し、我が国の今後を考える手がかりの一つとしたい。

外 国 法（英米）

アメリカの裁判

客員教授 田中 利彦

授業科目の内容：

アメリカの法制度は、規制緩和、司法制度改革など一連の改革論議において、多くの論者が何らかの形で念頭に置いたモデルであった。しかし、アメリカの具体的な法制度がわが国の制度のモデルとして適切かということについては様々な議論があるだろう。

本講義では、こうした観点から、アメリカの民事、刑事の司法制度およびその運用について、わが国の制度との比較において考察する。

外 国 法（英米）

コモンローの現代的意義

講師 西山 敏夫

授業科目の内容：

春学期は、英米公法成立の課程を概観した後、米国憲法に関する体系的な論点講義および、統治機構、連邦と州の關係に焦点をあてた主要な判例研究を行う。

秋学期は、英米私法について考察するが、特にその根本であるコモンロー成立の経緯特徴について概観した後、信託・フィデューシャリーに焦点を当て、コモンローの現代的意義について検証してみたい。また講義の後半では金融取引、企業買収に関する基本的な英文契約書の読み方についての演習も行い最近の生きた英米法についての基本的知識を紹介したい。

外 国 法（独）

（共同担当） 教授 加藤 久雄

（共同担当） 専任講師 フィリップ・オステン

授業科目の内容：

今年は、加藤教授とオステン講師との共同担当となり、2人で学部と大学院のドイツ法の演習を行うことになる。

本演習は、ドイツ法・ドイツ法学に関する原書（ドイツ語文献）を理解できるようにすることを目的とするものである。

学部学生には、法学研究科の入試の外国語科目に合格できるよう、また、修士課程の院生には、博士課程進学の内容である学力等判定試験に合格する実力を身につけるような指導をしていきたい。

さらに、博士課程の院生には、DAAD の試験に合格できるよう指導する。

共同担当者は2人とも刑事法専攻者であるが、演習の内容は、公法・私法に限らないので、政治学科や他学部の学生・院生の聴講も大歓迎である。

外国法(仏)

法務研究科 教授 金山直樹

授業科目の内容:

本講義は、フランス法的なるものに多角的かつできるだけ直接迫ってみようとするものである。フランス法は、その歴史的な発展過程においても、また現代における法のあり方においても、個性と特色を有している。本講義では、その最新の状況に至るまでを視野に入れながら、できるだけその多様な相に多角的に接することができるように努めたい。今年度は、200年を迎えたフランス民法典に関する最も神聖なテキストとなった、カルポニエの『民法典』論を精読し、翻訳する。

憲法特殊講義

現代日本における憲政の課題

(共同担当) 教授 小林 節
(共同担当) 講師 平沢 勝栄

授業科目の内容:

憲政の最前線で活躍している政治家と憲法理論家が、学生とともに、今の日本で現実になっている憲法上の課題を、タブーなく分析し、その成果を半年ごとに本にしている。

憲法特殊講義

マスメディアから見た憲法と政治

(共同担当) 教授 小林 節
(共同担当) 講師 中野 邦観
(共同担当) 講師 木村 正人
(共同担当) 講師 園田 康博

授業科目の内容:

憲法論議をめぐる状況はここにきて大きく変化している。国際情勢の激動とともに、世論、政治、メディア、有識者など、さまざまな側面から、憲法を見直さなければ日本は国際社会で生きていけないのではない

か、という問題意識、危機感が高まっている。では憲法論議を具体的にどう進めたらいいのか。マスメディアから読売憲法改正試案を実際に作成、発表した当事者の立場から、憲法論議の焦点を考え、憲法の改革の方向、政治の現状、マスメディアの態度などを分析して、憲法改正の行方を展望する。

授業の柱は「憲法改革の論点、改正の方向」「第九条を中心とした安全保障の考え方」「憲法論議のこれまでの流れ」「マスメディアの論調と憲法報道」「読売憲法改正試案などさまざまな改正提案の内容」「政治の現状分析と憲法論議の行方」などになる。

憲法特殊講義

アメリカ憲法研究

教授 大沢 秀介

授業科目の内容:

アメリカ憲法に関する文献を輪読する。なお、受講者にはアメリカ憲法についての知識が要求される。

憲法特殊講義

(共同担当) 教授 小山 剛
(共同担当) 教授 駒村 圭吾

授業科目の内容:

憲法の基礎理論に関するドイツおよびアメリカの文献を輪読する。少人数による密度の濃い研究を予定しているため、参加者には、十分な語学力と憲法についての基礎知識が要求される。履修希望者は、事前に担当者(駒村)に相談されたい。

憲法特殊講義

最新の憲法問題の検討を通じた憲法の理論と動態の考察

講師 川崎 政司

授業科目の内容:

内外の最近の立法、政治課題、事件、判例等を題材として、最新の憲法問題について全員で検討を行い、それらを通じて憲法の理論と動態について考えていくこととしたい。また、その際には、それらに関連する法制度・法政策の設計・評価などについてもできるだけ言及することとし、そのような作業に必要不可欠となる法的思考能力・政策立案能力の養成といったことにも取り組んでいきたいと思っている。なお、履修者の興味・希望等によっては、必ずしも憲法という枠にこだわることなく、各種法的課題について幅広く取り上げていくこととしたい。

憲法特殊講義

日本の安全保障講座

(共同担当) 講師 田村 重信

(共同担当) 講師 長島 昭久

授業科目の内容：

本講座の主眼は、実際の日本政府の安全保障政策（憲法と防衛法制を中心）全般を正しく学ぶことにあ

る。内容は、政治の決定過程の現場に携わる講師が、安保・防衛政策の基本と国会で議論されマスコミ報道される北朝鮮問題やイラクへの自衛隊派遣問題などのホットな話題も最新情報と資料をもとに、講義の中で取り扱う。

今後の日本の安全保障政策を考えるうえで極めて有意義なものとなる。

憲法特殊演習

現代において必要とされている行政改革とは何か

(共同担当) 講師 植松 健

(共同担当) 講師 松村 雅生

授業科目の内容：

行政の透明性、公平性、利便性、効率性が強く求められているが、行政改革論議の現状を、理論と実務の両面から総合的に検討してみたい。

ひとつには、近年導入された情報公開法、政策評価法等の運用実態等を検証しながら、行政改革の基盤的制度の導入が政治、行政のあり方にどのような変化をもたらしているか、実証的に分析、検討を行う。

また、行政実務を踏まえ、地方分権時代における地方公共団体の行政改革の現状、課題等を研究するとともに、行政苦情救済制度、オンブズマン制度の今日的意義・役割等について考察する。

憲法特殊演習

講師 山岡 永知

授業科目の内容：

憲法特殊演習の授業は、アメリカ合衆国憲法に基づく連邦制度、および、連邦議会の権限について解説し、特に、合衆国憲法第1条8節3項に規定される「州際通商条項」に基づく立法の合憲性について研究する。更に、合衆国憲法修正10条に規定される州に留保されるポリス・パワーに基づく権限との関係についても判例を通じて研究する。本授業においては連邦最高裁判所の色々な判例を分析し、同裁判所による憲法解釈について理解を深める。

憲法合同演習

教授 小林 節

教授 大沢 秀介

教授 小山 剛

教授 駒村 圭吾

授業科目の内容：

今の予定としては、毎回1人のペースで履修者の研究中間報告か重要な最高裁憲法判例の研究報告をすることなどを考えているが、具体的には、年度始めに、履修者の希望も聴いて決めたい。

政府規制産業法特殊演習

電力・ガス・テレコム等の規制

教授 藤原 淳一郎

授業科目の内容：

電気事業法、ガス事業法、電気通信事業法の3つの事業法の改正を受けた制度設計が始まり、かつ独禁法改正も予想される。これらのトピックスをはじめ、問題提起的な内外文献を講読する。

国際租税法特殊講義

講師 ムザール・ハンス・ペータ

授業科目の内容：

国際租税法の事例を取り上げ分析する。

租税法特殊講義（秋学期集中）

租税法基本判例の研究

助教授 吉村 典久

授業科目の内容：

租税基本判例の判例研究を行います。実務および理論において、判例はきわめて重要な意味を持っております。判例を無視して、租税訴訟における弁論を組み立てることもできませんし、また、理論を構築することもできません。本講義の目標は、判例の事実を理解し、判例の位置づけを明確にするとともに、判例の射程距離を正確に読む能力を養成することにあります。

租税権利救済法特殊講義

租税訴訟の理論と実務

(共同担当) 教授 小林 節

(共同担当) 講師 野本 昌城

(共同担当) 講師 平野 朝子

授業科目の内容：

租税紛争の法的解決をなしうる能力を修得しよう

- 1 行政事件訴訟法（民事訴訟法を含む）の理論
- 2 租税訴訟に係る法廷実務（要件事実論，訴状・答弁書・準備書面等の作成方法，陳述および尋問方法）
- 3 租税判例研究などを教授実施します。

租税手続法特殊講義（春学期）

行政手続，不服申立てと国税通則法

講師 藏 重 有 紀

授業科目の内容：

行政手続法，行政不服審査法及び行政事件訴訟法の概要を理解するとともに，これらと国税通則法との関係及び国税不服審判所の役割を理解できるようにする。

行政法合同演習

教授 藤 原 淳一郎
 助教授 吉 村 典 久
 専任講師 青 木 淳 一
 講師 首 藤 重 幸

授業科目の内容：

- ① 改正行政事件訴訟法の研究
- ② 各自の研究テーマについての中間報告
- ③ 判例研究（内外）

法と人工知能総合演習

講師 吉 野 一

授業科目の内容：

法律人工知能について総合演習を行う。法律人工知能は，相談事例を入力すると，法的推論を行い，法的判断を出力するシステムである。それはまた法的推論過程や法の構造を分かりやすく示してくれる。法律人工知能は，法的知識の構造を解明し，その構造を論理式化してコンピュータに登載することによって実現される。それは法的実践に役立つばかりでなく，法学研究および教育にも非常に役立つ。法律人工知能の研究の進展は近時めざましいものがある。その研究成果は，法哲学などの基礎法の分野の研究に取り入れられているばかりでなく，民法，民事訴訟法，憲法，行政法，税法，知的財産権法などの実定法の諸分野の研究にも応用することが期待されている。本総合演習では，これまでの法律人工知能の諸研究成果に学びつつ，法と法的推論の構造を明らかにし，学問としての実定法学のしっかりとした理論的視点と基盤を獲得することを旨とする。

国際取引法特殊演習

（共同担当）教授 西 川 理 恵 子
 （共同担当）講師 萩 原 康 弘

授業科目の内容：

国際投資・商取引（対外投資と国際貿易）を行うに当たりどのような法的問題が生じるか，およびその問題をどのように解決するかという点を主に考察する。今年度は，特に，この問題を金銭の動きという観点から考えてみたい。すなわち，投資および取引の決済に関しての為替，金融，国際銀行業務などを中心にした法的問題を考察する。

本演習の目的は，これらの問題に関する各国の法を比較研究し，知識を深めながら問題に対処する能力を形成することである。講師の萩原先生の国際取引法弁護士としての豊富な実務経験を踏まえて，ケーススタディを中心に議論を進める予定である。

国際法特殊講義（国連大学講座）（秋学期）

教授 大 森 正 仁

授業科目の内容：

この講義は，2005年10月から開講される国連大学大学院共同講座を受講するために開講されるものです。共同講座は渋谷の国連大学において開講され，テーマは，「激動する世界と多様な国連の機能：平和構築と持続可能な開発」および「多発する紛争：要因・予防・国際的対応」のふたつを取り上げます。授業は英語で行われ，学生の発表も求められます。国連の活動に興味を有している学生諸君で，共同講座の受講を希望する学生は，学事センターに用意された申請書および申請書類を提出し，申込をしてください。

国際法特殊講義

名誉教授 栗 林 忠 男

授業科目の内容：

海洋法の諸問題を発表・討論の形式で考察する。

国際法特殊講義

国際環境判例研究

講師 臼 杵 知 史

授業科目の内容：

国際環境紛争に関する判例を通して，環境保護に関する国際法の基本的な原則・規則について理解する。国際裁判（司法的解決）の意義と限界，紛争解決フォーラムの選択に関する最近の議論についても検討する。

国際法合同演習

教授 大森 正 仁
講師 青木 隆

授業科目の内容：

国際法の基本的な英文文献を読み、そこに含まれる問題点について検討・討議を行ってゆく。対象とする文献および授業の進め方については最初の授業で説明する。

刑法特殊講義

教授 加藤 久 雄

授業科目の内容：

Roxin/Schroth (Hrsg.), *Medizinstrafrecht*. 2. Aufl. 2001. と加藤久雄著「医事刑法入門」の中から、受講生が関心を持つテーマを選択し、それぞれのテーマにつき 3-4 回にわたり犯罪論の基礎理論の日独比較研究を中心に行う。その際、内外の判例を徹底的に検討する。

刑事法特殊演習

講師 河村 博

授業科目の内容：

我が国の犯罪情勢は、近年、犯罪の方法や態様のみならず、犯罪の主体の面においても、相当の変化を生じている。また、ボーダレス時代などと言われる中で、刑事法制についても国際的平準化の動きが強まっており、各国の刑事法制等の制度を可能な限り共通のものとし、各国が協調して、これに対処するべきであるとの観点から、各種の国際会議等でこれが議題として取り上げられている状況にある。

本講座では、このような犯罪事象や国際的動向に、既存の刑事実体法、手続法制で適切に対処し得るか、他の手段としてどのようなものがあるかなどの問題意識の下に、テーマを選択し、刑事司法実務の経験があり、現に立法事務に携わる講師による立法過程論や最近の判例についての講義を交えながら、講師と参加者との自由な意見交換等を通じて、問題の所在とこれに対する刑事法的対応を中心とする方策について理解を深めたい。

刑事法総合合同演習

教授 加藤 久 雄
客員教授 倉田 靖 司
客員教授 田中 利彦
講師 川端 博
講師 河村 博
講師 安部 哲夫
講師 守山 正
講師 瀬戸 毅
講師 中島 千鶴

授業科目の内容：

加藤久雄著「医事刑法入門」に引用されている医事刑法に関する判例を中心にして判例研究の形で行う。その場合、講師の方から、参考となる英米の判例とドイツ判例を紹介し、併せて判例の比較法的研究を行う。

刑事学特殊講義

被害者の権利を学ぶ

講師 諸澤 英道

授業科目の内容：

2004 年 12 月に「犯罪被害者等基本法」が成立したことによって、わが国も、ようやく先進国の仲間入りができたとされている。2000 年に制定された、いわゆる「犯罪被害者保護関連二法」では、被害者は気の毒な存在として「配慮」の対象であった。しかし、基本法には「被害者の権利」が明記され、国、地方公共団体、そして国民の責務が謳われた。

この授業では、春学期において、1985 年に採択された「国連被害者人権宣言」について学ぶと同時に、その趣旨が犯罪被害者等基本法にどのように反映しているかを検討する。また、秋学期には、今、20 世紀末から世界的に起こっている刑事政策の「パラダイム変換 (the transformation of Paradigms)」について学ぶ。

20 世紀は、強大な国家権力から犯罪者（被疑者、被告人）をどう守るかが重要な課題であり、人権について語られるときに、決まったように「犯罪者の人権」が引き合いに出された。しかし、21 世紀に入って国連や国際学会での議論は、「人間の尊厳」をいかに守るかが重要な課題となり、各国政府の最重要課題の 1 つに「社会の安全と人々の安心」が取り上げられるようになった。すなわち、犯罪者の人権を重視する刑事政策から被害者の人権と社会の安全を重視する刑事政策への変換である。

この授業では、このような考え方の変化の裏には何があるのか、そして、そのような新しいパラダイムの下では、犯罪者の人権についてどう考えるべきかを検討する。

刑事訴訟法総合合同演習

教授 安 富 潔
教授 太 田 達 也
専任講師 フィリップ・オステン
法務研究科 教授 井 田 良
法務研究科 教授 鈴 木 左 斗 志
法務研究科 教授 松 田 章

授業科目の内容：

刑事訴訟法を中心として、刑法、被害者学、国際刑事法などの分野について参加者の関心のある研究テーマの報告を求め、全員で討論して議論を深めたい。

民事訴訟法合同演習

最高裁判事事例研究

教授 坂 原 正 夫
教授 三 木 浩 一
法務研究科 教授 春 日 偉 知 郎
法務研究科 教授 中 島 弘 雅
法務研究科 教授 三 上 威 彦

授業科目の内容：

民事手続法に関する判例を素材にして、民事訴訟法（関連法令を含む）の演習を行います。取り上げる判例は主に最高裁の最新の判例ですが、それ以外にも過去の最高裁の判例や最新の下級審の判例も取り上げます。なお民事事例研究だけでなく、修士論文提出予定者の中間発表会、学会発表を予定している研究者の事前の報告会、海外の有名教授のセミナー等が開催されることがあります。

司法制度論

欧州連合における民事司法を中心とする比較法的考察
法務研究科 教授 春 日 偉 知 郎

授業科目の内容：

欧州連合における民事手続法の最先端の動向を把握し、国際的な視野から民事手続法制の比較検討を試みる。具体的には、欧州連合の域内において、各国民事司法制度および民事手続法制の統一化がどのように計画され、具体化されているかについて調査・翻訳し、その内容を分析する。また、その機能について手続法の国際調和の観点から考察し、欧州連合における司法

統一の方向性を探り、国際民事手続法の調和とその限界について考えてみたい。

社会法特殊講義（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教授 田 村 次 朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTO における小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法特殊講義

労働法・社会保障法分野における法的問題点・裁判例の特殊研究

助教授 内 藤 恵

授業科目の内容：

労働法・社会保障法の分野における最近の問題点を、新しい裁判例の研究を通じて考察することを目的とします。出来るならば、学部の段階で労働法及び社会保障法の講義を既に履修している方にご参加戴きたいと思います。

但し毎年履修者が少人数なので、その希望を伺いつつ、テーマ及び進め方を変更します。従って、上記科目を履修していない方であっても、その希望に添う形で理論研究をしたこともあります。講義は概ね各履修者の報告とそれに関するディスカッションで進めます。

社会法特殊演習（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教授 田 村 次 朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカ及び欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTO における小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法合同演習（秋学期集中）

21世紀の社会法構築に向けて

教授 田村 次郎

助教授 内藤 恵

授業科目の内容：

規制緩和・構造改革の潮流のなかで、競争政策は経済政策の一翼としてその重要性が認識されている。しかし、競争政策の内容は論者によって様々に解釈され、時として特定の政策目的のために、競争政策の語が歪曲されている場合も少なくない。そこで、本講座では、競争政策の原点である競争法の理念とその思考形式について、判例分析を通じて検討を進める。Oliver Wendell Holmes 判事の指摘のとおり「法は経験であり」(The life of the law has not been logic, but experience), 経験は判例を通じて熟成される。徹底した判例分析を中心として、競争法的発想方法論について理解を深めることが目的となる。

法哲学特殊講義（秋学期集中）

講師 井上 達夫

授業科目の内容：

社会主義体制は崩壊したが、リベラル・デモクラシーもまた、様々な矛盾・ディレンマを孕み苦悩している。現代世界におけるリベラル・デモクラシーの存在条件・射程を原理的・哲学的に再考する重要な理論的業績を素材にして、討議を行う。

本年度は、上記テーマに関する英語文献の読解と討議を行い、関連問題に関する参加者の自由報告も適宜とりまぜて討議を進展させる。参加者は報告だけでなく討議に積極的に参加することを期待される。

法制史特殊講義Ⅳ

中世ローマ法学の展開ーバルトルスの法学理論の研究ー

教授 森 征一

授業科目の内容：

古代ローマ法と近代ヨーロッパ法の橋渡しをし、普通法（ius commune）の時代を基礎づけた、中世ローマ法学の巨星バルトルスの法学理論を学ぶことが、本講義の目標です。

法制史特殊講義Ⅳ

教授 霞 信彦

授業科目の内容：

明治期における、わが国の刑事法に関する諸問題を取りあげ、これまでの先学の研究成果に立脚しつつ、

史料や文献の輪読を通じて、理解を深めてみたいと考えている。

法制史特殊講義Ⅳ

日仏法文化交流史

教授 岩谷 十郎

授業科目の内容：

本講義では、フランス外務省外交史料館に所蔵される、日本政府お雇い法律顧問ボアソナードによる在日フランス公使館一等書記官コラン・ド・ブランシー宛書簡を読む。民法典論争によるフランス法派の敗北の危機が迫った明治中期の日本にあって、親仏派日本人および在日フランス人は、フランス本国からの援助を背景に公使館の協力を得て、フランスの威信をかけた文化戦略を企てる。この授業で扱うボアソナードの書簡は、彼が離日に至るまでの日々、いかに日本におけるフランスの影響力を保持するか、との問題に腐心した彼の姿を物語っている。学界未見のこの史料について、授業では、担当者がタイプで起こした書簡の原稿を配付し、それに基づいて読解を進めてゆく。

法制史合同演習

法文化の翻訳と移入

教授 森 征一

教授 笠原 英彦

教授 岩谷 十郎

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

本演習は、日本の近代期に出された代表的な法律学文献を参加者一同による輪読を通して深く理解し、内外の関連文献を参照しつつ、今日の日本の法学的前提がどのように歴史的に形成されてきたのかを考えることを目的としている。

03年度までは、西周訳『権利闘争論』を取りあげ、イェーリングの原典とその各国語訳とを対照させ、日本における権利概念の定着を問題として取りあげた。昨年度は、穂積陳重『法典論』を取りあげ、日本民法典を中心とした各国近代期における法典編纂の問題を様々な議論した。

今年度については、江木衷『法律解釈学』（明治18年）を素材として、近代日本における法解釈理論の出発点を見極め、その後の展開を各国の法解釈学的状況との比較から考えることを予定している。

教授 霞 信 彦
文学部 教授 長谷山 彰

授業科目の内容：

履修者が興味をもつ、日本法制史に関する題材を選び、それについての研究発表をおこなうとともに、担当者が問題点の指摘や研究内容に対するコメントを加えることを通じて、法制史研究のための基礎的な知見を涵養していきたいと考えている。さらにそれが、各自の研究論文作成の土台となればよいと思う。

政治学専攻

プロジェクト科目・公務員制度改革と民主主義

教授 小林 節
講師 佐久間 健一
講師 尾西 雅博
講師 花岡 信昭

授業科目の内容：

現在、国家レベルで公務員制度改革が進行している。その政策形成を担当する官僚と、それを継続的にwatchしてきたジャーナリストと、それに参加している理論家が一堂に会して、問題点を分析する。

プロジェクト科目・市民生活の安全と警察に関する比較法的研究

教授 大沢 秀介
教授 小山 剛
講師 太田 裕之

授業科目の内容：

本プロジェクト科目では、最近注目されている人間の安全保障という観点から、その中心的な役割を担う警察その他にかかわる法制度を比較法的な視点に立って検討を加える。

アカデミック・プレゼンテーション（初級）（政治思想・政治社会・日本政治）（春学期）（秋学期）

教授 小林 良彰
教授 有末 賢
助教授 田上 雅徳

授業科目の内容：

Academic Presentation Skills (Introductory and Lower-intermediate Levels)

Language of instruction: English

This course focuses on research design and presenting "American-style" papers.

We begin with a review of presentation skills in English. During this stage of the course, students will complete short presentations (four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to present on, and discuss articles

from the syllabus (four weeks).

Students are expected to present one full-length paper by the end of the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates (four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・プレゼンテーション (中上級) (政治思想・政治社会・日本政治) (春学期) (秋学期)

教授 小林良彰
教授 有末賢
助教授 田上雅徳

授業科目の内容 :

Academic Presentation Skills (Upper-intermediate and Advanced Levels)

Language of Instruction: English

Instructor: Gill Steel

This course focuses on research design and presenting "American-style" papers.

We begin with a review of presentation skills in English. During this stage of the course, students will complete short presentations (four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to present on, and discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to present one full-length paper by the end of the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates (four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・プレゼンテーション (地域研究・国際政治) (春学期) (秋学期)

英語を母語とする教師による、英語によるプレゼンテーションの仕方

教授 横手慎二
教授 山本信人

授業科目の内容 :

Academic Presentation for Graduate Students in International Affairs

Friday 10.45 am

The purpose of this class is to help graduate students present their research in English at a professional level. The present plan assumes little previous experience on the part of the students; if students are experienced and find the class too easy, the class content can be adjusted accordingly. Students will be guided through all the basics of presentation: preparation of content, delivery skills including body language, visual aids and answering questions at the end. Preparation will be required weekly, and practice in front of the class also. Professional standards are expected in the final presentation!

- Class numbers limited to 15 students in each class.
- Assessment: by final presentation.
- If possible, midterm and final presentations will be videotaped.
- Recommended text: *Effective Presentations*, by Jeremy Comfort, Oxford University Press. 2,700¥

アカデミック・ライティング (初級) (政治思想・政治社会・日本政治) (春学期) (秋学期)

教授 小林良彰
教授 有末賢
助教授 田上雅徳

授業科目の内容 :

Academic Writing and Research Design (Introductory and Lower-intermediate Levels)

Language of Instruction: English

Instructor: Gill Steel

This course focuses on research design and writing "American-style" research papers.

We begin with a review of the fundamentals of academic writing style in English. During this stage of the course, students will complete short

writing assignments(four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to produce one full-length research paper by the end of the course. This paper will be due in stages throughout the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates (four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・ライティング (中上級) (政治思想・政治社会・日本政治) (春学期) (秋学期)

教授 小林良彰
教授 有末賢
助教授 田上雅徳

授業科目の内容 :

Academic Writing and Research Design
(Upper-intermediate and Advanced Levels)
Language of Instruction: English
Instructor: Gill Steel

This course focuses on research design and writing "American-style" research papers. During the first stage of the course, students will complete short writing assignments (four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to produce one full-length research paper by the end of the course. This paper will be due in stages throughout the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates(four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25%

presentation).

アカデミック・ライティング (地域研究・国際政治)
(春学期) (秋学期)

英語を母語とする教師による英語論文の書き方

教授 横手慎二
教授 山本信人

授業科目の内容 :

Academic Writing for Graduate Students in
International Affairs

Friday 9.00 am

This course is for any graduate student of international affairs who would like to write well in English: high level journalism as well as academic writing. The course will cover organization of material, style, language structures and other aspects of preparing an article for publication, subject to time limitations. Since weaknesses and strong points in writing are very much an individual matter, the detailed content of each class will be decided after I have had an opportunity to analyze students' writing and therefore the schedule will be handed out to participating students at the beginning of the *second class* on April 15th.

- Students in this class must already be able to write some English, even if they cannot write well; this is not a class for beginners.
- Numbers are restricted to fifteen.

In addition, all members of the class must:

- Submit a short piece (2-3 pages) of your own academic writing in English. This piece does not have to be new, but it is a requirement. It can be a part of a longer essay. Please bring it with you to the first class on April 8th., or, if you cannot come to that class, hand it in to the 学事センター 法学研究科係 by 1.00 pm on that day.
- Write regularly outside class time, including a daily journal.
- Read widely in well written English. The importance of reading cannot be overemphasized: those who do not read cannot write, and newspapers are not enough.

You will need access, throughout the course, to:

1. Good dictionaries, both English/English and Japanese (or other native language)/English
2. A thesaurus
3. The Chicago Manual of Style
4. Varied reading matter in English on your own research topics.

There may in addition be a recommended text book. This is undecided as yet, but if there is, it will be easy to obtain and inexpensive. Assessment will be continuous throughout the semester, and will include a final essay.

渋沢栄一記念財団寄附講座

シヴィル・ソサエティ論（春学期）

新公益論：日本の行政改革とシヴィル・ソサエティの役割分担の調整

教授 河野 武 司

「新公益論」は、渋沢栄一を記念して 2004 年度より開設された科目です。

近代日本社会において、「公益」の決定者、管理者は基本的には国家官僚機構でありましたが、現在の社会においては、そのような「ガバナンス」（社会秩序の維持・運営のシステムを意味するものでありますが、旧来は、もはや適切でない“統治”という表現が使われてきました）の構造は明らかに崩れ始めており、「公益」を維持・増進するためには、政府と協力したり、対抗するような、自発的であり、自己の役割に目覚めた集団としての市民のつながりとしてのシヴィル・ソサエティが必要になってきています。このシヴィル・ソサエティの台頭は多様な形をとるものと考えられます。地方自治体が中央官僚の「公益」に対抗して地域の「公益」を住民投票で示して対抗したなどという事例は増えています。政治家が官僚の介入を排除して、市民の立場に立って法案を提出して、これを立法化するという「議員立法」は、まだ限られたものではありませんが、NPO 法案の成立などのケースも目立ち始めています。勿論、NGO、NPO が地球的課題をめぐる対外的な活動や、環境問題、移民などの国内的課題への取り組みについて、政府・官僚が十分対応できない分野での活動が近年一層注目を浴び始めています。

しかしながら、これまでの統治のシステムを、市民、シヴィル・ソサエティが公益の維持・促進に関与

できるようなガバナンスのシステムに転換させていくことは容易でないことは言うまでもありません。そのことが如実に現れているのが、これまでの一連の行政改革、財政改革などの多様な改革の努力であり、これについて具体的に検証することにより、これまでの官僚主導のシステムから脱却する可能性、新しいガバナンスのシステムを構築するための政治家の役割、改革を可能ならしめるうえでの市民・シヴィル・ソサエティの役割、企業と自己責任による利益の拡大の努力の可能性、などを模索することが出来るものと考えます。

本科目は、大学院生を対象に、各テーマに 2 時限をあて、前半の 1 コマ目は学部学生、社会人等の聴講を含む講義、後半の 2 コマ目は大学院生による前半の講義を受けてのゼミ形式の授業とし、6 つのテーマを取りあげます。

政治思想論特殊演習（春学期）

教授 蔭 山 宏

授業科目の内容：

大学院蔭山研究会の院生を対象とした研究指導をおこなう。

政治思想論特殊演習（秋学期）

教授 蔭 山 宏

授業科目の内容：

大学院蔭山研究会の院生を対象とした研究指導をおこなう。

政治思想論特殊演習（春学期）

研究発表・中間報告（大学院ゼミ）

教授 萩 原 能 久

授業科目の内容：

主として大学院で私を指導教授とする学生を対象に、修士論文、博士論文の中間報告を行ってもらい、論文作成の際の、技法的レベルも含めた様々な問題点について参加者全員で討論を行う。

政治思想論特殊演習（秋学期）

教授 萩 原 能 久

授業科目の内容：

春学期に同じ。

政治思想論特殊演習（秋学期）

名誉教授 鷲見 誠 一

授業科目の内容：

春学期の「政治思想論特殊研究」の内容を継続します。

政治思想論特殊研究（春学期）

ウェーバーとその後

教授 蔭山 宏

授業科目の内容：

20世紀ドイツの政治思想に関する原書を読む予定。

政治思想論特殊研究（春学期）

ドイツ語文献の講読

教授 萩原 能久

授業科目の内容：

この特殊研究では、院生、特に本年度末に修士論文を提出しようとしている修士課程2年の院生が自己の論文執筆に役立つよう、院生から提案されたドイツ語文献（履修者の希望が多ければ、たまには英語文献を取り上げることもある）をテキストとして用い、ドイツ語（外国語）の文献を自由に使いこなせる訓練を行うものである。

政治思想論特殊研究（秋学期）

教授 萩原 能久

授業科目の内容：

春学期の継続。秋学期のみの参加を希望する者は相談に乗る。

政治思想論特殊研究（春学期）

名誉教授 鷲見 誠 一

授業科目の内容：

近代政治思想の大前提である「近代人」はどのように成立してきたか。主体性と自律性の確立をヨーロッパ精神史の中でたどっていく。

政治理論（春学期）

名誉教授 根岸 毅

授業科目の内容：

すべて学問は、それに対する「社会の期待」に沿うように構成する必要がある。この立場から、政治学に対する期待とはなにか、それに沿って政治学を構成するにはどうしたらいいか、その過程で「国家」はどのような役割を果たすか、そもそも国家とはなにか等々

の問題を論ずる。その方法論的前提として、科学と問題解決のかかわりの論理を解明する。

政治・社会論特殊演習（春学期）

論文作成と研究発表セミナー

**政策・メディア研究科 教授 曾根 泰 教
授業科目の内容：**

各自がおこなっている研究の発表と討論を中心に授業を進める。

どのように、テーマを選定するか、それをどのように具体的な研究の枠組みにのせるか、採用する手法、データ・資料などの使い方、結論をいかに位置づけるか、先行研究との関連など、を中心に議論を進展させる。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

論文作成と研究発表セミナー

**政策・メディア研究科 教授 曾根 泰 教
授業科目の内容：**

各自がおこなっている研究の発表と討論を中心に授業を進める。

どのように、テーマを選定するか、それをどのように具体的な研究の枠組みにのせるか、採用する手法、データ・資料などの使い方、結論をいかに位置づけるか、先行研究との関連など、を中心に議論を進展させる。

政治・社会論特殊演習（春学期）

政治過程分析

教授 小林 良彰

授業科目の内容：

政治現象の中から、各自の問題意識にしたがって研究を進め、研究成果を報告する。

政治・社会論特殊演習（春学期）

社会学理論研究

教授 霜野 寿亮

授業科目の内容：

理論社会学の基礎的文献に関する報告を求め、議論する。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

社会学理論研究

教授 霜野 寿亮

授業科目の内容：

理論社会学の基礎的文献に関する報告を求め、議論する。

政治・社会論特殊演習（春学期）

グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学

教授 関根 政美

授業科目の内容：

本授業は、原則として本授業担当者を指導教授とする大学院前期博士（修士）課程院生のための授業である。

授業の内容は、各院生の研究報告をもとに質疑応答を行う演習授業とする。修士論文作成を中心として授業となるので、①修士論文の内容に関連した先行研究としての研究書あるいは論文についての報告・質疑応答、②修士論文そのものの報告と質疑応答、などを行う予定である。なお、必要に応じて、学部研究会学生の聴講を求める場合もある。

なお、関根を指導教授としないものでも修士論文作成に当たり、授業に参加したいという院生は相談すること。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

脱工業化・グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学

教授 関根 政美

授業科目の内容：

本授業は、原則として本授業担当者を指導教授とする大学院前期博士（修士）課程院生のための授業である。

授業の内容は、各院生の研究報告をもとに質疑応答を行う演習授業とする。修士論文作成を中心とした授業となるので、①修士論文の内容に関連した先行研究としての研究書あるいは論文についての報告・質疑応答、②修士論文そのものの報告と質疑応答、などを行う予定である。なお、必要に応じて、学部研究会学生の聴講を求める場合もある。

なお、関根を指導教授としないものでも修士論文作成に当たり、授業に参加したいという院生は相談すること。

政治・社会論特殊演習（春学期）

教授 有末 賢

授業科目の内容：

基本的には受講生の研究テーマの報告を主として授

業を進めていく予定である。人数にもよるが、修士論文、博士論文、学会報告、投稿論文などの中間報告として討論を進めていきたい。

場合によっては、文献の輪読、ゲスト・スピーカーの講演なども考えられる。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

教授 有末 賢

授業科目の内容：

基本的には受講生の研究テーマの報告を主として授業を進めていく予定である。人数にもよるが、修士論文、博士論文、学会報告、投稿論文などの中間報告として討論を進めていきたい。

場合によっては、文献の輪読、ゲスト・スピーカーの講演なども考えられる。

政治・社会論特殊演習（春学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

学会発表や論文作成に向けて、受講者各人が発表し、それに基づいて討議する。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

学会発表や論文作成に向けて、受講者各人が発表し、それに基づいて討議する。

政治・社会論特殊研究（春学期）

制度と政策の政治学

政策メディア研究科 教授 曾根 泰 教

授業科目の内容：

従来から行ってきた制度論をさらに発展させ、政治学的手法を各自の研究に生かすために、参考になる最近の図書を選択して、輪読、発表を行う。テーマとしては、金融政策の政治的決定過程、「討論民主主義」の議論の背景、政治の基礎にある「信頼」などを扱う。

政治・社会論特殊研究（春学期）

社会学理論研究

教授 霜野 寿 亮

授業科目の内容：

本講義の狙いは理論社会学の視点をを中心に議論することにある。論点を見いだすための文献候補として次

の3点を挙げておくが、最終的には履修者の研究関心にあわせて決めることにしたい。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

社会学理論研究

教授 霜野 寿亮

授業科目の内容：

本講義の狙いは理論社会学の視点を中心に議論することにある。論点を見いだすための文献候補として次の3点を挙げておくが、最終的には履修者の研究関心にあわせて決めることにしたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学

教授 関根 政美

授業科目の内容：

本授業では、授業担当者の専門である「脱工業化・グローバリゼーションと多文化交錯世界の人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治社会学」に関連するテーマを適宜選択して行う。キーワードとしては他に、移民・難民・外国人労働者、先住民、市民権、アイデンティティ・ポリティクス、文化戦争、ポリティカル・コレクトネスなどがある。授業担当者は、以上のテーマを〈現代先進社会（日本含む）〉に共通する問題として、理論的な考察をする国際政治社会学者であるとともに、現代オーストラリアを題材に、上述のテーマを中心に考察する地域研究者でもある。本授業では、理論的考察を中心に実施する予定である。しかし、日本研究や第3世界研究を志す諸君にとっても民族・エスニック問題を考える上で役立つであろうし、他の参加者にとってもよい刺激となるだろう。授業は演習形式で行う。履修者諸君には、英文の最新の研究書や論文を読んでもらい、内容について報告とコメントをしてもらい、質疑応答をしながら授業を進めてゆく。履修者数にもよるが、報告は1回のセッションで複数の学生に競争的に行ってもらおう。それは、各自の独自の観点からのコメントを提出してもらい、授業での議論を盛り上げてもらいたいからである。

政治・社会論特殊研究（春学期）

社会調査論（質的研究）特殊研究

教授 有末 賢

授業科目の内容：

昨年度に引き続いて、質的調査研究論の中から、今年度はインタビュー論をとりあげてみたい。英文の文献を分担して輪読していく形式を考えている。文献については、確定ではないが、以下のものを考えている。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

社会調査論（質的研究）特殊研究

教授 有末 賢

授業科目の内容：

秋学期については、アイデンティティ論などについても取り上げてみたいと考えている。

政治・社会論特殊研究（春学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

マス・コミュニケーションに関する文献・論文を読み、それについて討議する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

マス・コミュニケーションに関する文献・論文を読み、それについて討議する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

現代行政学のフロンティア研究

教授 大山 耕輔

授業科目の内容：

現代行政学のフロンティアを研究する。グローバル化、IT化、地方分権化、民営化、ガバナンス化等の政府を取り巻く環境変化に現代行政学はどう対応しているのか。英文テキストを輪読して論点を提示してもらい、それらについて討論するスタイルで進めたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

教授 麻生 良文

授業科目の内容

地方財政の問題を扱う。国と地方の役割分担、地方交付税や補助金の根拠などについて基礎文献を読む。文献は開講時に指示する。

政治・社会論特殊研究（春学期）

メディア・コミュニケーション研究所 教授
菅 谷 実

授業科目の内容：

ネットワーク理論についての文献を講読する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

メディア・コミュニケーション研究所 教授
菅 谷 実

授業科目の内容：

ネットワーク理論についての文献を講読する。

政治・社会論特殊研究（春学期）

政治的コミュニケーション論（Ⅰ）

講 師 鶴 木 真

授業科目の内容：

政治社会学の一領域としての、「政治的コミュニケーション」の視点から、現代の国際社会の情報化がもたらす「新しい生活危機」について、受講生と共に考察する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

政治的コミュニケーション論（Ⅱ）

講 師 鶴 木 真

授業科目の内容：

政治社会学の一領域としての、「政治的コミュニケーション」の視点から、「国際コミュニケーション」について、受講生と共に考察する。

政治・社会論特殊研究（春学期）

ジャーナリズム，メディア研究

講 師 大 井 眞 二

授業科目の内容：

M. ウェバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」になぞらえる訳ではないが、プロテスタンティズムの神学が近代ジャーナリズムの誕生に重要な関わりをもったことは、コミュニケーション研究者ならずとも、意外に見落とされてきた論点と言えるかもしれない。現代米国において、モラル・マジョリティやキリスト教右派の団体の活動が米国の政治を左右する重要なアクターであり、またメディアにも重大な影響を与えているように、アングロ・アメリカン・ジャーナリズムは起源から今日に至るまで、こうした宗教や宗教と密接な関係をもつ道徳との関わり合いを離れて存在し得なかった。

そこで、本講義では以下のテキストを参照しながら、メディアと宗教の問題を歴史的コンテクストにおいて考えてみたい。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

ジャーナリズム，メディア研究

講 師 大 井 眞 二

授業科目の内容：

M. ウェバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」になぞらえる訳ではないが、プロテスタンティズムの神学が近代ジャーナリズムの誕生に重要な関わりをもったことは、コミュニケーション研究者ならずとも、意外に見落とされてきた論点と言えるかもしれない。現代米国において、モラル・マジョリティやキリスト教右派の団体の活動が米国の政治を左右する重要なアクターであり、またメディアにも重大な影響を与えているように、アングロ・アメリカン・ジャーナリズムは起源から今日に至るまで、こうした宗教や宗教と密接な関係をもつ道徳との関わり合いを離れて存在し得なかった。

そこで、本講義では以下のテキストを参照しながら、メディアと宗教の問題を歴史的コンテクストにおいて考えてみたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

ナショナリズムとグローバル化の社会学

講 師 吉 野 耕 作

授業科目の内容：

人文社会科学の中でナショナリズムやグローバル化研究が本格化してかなりの時間が経過した。しかし、社会学的には必ずしも満足のいく展開がなされてきたとは言えない。グローバル化、ポストコロナリズム、ナショナル・アイデンティティ、帝国主義、帝国、移住、グローバル資本主義などに関する最近の論文を読みながら、重要と思われるテーマを拾い、理論的に掘り下げたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

政治コミュニケーション研究

講 師 谷 藤 悦 史

授業科目の内容：

本政治・社会論特殊研究では、政治コミュニケーションに関わる分野について広く検討する。現代民主主義国家における政治情報・政治知識の特性、マス・メディアとジャーナリストの政治的役割、現代市民の

政治理解，現代の公共空間，選挙過程と政治マーケティング・政治宣伝などの問題を広く検討する。本年は，マス・メディアと民主主義を中心的テーマとして行う。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

世論研究

講師 谷藤悦史

授業科目の内容：

本政治・社会論特殊研究では，世論ならびに世論研究に焦点をあてて講義を進める。近代啓蒙期における世論観と近代民主主義における世論の位置を議論した後，世論研究の現代的視座，現代民主主義における世論の位置，現代における世論形成過程の特性，世論調査の発達と現状，現代の世論論争などの問題を広く検討する。

日本政治論特殊演習（秋学期）

現代日本政治分析

教授 小林良彰

授業科目の内容：

現代日本の政治過程の中から，各自の問題意識にしたがって研究を進め，研究成果を報告する。

日本政治論特殊演習（春学期）

日本政治史および日本行政史

教授 笠原英彦

授業科目の内容：

論文の作成を指導する。

日本政治論特殊演習（秋学期）

日本政治史および日本行政史

教授 笠原英彦

授業科目の内容：

論文の作成を指導する。

日本政治論特殊演習（春学期）

教授 寺崎修

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて，報告を求めながら論文作成上必要と思われる助言と指導を行う。

日本政治論特殊演習（秋学期）

教授 寺崎修

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて，報告を求めながら論文作成上必要と思われる助言と指導を行う。

日本政治論特殊演習（春学期）

近代日本政治史研究

教授 玉井清

授業科目の内容：

近代日本政治史に関する各自の研究発表を行い修士論文，博士論文執筆のための批判討論を行う。

日本政治論特殊演習（秋学期）

近代日本政治史研究

教授 玉井清

授業科目の内容：

近代日本政治史に関する各自の研究発表を行い修士論文，博士論文執筆のための批判討論を行う。

日本政治論特殊研究（春学期）

戦前昭和期の政治

教授 玉井清

授業科目の内容：

最後の元老で戦前昭和期，実質的なキャビネットメーカーと目された西園寺公望の秘書，原田熊雄が残した口述記録を輪読し，当該期の政治をめぐる種々の問題について議論を深めていきたい。

日本政治論特殊研究（秋学期）

戦前昭和期の政治

教授 玉井清

授業科目の内容：

春学期に続き，最後の元老で戦前昭和期，実質的なキャビネットメーカーと目された西園寺公望の秘書，原田熊雄が残した口述記録を輪読し，当該期の政治をめぐる種々の問題について議論を深めていきたい。扱う巻数は春学期の進行状況により多少変更する可能性がある。

日本政治論合同演習（春学期）

日本政治史の研究

教授 笠原英彦

教授 寺崎修

教授 玉井清

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて報告を行い，討論する。

日本政治論合同演習（秋学期）

日本政治史の研究

教授 笠原英彦
教授 寺崎修
教授 玉井清

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて報告を行い、討論する。

地域研究論特殊演習Ⅱ（春学期）

教授 小此木政夫

授業科目の内容：

修士論文および博士論文の指導を中心に。学生諸君の論文発表に関する討議および論評の形式で進める。

地域研究論特殊演習Ⅱ（秋学期）

教授 小此木政夫

授業科目の内容：

修士論文および博士論文の指導を中心に。学生諸君の論文発表に関する討議および論評の形式で進める。

地域研究論特殊演習Ⅱ（春学期）

中東地域研究の論文指導とセミナー

教授 富田広士

授業科目の内容：

受講者の研究報告を中心に、演習を行う。また、それと並行して、英書の内容報告とディスカッションを行う。

地域研究論特殊演習Ⅱ（秋学期）

現代中国政治・外交研究

教授 国分良成

授業科目の内容：

各自の研究論文の中間報告を中心にすすめる。

地域研究論特殊演習Ⅱ（春学期）

ロシア研究

教授 横手慎二

授業科目の内容：

ロシアの政治と外交について、参加者の関心に合わせてゼミナール形式で行う。

地域研究論特殊演習Ⅱ（秋学期）

ロシア研究

教授 横手慎二

授業科目の内容：

ロシアの政治と外交について、参加者の関心に合わせてゼミナール形式で行う。

地域研究論特殊演習Ⅱ（春学期）

教授 井上一明

授業科目の内容：

修士論文に関する指導をおこなう。

地域研究論特殊演習Ⅱ（秋学期）

教授 井上一明

授業科目の内容：

修士論文に関する指導をおこなう。

地域研究論特殊演習Ⅱ（秋学期）

中国革命史の最新文献の検討

教授 高橋伸夫

授業科目の内容：

中国革命史に関する最新文献の検討を行う。中国語と英語の文献が中心となろう。どのようなテーマの文献を選択するか——狭い意味での党史、社会史、文化史、女性史など——は参加者と相談して決めたい。

地域研究論特殊演習Ⅱ（秋学期）

助教授 出岡直也

授業科目の内容：

近年の南米諸国の強い傾向として左派的な勢力が選挙で勝利し、政権にあることがあります。最も左翼政党を支持すると期待される「労働者階級」の政治的志向について南米地域ではどんな特徴があったのかを、一般理論も参照して考察します。そのための英語文献の講読と検討を行います。

地域研究論特殊研究Ⅳ（春学期）

教授 小此木政夫

授業科目の内容：

南北朝鮮の国内政治と対外関係に関するより深い理解を目的とする。文献講読、学生諸君の発表、ゲスト講義などを織り交ぜて、講義を進める。

地域研究論特殊研究Ⅳ（秋学期）

中東地域研究（国内政治）の文献講読とセミナー

教授 富田 広 士

授業科目の内容：

中東各国の国内政治に関する英語文献の内容報告を行い、それを手掛かりに、途上国地域の動態について比較分析を行う。

地域研究論特殊研究Ⅳ（秋学期）

多文化交錯社会オーストラリアの人種・民族・エスニック集団関係と多文化主義

教授 関 根 政 美

授業科目の内容：

本授業では、授業担当者の専門である「脱工業化・グローバリゼーションと多文化交錯世界の人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治社会学」に関連するテーマを中心に行う。授業担当者は、上述のテーマを〈現代先進社会（日本含む）〉に共通する問題として、理論的な考察をする国際政治・社会学者であるとともに、現代オーストラリアを題材に、上述のテーマに従った考察を行う地域研究者でもある。本授業では、地域研究として現代オーストラリアを題材として授業を行う。授業は演習形式を採用する。履修者諸君には、英文のオーストラリアに関する最新の研究書や論文を読んでもらい、内容について報告とコメントをしたうえで、質疑応答をしながら授業を進めてゆくつもりである。履修者の数にもよるが、報告は複数の学生に競争的に行ってもらふ。それは、各履修者独自の観点からコメントを提出してもらい、授業での議論を盛り上げてほしいからである。とくに本授業を履修するに当たり、オーストラリアについての詳しい知識は必要ないが、テーマとの関係から、春学期の政治・社会論特殊研究（春）「グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学」を履修しておくことが望ましい。

地域研究論特殊研究Ⅳ（春学期）

日中関係史研究

教授 国 分 良 成

授業科目の内容：

1980年代の日中関係に関する研究を行う。今年度は特に1970年代末から1980年代前半を中心に扱う。

地域研究論特殊研究Ⅳ（春学期）

近現代中国史における都市空間

教授 高 橋 伸 夫

授業科目の内容：

「近現代中国史における都市空間」をテーマにしたリーディング、および討論を通じて、中国政治史、現状分析のための基礎体力の養成を目的とする。開講時に文献リストを配付するが、必ず取り上げる文献のひとつは、

Deborah S. Davis, Richard Kraus, Barry Naughton, Elizabeth Perry, eds., *Urban Spaces in Contemporary China* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).

地域研究論特殊研究Ⅳ（春学期）

助教授 出 岡 直 也

授業科目の内容：

近年の南米諸国の強い傾向として左派的な勢力が選挙で勝利し、政権にあることがあります。その現象を歴史的視座から考察するために、英語文献の講読と検討を行います。

地域研究論特殊研究Ⅳ（秋学期）

アメリカ現代政治の考察

客員教授 久 保 文 明

授業科目の内容：

アメリカ政治（政治史、政治思想、外交、外交史を含む）を本格的に研究している大学院学生を対象に、各自の研究報告とアメリカ現代政治に関する代表的著作の講読・討論を行う。報告できる程度のアメリカ政治に関する研究の蓄積があり、またアメリカ政治の基本的文献の読了に意欲をもつことが参加の条件となる。

地域研究論合同演習（春学期）

第三世界における1980年代以後の民主化の再考

教授 井 上 一 明

助教授 出 岡 直 也

名誉教授 根 岸 毅

授業科目の内容：

「民主化」と「民主化の政治学」、そして「経済と政治（特に民主主義）の関係」についてラテンアメリカとアフリカのケースから再考する。

地域研究論合同演習（秋学期）

多文化世界における「市民社会」概念の形成

教授 富田 広 士
教授 国分 良 成
教授 横手 慎 二
教授 井上 一 明
教授 山本 信 人
教授 高橋 伸 夫
助教授 出岡 直 也

専任講師（有期） 粕谷 祐 子

授業科目の内容：

本塾大学 21 世紀 COE プログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成—多文化世界における市民意識の動態—」では、大学院教育、特に後期博士課程の研究教育の充実を重視している。その際、博士生諸君には、従来の各人の研究とこの COE プログラム研究の関係を強く意識しながら、研究を進めることが期待されている。その事業の一環として、本セミナーでは、「多文化世界における『市民社会』概念の形成」について、各地域研究の視点と枠組みから分析・ディスカッションを行う。中心テーマは、各地域・国家において「市民社会」概念が多文化・多民族的な社会状況の中でいかに形成され、理解・認識されているのか、という点に置かれ、この点をめぐり言説あるいは実態の分析を行う。

国際政治論特殊演習（春学期）

欧州統合

ジャン=モネ チェア 教授 田中 俊 郎

授業科目の内容：

ヨーロッパ連合（EU）に関して、学生諸君の報告を求め、報告を中心に討論したい。

国際政治論特殊演習（秋学期）

欧州統合

ジャン=モネ チェア 教授 田中 俊 郎

授業科目の内容：

ヨーロッパ連合（EU）に関して、学生諸君の報告を求め、報告を中心に討論したい。

国際政治論特殊演習（秋学期）

教授 添谷 芳 秀

授業科目の内容：

修士論文・博士論文の研究計画、途中成果、全体構想等を報告し、履修者全員で討論する。

国際政治論特殊演習（春学期）

修士論文・博士論文指導

教授 赤木 完 爾

授業科目の内容：

修士論文および博士論文の指導を中心に進める。あわせて現代国際政治・安全保障研究に関連する文献を講読する。また指定したテーマで報告を求めることもある。

国際政治論特殊演習（秋学期）

論文指導

教授 田所 昌 幸

授業科目の内容：

修士論文の指導を随時行う形で、授業を運営する。

国際政治論特殊演習（春学期）

教授 山本 信 人

授業科目の内容：

修士論文に関する報告と指導を中心に進める。

国際政治論特殊演習（秋学期）

教授 山本 信 人

授業科目の内容：

修士論文に関する報告と指導を中心に進める。

国際政治論特殊研究（春学期）

EU 統合と加盟国

ジャン=モネ チェア 教授 田中 俊 郎

授業科目の内容：

EU 統合と加盟国をテーマに、具体的なケースとして EU 市民の欧州人としてのアイデンティティの問題をとりあげる予定。

国際政治論特殊研究（春学期）

教授 添谷 芳 秀

授業科目の内容：

拙著『日本のミドルパワー外交（仮題）』（5月7日出版予定）を材料に、さらに議論を深めたい。

国際政治論特殊研究（春学期）

安全保障研究

教授 赤木 完 爾

授業科目の内容：

安全保障研究に関連する諸論点を議論する。主題は理論と歴史にまたがる。理論に関しては攻撃—防御変

数の問題を中心に扱う。歴史分析については、主として 20 世紀の戦争と平和、ならびに戦略を取り扱う。

国際政治論特殊研究（春学期）

冷戦後の国際秩序

教授 田所 昌幸

授業科目の内容：

冷戦後の国際秩序について、以下のような文献を輪読する形でセミナーを運営したい。

国際政治論特殊研究（春学期）

東南アジア地域研究入門

教授 山本 信人

授業科目の内容：

本セミナーでは、東南アジア地域研究に関する基本的文献を濫読する。少なくとも、「テキスト」欄に提示した二種類の基本書を読破する。カバーする範囲は原則として、東南アジア全域に関する 19 世紀以降の政治史である。

憲法特殊講義

現代日本における憲政の課題

(共同担当) 教授 小林 節

(共同担当) 講師 平沢 勝栄

授業科目の内容：

憲政の最前線で活躍している政治家と憲法理論家が、学生とともに、今の日本で現実の問題になっている憲法上の課題を、タブーなく分析し、その成果を半年ごとに本にしている。

憲法特殊講義

マスメディアから見た憲法と政治

(共同担当) 教授 小林 節

(共同担当) 講師 中野 邦観

(共同担当) 講師 木村 正人

(共同担当) 講師 園田 康博

授業科目の内容：

憲法論議をめぐる状況はここに来て大きく変化している。国際情勢の激動とともに、世論、政治、メディア、有識者など、さまざまな側面から、憲法を見直さなければ日本は国際社会で生きていけないのではないか、という問題意識、危機感が高まっている。では憲法論議を具体的にどう進めたらいいのか。マスメディアから読売憲法改正試案を実際に作成、発表した当事

者の立場から、憲法論議の焦点を考え、憲法の改革の方向、政治の現状、マスメディアの態度などを分析して、憲法改正の行方を展望する。

授業の柱は「憲法改革の論点、改正の方向」「第九条を中心とした安全保障の考え方」「憲法論議のこれまでの流れ」「マスメディアの論調と憲法報道」「読売憲法改正試案などさまざまな改正提案の内容」「政治の現状分析と憲法論議の行方」などになる。

憲法特殊講義

アメリカ憲法研究

教授 大沢 秀介

授業科目の内容：

アメリカ憲法に関する文献を輪読する。なお、受講者にはアメリカ憲法についての知識が要求される。

憲法特殊講義

(共同担当) 教授 小山 剛

(共同担当) 教授 駒村 圭吾

授業科目の内容：

憲法の基礎理論に関するドイツおよびアメリカの文献を輪読する。少人数による密度の濃い研究を予定しているため、参加者には、十分な語学力と憲法についての基礎知識が要求される。履修希望者は、事前に担当者（駒村）に相談されたい。

憲法特殊講義

最新の憲法問題の検討を通じた憲法の理論と動態の考察

講師 川崎 政司

授業科目の内容：

内外の最近の立法、政治課題、事件、判例等を題材として、最新の憲法問題について全員で検討を行い、それらを通じて憲法の理論と動態について考えていくこととしたい。また、その際には、それらに関連する法制度・法政策の設計・評価などについてもできるだけ言及することとし、そのような作業に必要不可欠となる法的思考能力・政策立案能力の養成といったことにも取り組んでいきたいと思っている。なお、履修者の興味・希望等によっては、必ずしも憲法という枠にこだわることなく、各種法的課題について幅広く取り上げていくこととしたい。

憲法特殊講義

日本の安全保障講座

(共同担当) 講師 田村 重信

(共同担当) 講師 長島 昭久

授業科目の内容：

本講座の主眼は、実際の日本政府の安全保障政策（憲法と防衛法制を中心）全般を正しく学ぶことにある。

内容は、政治の決定過程の現場に携わる講師が、安保・防衛政策の基本と国会で議論されマスコミ報道される北朝鮮問題やイラクへの自衛隊派遣問題などのホットな話題も最新情報と資料をもとに、講義の中で取り扱う。

今後の日本の安全保障政策を考えるうえで極めて有意義なものとなる。

憲法特殊演習

現代において必要とされている行政改革とは何か

(共同担当) 講師 植松 健

(共同担当) 講師 松村 雅生

授業科目の内容：

行政の透明性、公平性、利便性、効率性が強く求められているが、行政改革論議の現状を、理論と実務の両面から総合的に検討してみたい。

ひとつには、近年導入された情報公開法、政策評価法等の運用実態等を検証しながら、行政改革の基盤的制度の導入が政治、行政のあり方にどのような変化をもたらしているか、実証的に分析、検討を行う。

また、行政実務を踏まえ、地方分権時代における地方公共団体の行政改革の現状、課題等を研究するとともに、行政苦情救済制度、オンブズマン制度の今日的意義・役割等について考察する。

憲法特殊演習

講師 山岡 永知

授業科目の内容：

憲法特殊演習の授業は、アメリカ合衆国憲法に基づく連邦制度、および、連邦議会の権限について解説し、特に、合衆国憲法第1条8節3項に規定される「州際通商条項」に基づく立法の合憲性について研究する。更に、合衆国憲法修正10条に規定される州に留保されるポリス・パワーに基づく権限との関係についても判例を通じて研究する。本授業においては連邦最高裁判所の色々な判例を分析し、同裁判所による憲法解釈について理解を深める。

憲法合同演習

教授 小林 節

教授 大沢 秀介

教授 小山 剛

教授 駒村 圭吾

授業科目の内容：

今の予定としては、毎回1人のペースで履修者の研究中間報告か重要な最高裁憲法判例の研究報告をすることなどを考えているが、具体的には、年度始めに、履修者の希望も聴いて決めたい。

政府規制産業法特殊演習

電力・ガス・テレコム等の規制

教授 藤原 淳一郎

授業科目の内容：

電気事業法、ガス事業法、電気通信事業法の3つの事業法の改正を受けた制度設計が始まり、かつ独禁法改正も予想される。これらのトピックスをはじめ、問題提起的な内外文献を講読する。

国際租税法特殊講義

講師 ムザール・ハンス・ペータ

授業科目の内容：

国際租税法の事例を取り上げ分析する。

租税法特殊講義（秋学期集中）

租税法基本判例の研究

助教授 吉村 典久

授業科目の内容：

租税基本判例の判例研究を行います。実務および理論において、判例はきわめて重要な意味を持っております。判例を無視して、租税訴訟における弁論を組み立てることもできませんし、また、理論を構築することもできません。本講義の目標は、判例の事実を理解し、判例の位置づけを明確にするとともに、判例の射程距離を正確に読む能力を養成することにあります。

租税権利救済法特殊講義

租税訴訟の理論と実務

(共同担当) 教授 小林 節

(共同担当) 講師 野本 昌城

(共同担当) 講師 平野 朝子

授業科目の内容：

租税紛争の法的解決をなしうる能力を修得しよう

- 1 行政事件訴訟法（民事訴訟法を含む）の理論
- 2 租税訴訟に係る法廷実務（要件事実論，訴状・答弁書・準備書面等の作成方法，陳述および尋問方法）
- 3 租税判例研究などを教授実施します。

租税手続法特殊講義（春学期）

講 師 藏 重 有 紀

授業科目の内容：

行政手続法，行政不服審査法及び行政事件訴訟法の概要を理解するとともに，これらと国税通則法との関係及び国税不服審判所の役割を理解できるようにする。

行政法合同演習

教 授 藤 原 淳 一 郎
 助教授 吉 村 典 久
 専任講師 青 木 淳 一
 講 師 首 藤 重 幸

授業科目の内容：

- ① 改正行政事件訴訟法の研究
- ② 各自の研究テーマについての中間報告
- ③ 判例研究（内外）

国際法特殊講義（国連大学講座）（秋学期）

教 授 大 森 正 仁

授業科目の内容：

この講義は，2005年10月から開講される国連大学大学院共同講座を受講するために開講されるものです。共同講座は渋谷の国連大学において開講され，テーマは，「激動する世界と多様な国連の機能：平和構築と持続可能な開発」および「多発する紛争：要因・予防・国際的対応」のふたつを取り上げます。授業は英語で行われ，学生の発表も求められます。国連の活動に興味を有している学生諸君で，共同講座の受講を希望する学生は，学事センターに用意された申請書および申請書類を提出し，申込をしてください。

国際法特殊講義

名誉教授 栗 林 忠 男

授業科目の内容：

海洋法の諸問題を発表・討論の形式で考察する。

国際法特殊講義

国際環境判例研究

講 師 臼 杵 知 史

授業科目の内容：

国際環境紛争に関する判例を通して，環境保護に関する国際法の基本的な原則・規則について理解する。国際裁判（司法的解決）の意義と限界，紛争解決フォーラムの選択に関する最近の議論についても検討する。

国際法合同演習

教 授 大 森 正 仁

講 師 青 木 隆

授業科目の内容：

国際法の基本的な英文文献を読み，そこに含まれる問題点について検討・討議を行ってゆく。対象とする文献および授業の進め方については最初の授業で説明する。

法制史特殊講義Ⅳ

中世ローマ法学の展開－バルトルスの法学理論の研究－

教 授 森 征 一

授業科目の内容：

古代ローマ法と近代ヨーロッパ法の橋渡しをし，普通法（*ius commune*）の時代を基礎づけた，中世ローマ法学の巨星バルトルスの法学理論を学ぶことが，本講義の目標です。

法制史特殊講義Ⅳ

教 授 霞 信 彦

授業科目の内容：

明治期における，わが国の刑事法に関する諸問題を取りあげ，これまでの先学の研究成果に立脚しつつ，史料や文献の輪読を通じて，理解を深めてみたいと考えている。

法制史特殊講義Ⅳ

日仏法文化交流史

教 授 岩 谷 十 郎

授業科目の内容：

本講義では，フランス外務省外交史料館に所蔵される，日本政府お雇い法律顧問ボアソナードによる在日フランス公使館一等書記官コラン・ド・プランシー宛書簡を読む。民法典論争によるフランス法派の敗北の危機が迫った明治中期の日本にあって，親仏派日本人

および在日フランス人は、フランス本国からの援助を背景に公使館の協力を得て、フランスの威信をかけた文化戦略を企てる。この授業で扱うボアソナードの書簡は、彼が離日に至るまでの日々、いかに日本におけるフランスの影響力を保持するか、との問題に腐心した彼の姿を物語っている。学界未見のこの史料について、授業では、担当者がタイプで起こした書簡の原稿を配付し、それに基づいて読解を進めてゆく。

法制史合同演習

法文化の翻訳と移入

教授 森 征 一
教授 笠 原 英 彦
教授 岩 谷 十 郎
教授 西 川 理 恵 子

授業科目の内容：

本演習は、日本の近代期に出された代表的な法律学文献を参加者一同による輪読を通して深く理解し、内外の関連文献を参照しつつ、今日の日本の法学的前提がどのように歴史的に形成されてきたのかを考えることを目的としている。

03年度までは、西周訳『権利闘争論』をとりあげ、イェーリングの原典とその各国語訳とを対照させ、日本における権利概念の定着を問題としてとりあげた。昨年度は、穂積陳重『法典論』をとりあげ、日本民法典を中心とした各国近代期における法典編纂の問題を様々に議論した。

今年度については、江木衷『法律解釈学』（明治18年）を素材として、近代日本における法解釈理論の出発点を見極め、その後の展開を各国の法解釈学的状況との比較から考えることを予定している。

法制史総合同演習

教授 霞 信 彦
文学部 教授 長谷山 彰

授業科目の内容：

履修者が興味をもつ、日本法制史に関する題材を選び、それについての研究発表をおこなうとともに、担当者が問題点の指摘や研究内容に対するコメントを加えることを通じて、法制史研究のための基礎的な知見を涵養していきたいと考えている。さらにそれが、各自の研究論文作成の土台となればよいと思う。

後期博士課程設置科目

民事法学専攻

英米法特殊研究

教授 西 川 理 恵 子

授業科目の内容：

履修者の研究テーマ。興味対象に沿った課題を各自研究、適宜、発表を行う。

外国法（EU）特殊研究

EU法における「多様性の中の結合」の理論的検討

法務研究科 教授 庄 司 克 宏

授業科目の内容：

EU法は様々な法領域に関連するが、中核となるのは（イ）EU法の基礎理論（EC法の直接効果、国内法に対する優越性など）および（ロ）域内市場法（物・人・サービス・資本の自由移動とその関連における競争法）である。本年度は、域内市場法を中心に理論的検討を行う。

履修者は、自分の専攻法領域との関連性を常に問題意識として持ちながら、EU法という超国家的な法体系の理解を目指して参加することが期待される。

民法特殊研究

教授 斎 藤 和 夫

授業科目の内容：

ドイツ民法学を中心としてドイツ私法学一般について、我が国におけるドイツ法研究（より広くは、比較法研究）（邦語文献）の基本文献を手がかりとして、研究を進めたい、と思います。「日本民法学に対して、ドイツ民法学はいかなる影響を与えるものであったのか」という視点から、その過去・現在・将来を展望したい、と考えています。重要と判断される邦語文献（論文や著作）をリストアップし、レポーター形式で検討を進めていきます。なお、履修希望者は、予め担当者に連絡の上、履修してください。内容・詳細については、履修者の事情等を考慮し、予め相談の上、決めたいと思います。

民法特殊研究**家族法研究**

教授 犬伏 由子

授業科目の内容：

受講者と相談の上決定するが、夫婦・親子に関する個々の論点については判例・学説を検討し、家族法の基礎理論についての議論も行いたいと考えている。なお、余裕があれば、比較法的検討も行いたい。

民法特殊研究

法務研究科 教授 北居 功

授業科目の内容：

19世紀のドイツ民法学とフランス民法学の影響関係について多面的に議論し、検討することを目指している。とりわけ本年は法典について多角的で多面的な検討を行いたい。さし当たっては、ドイツでの法典をめぐる20世紀後半の議論を起点とすることを予定している。

民法合同演習

教授 斎藤 和夫

教授 池田 真朗

教授 犬伏 由子

教授 西川 理恵子

教授 北澤 安紀

助教授 武川 幸嗣

法務研究科 教授 片山 直也

法務研究科 教授 六車 明

法務研究科 教授 北居 功

法務研究科 教授 金山 直樹

法務研究科 教授 平野 裕之

法務研究科 教授 鹿野 菜穂子

授業科目の内容：

最近の最高裁判決の検討。各自のレポートを中心に、全員の討議により研究する。学年初めに、判決を指示する。

商法（企業法）特殊研究

企業法分野における高度でかつ創造的学問展開

教授 加藤 修

授業科目の内容：

春学期は、企業法分野における重要問題を素材として法の解釈についての方法論の根本的検討を行い、創造的学問展開への糸口をつかむ。秋学期は、春学期で身につけた法解釈学方法論に基づき、生き活きとした

企業法実務が感知できる最新の下級審商事判例を批判的に検討し、判例研究を通じて自己の学問完成へ迫る。

商法（企業法）特殊研究

法務研究科 教授 山手 正史

授業科目の内容：

定例的には商法・国際取引法に関わる外国語文献を講読し、随時、受講生の研究報告を織りまぜる。

商法合同演習

商法における学問承継と創造的新展開のための集団指導演習

教授 加藤 修

教授 宮島 司

教授 山本 爲三郎

教授 鈴木 千佳子

教授 島原 宏明

法務研究科 教授 山手 正史

授業科目の内容：

商法に関する重要問題や基本問題について、参加者各自の問題意識に基づく研究報告を受け、参加者による検討と担当者による集団指導を行う。研究報告の水準は、学会における学術報告と同等あるいはそれ以上であることが期待される。

民事訴訟法特殊研究

ドイツ語文献の講読

教授 坂原 正夫

授業科目の内容：

ドイツ民事訴訟法の古典的な論文かあるいは最新の論文を講読し、日本民事訴訟法の理論的な背景と基礎を探求しようという授業です。ドイツ民訴法の基礎を理解することに役立つと思いますが、さらに博士論文を作成する際の論文の構造を考える参考になると思います。過去にこの授業で講読した著作の主なものを、公刊年順に挙げれば、次のとおりです。

Konard Hellwig, Klagrecht und Klagmöglichkeit, 1905 ; Hans-Joachim Musielak, Einige Gedanken zur materielle Rechtskraft, Festschrift für HIDEO NAKAMURA zum 70. Geburtstag am 2. März 1996; Thomas Vogeno, Die einseitige Erledigungserklärung im Zivilprozeß, 1996.

民事訴訟法特殊研究

教授 三木浩一

授業科目の内容：

民事訴訟法に関する外国文献の講読または国内判例の検討を行う。

民事訴訟法合同演習

最高裁判事例研究

教授 坂原正夫

教授 三木浩一

法務研究科 教授 春日偉知郎

法務研究科 教授 中島弘雅

法務研究科 教授 三上威彦

授業科目の内容：

民事手続法に関する判例を素材にして、民事訴訟法（関連法令を含む）の演習を行います。取り上げる判例は主に最高裁の最新の判例ですが、それ以外にも過去の最高裁の判例や最新の下級審の判例も取り上げます。なお民事事例研究だけでなく、修士論文提出予定者の中間発表会、学会発表を予定している研究者の事前の報告会、海外の有名教授のセミナー等が開催されることがあります。

知的財産権法特殊研究

知的財産権の基本的理解と履修者各自の専攻分野との関連の研究

講師 紋谷暢男

授業科目の内容：

特許法、実用新案法、意匠法、商標法、不正競争防止法等広義の工業所有権法、および著作権法、更には種苗法、半導体集積回路の回路配置に関する法律等、知的財産権法の全領域を、本質を中心に、交錯関係も含めて、特に現代的な問題点につき簡単に概説する。然る後、履修者の選択した任意なテーマにつき、各自の報告を中心として、演習方式で検討してゆく。

社会法特殊演習（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教授 田村次朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTO における小委員会、上級委員会報

告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法特殊研究（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教授 田村次朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTO における小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法合同演習（秋学期集中）

21世紀の社会法構築に向けて

教授 田村次朗

助教授 内藤 恵

授業科目の内容：

規制緩和・構造改革の潮流のなかで、競争政策は経済政策の一翼としてその重要性が認識されている。しかし、競争政策の内容は論者によって様々に解釈され、時として特定の政策目的のために、競争政策の語が歪曲されている場合も少なくない。そこで、本講座では、競争政策の原点である競争法の理念とその思考形式について、判例分析を通じて検討を進める。Oliver Wendell Holmes 判事の指摘のとおり「法は経験であり」(The life of the law has not been logic, but experience)、経験は判例を通じて熟成される。徹底した判例分析を中心として、競争法的発想方法論について理解を深めることが目的となる。

法制史特殊研究

教授 霞 信彦

授業科目の内容：

履修者各自の目的とする法制史分野の研究論文作成を目指し、そのための指導をおこなう。

法制史特殊研究

教授 岩谷十郎

授業科目の内容：

近代日本の法制史問題についての特殊研究を行う。

受講者の抱えている個々のテーマに即した個別的論点を掘り下げる形で少人数にて行いたい。

法制史合同演習

法文化の翻訳と移入

教授 森 征 一
教授 笠 原 英 彦
教授 岩 谷 十 郎
教授 西 川 理 恵 子

授業科目の内容：

本演習は、日本の近代期に出された代表的な法律学文献を参加者一同による輪読を通して深く理解し、内外の関連文献を参照しつつ、今日の日本の法学的前提がどのように歴史的に形成されてきたのかを考えることを目的としている。

03年度までは、西周訳『権利闘争論』をとりあげ、イェーリングの原典とその各国語訳とを対照させ、日本における権利概念の定着を問題としてとりあげた。昨年度は、穂積陳重『法典論』をとりあげ、日本民法典を中心とした各国近代期における法典編纂の問題を様々に議論した。

今年度については、江木衷『法律解釈学』（明治18年）を素材として、近代日本における法解釈理論の出発点を見極め、その後の展開を各国の法解釈学的状況との比較から考えることを予定している。

法制史総合合同演習

教授 霞 信 彦
文学部 教授 長谷山 彰

授業科目の内容：

履修者が興味をもつ、日本法制史に関する題材を選び、それについての研究発表をおこなうとともに、担当者が問題点の指摘や研究内容に対するコメントを加えることを通じて、法制史研究のための基礎的な知見を涵養していきたいと考えている。さらにそれが、各自の研究論文作成の土台となればよいと思う。

政府規制産業法特殊演習

電力・ガス・テレコム等の規制

教授 藤 原 淳 一 郎

授業科目の内容：

電気事業法、ガス事業法、電気通信事業法の3つの事業法の改正を受けた制度設計が始まり、かつ独禁法改正も予想される。これらのトピックスをはじめ、問題提起的な内外文献を講読する。

公法学専攻

プロジェクト科目・市民生活の安全と警察に関する比較法的研究

教授 大沢 秀介
教授 小山 剛
講師 太田 裕之

授業科目の内容：

本プロジェクト科目では、最近注目されている人間の安全保障という観点から、その中心的な役割を担う警察その他にかかわる法制度を比較法的な視点に立って検討を加える。

英米法特殊研究

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

履修者の研究テーマ。興味対象に沿った課題を各自研究、適宜、発表を行う。

外国法（EU）特殊研究

EU法における「多様性の中の結合」の理論的検討

法務研究科 教授 庄司 克宏

授業科目の内容：

EU法は様々な法領域に関連するが、中核となるのは（イ）EU法の基礎理論（EC法の直接効果、国内法に対する優越性など）および（ロ）域内市場法（物・人・サービス・資本の自由移動とその関連における競争法）である。本年度は、域内市場法を中心に理論的検討を行う。

履修者は、自分の専攻法領域との関連性を常に問題意識として持ちながら、EU法という超国家的な法体系の理解を目指して参加することが期待される。

憲法特殊演習

Legal Writing and Presentation

(共同担当) 教授 小林 節
(共同担当) 講師 西山 敏夫

授業科目の内容：

法律問題に関する報告書、論文の他、契約書や英米で法廷に提出する意見書について、実例を示し、担当者の実体験をふまえ、履修者もそのような文書を作ることができるように、訓練する。

憲法特殊研究

教授 小林 節

授業科目の内容：

履修者の博士論文のテーマについて研究会を重ねることになる。

憲法特殊研究

現代日本における憲政の課題

(共同担当) 教授 小林 節
(共同担当) 講師 平沢 勝栄

授業科目の内容：

憲政の最前線で活躍している政治家と憲法理論家が、学生とともに、今の日本で現実の問題になっている憲法上の課題を、タブーなく分析し、その成果を半年ごとに本にしている。

憲法特殊研究

アメリカ憲法研究

教授 大沢 秀介

授業科目の内容：

アメリカ憲法に関する文献を輪読する。なお、受講者にはアメリカ憲法についての知識が要求される。

憲法特殊研究

講師 向井 久了

授業科目の内容：

憲法上の主要問題のいくつかを取り上げて、履修者に対する個別指導を中心に行います。テキストは各履修者と相談のうえで決定します。

憲法合同演習

教授 小林 節
教授 大沢 秀介
教授 小山 剛
教授 駒村 圭吾

授業科目の内容：

今の予定としては、毎回1人のペースで履修者の研究中間報告が重要な最高裁憲法判例の研究報告をすることなどを考えているが、具体的には、年度始めに、履修者の希望も聴いて決めたい。

政府規制産業法特殊演習

電力・ガス・テレコム等の規制

教授 藤原 淳一郎

授業科目の内容：

電気事業法、ガス事業法、電気通信事業法の3つの事業法の改正を受けた制度設計が始まり、かつ独禁法改正も予想される。これらのトピックスをはじめ、問題提起的な内外文献を講読する。

行政法合同演習

教授 藤原 淳一郎
助教授 吉村 典久
専任講師 青木 淳一
講師 首藤 重幸

授業科目の内容：

- ① 改正行政事件訴訟法の研究
- ② 各自の研究テーマについての中間報告
- ③ 判例研究（内外）

国際法特殊研究

教授 大森 正仁

授業科目の内容：

国際法の現代的諸問題についての英文文献・資料を読み、発表・討論の形式で研究を行う。

国際法合同演習

教授 大森 正仁
講師 青木 隆

授業科目の内容：

国際法の基本的な英文文献を読み、そこに含まれる問題点について検討・討議を行ってゆく。対象とする文献および授業の進め方については最初の授業で説明する。

刑法特殊演習

教授 加藤 久雄

授業科目の内容：

刑法特殊講義と同じ Roxin/Schroth (Hrsg.), *Medizinstrafrecht*. 2. Aufl. 2001. と加藤久雄著「医事刑法入門」の中から、受講生が関心を持つテーマを選択し、それぞれのテーマにつき3-4回にわたり犯罪論の基礎理論の日独比較研究を行う。

刑事学特殊演習

刑事司法のパラダイム変換を学ぶ

講師 諸澤 英道

授業科目の内容：

この授業では、1980年代以降に始まる「刑事司法のパラダイム変換（the transformation of

Paradigms)」について学ぶ。刑事司法は、伝統的に国家刑罰権の問題であり、わが国でも検察が刑事訴追を独占している。しかし、刑事司法に被害者が参加する制度が一般的になり、また、司法への国民参加の思想が広まるにつれ、刑事裁判、犯罪防止、犯罪者の社会復帰といった問題に国民が関与するさまざまな制度ができてきた。

2004年12月に「犯罪被害者等基本法」が成立したことによって、わが国も、ようやく先進国の仲間入りできたと言われている。2000年に制定された、いわゆる「犯罪被害者保護関連二法」では、被害者は気の毒な存在として「配慮」の対象であった。しかし、基本法には「被害者の権利」が明記され、国、地方公共団体、そして国民の責務が謳われている。

春学期の授業では、1985年に採択された「国連被害者人権宣言」について学ぶと同時に、その趣旨が犯罪被害者等基本法にどのように反映しているかを検討する。また、秋学期には、今、20世紀末から世界的に起こっている刑事政策のパラダイム変換について理解を深める。

20世紀は、強大な国家権力から犯罪者（被疑者、被告人）をどう守るかが重要な課題であり、人権について語られるときに、決まったように「犯罪者の人権」が引き合いに出された。しかし、21世紀に入って国連や国際学会での議論は、「人間の尊厳」をいかに守るかが重要な課題となり、各国政府の最重要課題の1つに「社会の安全と人々の安心」が取り上げられるようになった。すなわち、犯罪者の人権を重視する刑事政策から被害者の人権と社会の安全を重視する刑事政策への変換である。

この授業では、このような考え方の変化の裏には何があるのか、そして、そのような新しいパラダイムの下では、犯罪者の人権についてどう考えるべきかを検討する。

刑事法総合同演習

教授 加藤 久雄
客員教授 倉田 靖司
客員教授 田中 利彦
講師 川端 博
講師 河村 博
講師 安部 哲夫
講師 守山 正
講師 瀬戸 毅
講師 中島 千鶴

授業科目の内容：

加藤久雄著「医事刑法入門」に引用されている医事刑法に関する判例を中心に判例研究の形で行う。その場合、講師の方から、参考となる英米の判例とドイツ判例を紹介し、併せて判例の比較法的研究を行う。

刑事訴訟法総合同演習

教授 安富 潔
教授 太田 達也
専任講師 フィリップ・オステン
法務研究科 教授 井田 良
法務研究科 教授 鈴木 左斗志
法務研究科 教授 松田 章

授業科目の内容：

刑事訴訟法を中心として、刑法、被害者学、国際刑事法などの分野について参加者の関心のある研究テーマの報告を求め、全員で討論して議論を深めたい。

民事訴訟法合同演習

最高裁判事事例研究

教授 坂原 正夫
教授 三木 浩一
法務研究科 教授 春日 偉知郎
法務研究科 教授 中島 弘雅
法務研究科 教授 三上 威彦

授業科目の内容：

民事手続法に関する判例を素材にして、民事訴訟法（関連法令を含む）の演習を行います。取り上げる判例は主に最高裁の最新の判例ですが、それ以外にも過去の最高裁の判例や最新の下級審の判例も取り上げます。なお民事事例研究だけでなく、修士論文提出予定者の中間発表会、学会発表を予定している研究者の事前の報告会、海外の有名教授のセミナー等が開催されることがあります。

社会法特殊演習（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教授 田村 次朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTOにおける小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法特殊研究（秋学期集中）

経済法・国際経済法に関する事例研究

教授 田村 次朗

授業科目の内容：

経済法、国際経済法に関する最新の重要な判例および事件を素材とした研究報告を行う。なお、経済法については、競争法および競争政策に関する日本、アメリカおよび欧州競争法の事例を取り扱い、国際経済法については、WTOにおける小委員会、上級委員会報告を取り上げる。授業は、報告者による判例・事例研究報告発表およびそれに引き続く質疑および討議によって構成される。

社会法合同演習（秋学期集中）

21世紀の社会法構築に向けて

教授 田村 次朗

助教授 内藤 恵

授業科目の内容：

規制緩和・構造改革の潮流のなかで、競争政策は経済政策の一翼としてその重要性が認識されている。しかし、競争政策の内容は論者によって様々に解釈され、時として特定の政策目的のために、競争政策の語が歪曲されている場合も少なくない。そこで、本講座では、競争政策の原点である競争法の理念とその思考形式について、判例分析を通じて検討を進める。Oliver Wendell Holmes 判事の指摘のとおり「法は経験であり」(The life of the law has not been logic, but experience), 経験は判例を通じて熟成される。徹底した判例分析を中心として、競争法的発想方法論について理解を深めることが目的となる。

法制史特殊研究

教授 霞 信彦

授業科目の内容：

履修者各自の目的とする法制史分野の研究論文作成を目指し、そのための指導をおこなう。

法制史特殊研究

教授 岩谷 十郎

授業科目の内容：

近代日本の法制史問題についての特殊研究を行う。
受講者の抱えている個々のテーマに即した個別的論点を掘り下げる形で少人数にて行いたい。

法制史合同演習

法文化の翻訳と移入

教授 森 征一

教授 笠原 英彦

教授 岩谷 十郎

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

本演習は、日本の近代期に出された代表的な法律学文献を参加者一同による輪読を通して深く理解し、内外の関連文献を参照しつつ、今日の日本の法学的前提がどのように歴史的に形成されてきたのかを考えることを目的としている。

03年度までは、西周訳『権利闘争論』をとりあげ、イェーリングの原典とその各国語訳とを対照させ、日本における権利概念の定着を問題としてとりあげた。昨年度は、穂積陳重『法典論』をとりあげ、日本民法典を中心とした各国近代期における法典編纂の問題を様々に議論した。

今年度については、江木衷『法律解釈学』（明治18年）を素材として、近代日本における法解釈理論の出発点を見極め、その後の展開を各国の法解釈学的状況との比較から考えることを予定している。

法制史総合同演習

教授 霞 信彦

文学部 教授 長谷山 彰

授業科目の内容：

履修者が興味をもつ、日本法制史に関する題材を選び、それについての研究発表をおこなうとともに、担当者が問題点の指摘や研究内容に対するコメントを加えることを通じて、法制史研究のための基礎的な知見を涵養していきたいと考えている。さらにそれが、各

自の研究論文作成の土台となればよいと思う。

政治学専攻

アカデミック・プレゼンテーション（初級）（政治思想
・政治社会・日本政治）（春学期）（秋学期）

教授 小林良彰

教授 有末賢

助教授 田上雅徳

授業科目の内容：

Academic Presentation Skills (Introductory and Lower-intermediate Levels)

Language of instruction: English

This course focuses on research design and presenting "American-style" papers.

We begin with a review of presentation skills in English. During this stage of the course, students will complete short presentations (four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to present on, and discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to present one full-length paper by the end of the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates (four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・プレゼンテーション（中上級）（政治思想
・政治社会・日本政治）（春学期）（秋学期）

教授 小林良彰

教授 有末賢

助教授 田上雅徳

授業科目の内容：

Academic Presentation Skills (Upper-intermediate and Advanced Levels)

Language of Instruction: English

Instructor: Gill Steel

This course focuses on research design and presenting "American-style" papers.

We begin with a review of presentation skills in English. During this stage of the course, students will complete short presentations (four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to present on, and discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to present one full-length paper by the end of the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates (four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・プレゼンテーション（地域研究・国際政治）（春学期）（秋学期）

英語を母語とする教師による、英語によるプレゼンテーションの仕方

教授 横手慎二

教授 山本信人

授業科目の内容：

Academic Presentation for Graduate Students in International Affairs

Friday 10.45 am

The purpose of this class is to help graduate students present their research in English at a professional level. The present plan assumes little previous experience on the part of the students; if students are experienced and find the class too easy, the class content can be adjusted accordingly. Students will be guided through all the basics of presentation: preparation of content, delivery skills including body language, visual aids and answering questions at the end. Preparation will be required weekly, and practice in front of the class also. Professional standards are expected in the final presentation!

- Class numbers limited to 15 students in each class.
- Assessment: by final presentation.
- If possible, midterm and final presentations will be videotaped.

• Recommended text: *Effective Presentations*, by
Jeremy Comfort, Oxford University Press. 2,700¥

アカデミック・ライティング（初級）（政治思想・政治
社会・日本政治）（春学期）（秋学期）

教授 小林良彰
教授 有末賢
助教授 田上雅徳

授業科目の内容：

Academic Writing and Research Design
(Introductory and Lower-intermediate Levels)
Language of Instruction: English
Instructor: Gill Steel

This course focuses on research design and writing "American-style" research papers.

We begin with a review of the fundamentals of academic writing style in English. During this stage of the course, students will complete short writing assignments(four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to produce one full-length research paper by the end of the course. This paper will be due in stages throughout the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates (four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・ライティング（中上級）（政治思想・政治
社会・日本政治）（春学期）（秋学期）

教授 小林良彰
教授 有末賢
助教授 田上雅徳

授業科目の内容：

Academic Writing and Research Design
(Upper-intermediate and Advanced Levels)
Language of Instruction: English
Instructor: Gill Steel

This course focuses on research design and writing "American-style" research papers. During the first stage of the course, students will complete short writing assignments (four weeks).

We then turn to problems of theory-building, research design, case selection, and measurement in the context of quantitative and qualitative political research. Students should read and come to class prepared to discuss articles from the syllabus (four weeks).

Students are expected to produce one full-length research paper by the end of the course. This paper will be due in stages throughout the course. Students will present their work in class (in stages) in a seminar setting, to get feedback from classmates(four weeks).

Grade: 50% paper and short assignments; 50% class participation (25% discussion and 25% presentation).

アカデミック・ライティング（地域研究・国際政治）
（春学期）（秋学期）

英語を母語とする教師による英語論文の書き方

教授 横手慎二
教授 山本信人

授業科目の内容：

Academic Writing for Graduate Students in
International Affairs

Friday 9.00 am

This course is for any graduate student of international affairs who would like to write well in English: high level journalism as well as academic writing. The course will cover organization of material, style, language structures and other aspects of preparing an article for publication, subject to time limitations. Since weaknesses and strong points in writing are very much an individual matter, the detailed content of each class will be decided after I have had an opportunity to analyze students' writing and therefore the schedule will be handed out to participating students at the beginning of the *second class* on April 15th.

• Students in this class must already be able to write some English, even if they cannot write

well; this is not a class for beginners.

- Numbers are restricted to fifteen.

In addition, all members of the class must:

- Submit a short piece (2-3 pages) of your own academic writing in English. This piece does not have to be new, but it is a requirement. It can be a part of a longer essay. Please bring it with you to the first class on April 8th., or, if you cannot come to that class, hand it in to the 学事センター 法学研究科係 by 1.00 pm on that day.
- Write regularly outside class time, including a daily journal.
- Read widely in well written English. The importance of reading cannot be overemphasized: those who do not read cannot write, and newspapers are not enough.

You will need access, throughout the course, to:

1. Good dictionaries, both English/English and Japanese (or other native language)/English
2. A thesaurus
3. The Chicago Manual of Style
4. Varied reading matter in English on your own research topics.

There may in addition be a recommended text book. This is undecided as yet, but if there is, it will be easy to obtain and inexpensive. Assessment will be continuous throughout the semester, and will include a final essay.

プロジェクト科目・市民生活の安全と警察に関する比較法的研究

教授 大 沢 秀 介
教授 小 山 剛
講師 太 田 裕 之

授業科目の内容：

本プロジェクト科目では、最近注目されている人間の安全保障という観点から、その中心的な役割を担う警察その他にかかわる法制度を比較法的な視点に立って検討を加える。

渋沢栄一記念財団寄附講座

シヴィル・ソサエティ論（春学期）

新公益論：日本の行政改革とシヴィル・ソサエティの役割分担の調整

教授 河 野 武 司

「新公益論」は、渋沢栄一を記念して 2004 年度より開設された科目です。

近代日本社会において、「公益」の決定者、管理者は基本的には国家官僚機構でありましたが、現在の社会においては、そのような「ガバナンス」（社会秩序の維持・運営のシステムを意味するものでありますが、旧来は、もはや適切でない“統治”という表現が使われてきました）の構造は明らかに崩れ始めており、「公益」を維持・増進するためには、政府と協力したり、対抗するような、自発的であり、自己の役割に目覚めた集団としての市民のつながりとしてのシヴィル・ソサエティが必要になってきています。このシヴィル・ソサエティの台頭は多様な形をとるものと考えられます。地方自治体が中央官僚の「公益」に対抗して地域の「公益」を住民投票で示して対抗したなどという事例は増えています。政治家が官僚の介入を排除して、市民の立場に立って法案を提出して、これを立法化するという「議員立法」は、まだ限られたものではありませんが、NPO 法案の成立などのケースも目立ち始めています。勿論、NGO、NPO が地球的課題をめぐる対外的な活動や、環境問題、移民などの国内的課題への取り組みについて、政府・官僚が十分対応できない分野での活動が近年一層注目を浴び始めています。

しかしながら、これまでの統治のシステムを、市民、シヴィル・ソサエティが公益の維持・促進に関与できるようなガバナンスのシステムに転換させていくことは容易でないことは言うまでもありません。そのことが如実に現れているのが、これまでの一連の行政改革、財政改革などの多様な改革の努力であり、これについて具体的に検証することにより、これまでの官僚主導のシステムから脱却する可能性、新しいガバナンスのシステムを構築するための政治家の役割、改革を可能ならしめるうえでの市民・シヴィル・ソサエティの役割、企業と自己責任による利益の拡大の努力の可能性、などを模索することが出来るものと考えます。

本科目は、大学院生を対象に、各テーマに 2 時限をあて、前半の 1 コマ目は学部学生、社会人等の聴講を含む講義、後半の 2 コマ目は大学院生による前半

の講義を受けてのゼミ形式の授業とし、6つのテーマを取りあげます。

政治思想論特殊演習（春学期）

教授 蔭山 宏

授業科目の内容：

大学院蔭山研究会の院生を対象とした研究指導をおこなう。

政治思想論特殊演習（秋学期）

教授 蔭山 宏

授業科目の内容：

大学院蔭山研究会の院生を対象とした研究指導をおこなう。

政治思想論特殊演習（春学期）

研究発表・中間報告（大学院ゼミ）

教授 萩原 能久

授業科目の内容：

主として大学院で私を指導教授とする学生を対象に、修士論文、博士論文の中間報告を行ってもらい、論文作成の際の、技法的レベルも含めた様々な問題点について参加者全員で討論を行う。

政治思想論特殊演習（秋学期）

教授 萩原 能久

授業科目の内容：

春学期に同じ。

政治思想論特殊演習（秋学期）

名誉教授 鷲見 誠一

授業科目の内容：

春学期の「政治思想論特殊研究」の内容を継続します。

政治思想論特殊研究（春学期）

ウェーバーとその後

教授 蔭山 宏

授業科目の内容：

20世紀ドイツの政治思想に関する原書を読む予定。

政治思想論特殊研究（春学期）

ドイツ語文献の講読

教授 萩原 能久

授業科目の内容：

この特殊研究では、院生、特に本年度末に修士論文を提出しようとしている修士課程2年の院生が自己の論文執筆に役立つよう、院生から提案されたドイツ語文献（履修者の希望が多ければ、たまには英語文献を取り上げることもある）をテキストとして用い、ドイツ語（外国語）の文献を自由に使いこなせる訓練を行うものである。

政治思想論特殊研究（秋学期）

教授 萩原 能久

授業科目の内容：

春学期の継続。秋学期のみの参加を希望する者は相談に乗る。

政治思想論特殊研究（春学期）

名誉教授 鷲見 誠一

授業科目の内容：

近代政治思想の大前提である「近代人」はどの様に成立してきたか。主体性と自律性の確立をヨーロッパ精神史の中でたどっていく。

政治・社会論特殊演習（春学期）

論文作成と研究発表セミナー

政策・メディア研究科 教授 曾根 泰教
授業科目の内容：

各自がおこなっている研究の発表と討論を中心に授業を進める。

どのように、テーマを選定するか、それをどのように具体的な研究の枠組みにのせるか、採用する手法、データ・資料などの使い方、結論をいかに位置づけるか、先行研究との関連など、を中心に議論を進展させる。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

論文作成と研究発表セミナー

政策・メディア研究科 教授 曾根 泰教
授業科目の内容：

各自がおこなっている研究の発表と討論を中心に授業を進める。

どのように、テーマを選定するか、それをどのように具体的な研究の枠組みにのせるか、採用する手法、データ・資料などの使い方、結論をいかに位置づけるか、先行研究との関連など、を中心に議論を進展させる。

政治・社会論特殊演習（春学期）

政治過程分析

教授 小林 良 彰

授業科目の内容：

政治現象の中から、各自の問題意識にしたがって研究を進め、研究成果を報告する。

政治・社会論特殊演習（春学期）

社会学理論研究

教授 霜 野 寿 亮

授業科目の内容：

理論社会学の基礎的文献に関する報告を求め、議論する。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

社会学理論研究

教授 霜 野 寿 亮

授業科目の内容：

理論社会学の基礎的文献に関する報告を求め、議論する。

政治・社会論特殊演習（春学期）

脱工業化・グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学

教授 関 根 政 美

授業科目の内容：

授業担当者の関根は、「脱工業化・グローバリゼーション交錯世界の人種・民族・エスニシティ・ナショナリズム・多文化主義の政治・社会学の理論的研究と、オーストラリアを事例とする研究を行っている。本授業は、原則として本授業担当者を指導教授とする大学院後期博士課程院生のための授業であり、演習授業を中心に実施する。

授業の形式は、各院生の研究報告をもとに質疑応答を行う演習授業とする。博士論文作成を中心とした授業となるので、①博士論文の内容に関連した先行研究としての研究書あるいは論文についての報告・質疑応答、博士論文関連の調査報告に基づく質疑応答を行う。②博士論文そのものに関する報告と質疑応答、また、③後期博士課程の院生は『法学・政治学論究』をはじめ、所属学会における学会・研究会報告、あるいは所属学会学『学会誌』への投稿を行わなければならない。学会報告や投稿の前に報告と質疑応答を行いつつ準備を進める。

なお、関根を指導教授としないものでも博士論文作

成に当たり、授業に参加したいという院生は相談すること。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学

教授 関 根 政 美

授業科目の内容：

授業担当者の関根は、「脱工業化・グローバリゼーション交錯世界の人種・民族・エスニシティ・ナショナリズム・多文化主義の政治・社会学の理論的研究と、オーストラリアを事例とする地域研究を行っている。本授業は、原則として本授業担当者を指導教授とする大学院後期博士課程院生のための授業であり、演習授業を中心に実施する。

授業の形式は、各院生の研究報告をもとに質疑応答を行う演習授業とする。博士論文作成を中心とした授業となるので、①博士論文の内容に関連した先行研究としての研究書あるいは論文についての報告・質疑応答、博士論文関連の調査報告に基づく質疑応答を行う。②博士論文そのものに関する報告と質疑応答、また、③後期博士課程の院生は『法学・政治学論究』をはじめ、所属学会における学会・研究会報告、あるいは所属学会学『学会誌』への投稿を行わなければならない。学会報告や投稿の前に報告と質疑応答を行いつつ準備を進める。

なお、関根を指導教授としないものでも博士論文作成に当たり、授業に参加したいという院生は相談すること。

政治・社会論特殊演習（春学期）

教授 有 末 賢

授業科目の内容：

基本的には受講生の研究テーマの報告を主として授業を進めていく予定である。人数にもよるが、修士論文、博士論文、学会報告、投稿論文などの中間報告として討論を進めていきたい。

場合によっては、文献の輪読、ゲスト・スピーカーの講演なども考えられる。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

教授 有 末 賢

授業科目の内容：

基本的には受講生の研究テーマの報告を主として授業を進めていく予定である。人数にもよるが、修士論

文、博士論文、学会報告、投稿論文などの中間報告として討論を進めていきたい。

場合によっては、文献の輪読、ゲスト・スピーカーの講演なども考えられる。

政治・社会論特殊演習（春学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

学会発表や論文作成に向けて、受講者各人が発表し、それに基づいて討議する。

政治・社会論特殊演習（秋学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

学会発表や論文作成に向けて、受講者各人が発表し、それに基づいて討議する。

政治・社会論特殊研究（春学期）

制度と政策の政治学

政策・メディア研究科 教授 曾根 泰 教

授業科目の内容：

従来から行ってきた制度論をさらに発展させ、政治学的手法を各自の研究に生かすために、参考になる最近の図書を選択して、輪読、発表を行う。テーマとしては、金融政策の政治的決定過程、「討論民主主義」の議論の背景、政治の基礎にある「信頼」などを扱う。

政治・社会論特殊研究（春学期）

社会学理論研究

教授 霜野 寿 亮

授業科目の内容：

本講義の狙いは理論社会学の視点を中心に議論することにある。論点を見いだすための文献候補として次の3点を挙げておくが、最終的には履修者の研究関心にあわせて決めることにしたい。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

社会学理論研究

教授 霜野 寿 亮

授業科目の内容：

本講義の狙いは理論社会学の視点を中心に議論することにある。論点を見いだすための文献候補として次の3点を挙げておくが、最終的には履修者の研究関心にあわせて決めることにしたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学

教授 関根 政 美

授業科目の内容：

本授業では、授業担当者の専門である「脱工業化・グローバリゼーションと多文化交錯世界の人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治社会学」に関連するテーマを適宜選択して行う。キーワードとしては他に、移民・難民・外国人労働者、先住民、市民権、アイデンティティ・ポリティクス、文化戦争、ポリティカル・コレクトネスなどがある。授業担当者は、以上のテーマを〈現代先進社会（日本含む）〉に共通する問題として、理論的な考察をする国際政治社会学者であるとともに、現代オーストラリアを題材に、上述のテーマを中心に考察する地域研究者でもある。本授業では、理論的考察を中心に実施する予定である。しかし、日本研究や第3世界研究を志す諸君にとっても民族・エスニック問題を考える上で役立つであろうし、他の参加者にとってもよい刺激となるだろう。授業は演習形式で行う。履修者諸君には、英文の最新の研究書や論文を読んでもらい、内容について報告とコメントをしてもらい、質疑応答をしながら授業を進めてゆく。履修者数にもよるが、報告は1回のセッションで複数の学生に競争的に行ってもらおう。それは、各自の独自の観点からのコメントを提出してもらい、授業での議論を盛り上げてもらいたいからである。

政治・社会論特殊研究（春学期）

社会調査論（質的研究）特殊研究

教授 有末 賢

授業科目の内容：

昨年度に引き続いて、質的調査研究論の中から、今年度はインタビュー論を取りあげてみたい。英文の文献を分担して輪読していく形式を考えている。文献については、確定ではないが、以下のものを考えている。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

社会調査論（質的研究）特殊研究

教授 有末 賢

授業科目の内容：

秋学期については、アイデンティティ論などについても取りあげてみたいと考えている。

政治・社会論特殊研究（春学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

マス・コミュニケーションに関する文献・論文を読み、それについて討議する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

教授 大石 裕

授業科目の内容：

マス・コミュニケーションに関する文献・論文を読み、それについて討議する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

現代行政学のフロンティア研究

教授 大山 耕輔

授業科目の内容：

現代行政学のフロンティアを研究する。グローバル化、IT化、地方分権化、民営化、ガバナンス化等の政府を取り巻く環境変化に現代行政学はどう対応しているのか。英文テキストを輪読して論点を提示してもらい、それらについて討論するスタイルで進めたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

メディア・コミュニケーション研究所 教授
菅谷 実

授業科目の内容：

履修者の博士研究論文研究テーマに関する理論的検討を中心とした研究指導をおこなう。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

メディア・コミュニケーション研究所 教授
菅谷 実

授業科目の内容：

履修者の博士研究論文研究テーマに関する理論的検討を中心とした研究指導をおこなう。

政治・社会論特殊研究（春学期）

政治的コミュニケーション論（Ⅰ）

講師 鶴木 真

授業科目の内容：

政治社会学の一領域としての、「政治的コミュニケーション」の視点から、現代の国際社会の情報化がもたらす「新しい生活危機」について、受講生と共に考察する。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

政治的コミュニケーション論（Ⅱ）

講師 鶴木 真

授業科目の内容：

政治社会学の一領域としての、「政治的コミュニケーション」の視点から、「国際コミュニケーション」について、受講生と共に考察する。

政治・社会論特殊研究（春学期）

ジャーナリズム、メディア研究

講師 大井 眞二

授業科目の内容：

M.ウェバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」になぞらえる訳ではないが、プロテスタンティズムの神学が近代ジャーナリズムの誕生に重要な関わりをもったことは、コミュニケーション研究者ならずとも、意外に見落とされてきた論点と言えるかもしれない。現代米国において、モラル・マジョリティやキリスト教右派の団体の活動が米国の政治を左右する重要なアクターであり、またメディアにも重大な影響を与えているように、アングロ・アメリカン・ジャーナリズムは起源から今日に至るまで、こうした宗教や宗教と密接な関係をもつ道徳との関わり合いを離れて存在し得なかった。

そこで、本講義では以下のテキストを参照しながら、メディアと宗教の問題を歴史的コンテクストにおいて考えてみたい。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

ジャーナリズム、メディア研究

講師 大井 眞二

授業科目の内容：

M. ウェバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」になぞらえる訳ではないが、プロテスタンティズムの神学が近代ジャーナリズムの誕生に重要な関わりをもったことは、コミュニケーション研究者ならずとも、意外に見落とされてきた論点と言えるかもしれない。現代米国において、モラル・マジョリティやキリスト教右派の団体の活動が米国の政治を左右する重要なアクターであり、またメディアにも重大な影響を与えているように、アングロ・アメリカン・ジャーナリズムは起源から今日に至るまで、こうした宗教や宗教と密接な関係をもつ道徳との関わり合いを離れて存在し得なかった。

そこで、本講義では以下のテキストを参照しながら

ら、メディアと宗教の問題を歴史的コンテキストにおいて考えてみたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

ナショナリズムとグローバル化の社会学

講師 吉野耕作

授業科目の内容：

人文社会科学の中でナショナリズムやグローバル化研究が本格化してかなりの時間が経過した。しかし、社会的には必ずしも満足いく展開がなされてきたとは言えない。グローバル化、ポストコロニアリズム、ナショナル・アイデンティティ、帝国主義、帝国、移住、グローバル資本主義などに関する最近の論文を読みながら、重要と思われるテーマを拾い、理論的に掘り下げたい。

政治・社会論特殊研究（春学期）

政治コミュニケーション研究

講師 谷藤悦史

授業科目の内容：

本政治・社会論特殊研究では、政治コミュニケーションに関わる分野について広く検討する。現代民主主義国家における政治情報・政治知識の特性、マス・メディアとジャーナリストの政治的役割、現代市民の政治理解、現代の公共空間、選挙過程と政治マーケティング・政治宣伝などの問題を広く検討する。本年は、マス・メディアと民主主義を中心的テーマとして行う。

政治・社会論特殊研究（秋学期）

世論研究

講師 谷藤悦史

授業科目の内容：

本政治・社会論特殊研究では、世論ならびに世論研究に焦点をあてて講義を進める。近代啓蒙期における世論観と近代民主主義における世論の位置を議論した後、世論研究の現代的視座、現代民主主義における世論の位置、現代における世論形成過程の特性、世論調査の発達と現状、現代の世論論争などの問題を広く検討する。

日本政治論特殊演習（秋学期）

現代日本政治分析

教授 小林良彰

授業科目の内容：

現代日本の政治過程の中から、各自の問題意識にしたがって研究を進め、研究成果を報告する。

日本政治論特殊演習（春学期）

日本政治史および日本行政史

教授 笠原英彦

授業科目の内容：

論文の作成を指導する。

日本政治論特殊演習（秋学期）

日本政治史および日本行政史

教授 笠原英彦

授業科目の内容：

論文の作成を指導する。

日本政治論特殊演習（春学期）

教授 寺崎修

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて、報告を求めながら論文作成上必要と思われる助言と指導を行う。

日本政治論特殊演習（秋学期）

教授 寺崎修

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて、報告を求めながら論文作成上必要と思われる助言と指導を行う。

日本政治論特殊演習（春学期）

近代日本政治史研究

教授 玉井清

授業科目の内容：

近代日本政治史に関する各自の研究発表を行い修士論文、博士論文執筆のための批判討論を行う。

日本政治論特殊演習（秋学期）

近代日本政治史研究

教授 玉井清

授業科目の内容：

近代日本政治史に関する各自の研究発表を行い修士論文、博士論文執筆のための批判討論を行う。

日本政治論特殊研究（春学期）

戦前昭和期の政治

教授 玉井清

授業科目の内容：

最後の元老で戦前昭和期、実質的なキャビネットメーカーと目された西園寺公望の秘書、原田熊雄が残した口述記録を輪読し、当該期の政治をめぐる種々の問題について議論を深めていきたい。

日本政治論特殊研究（秋学期）

戦前昭和期の政治

教授 玉井 清

授業科目の内容：

春学期に続き、最後の元老で戦前昭和期、実質的なキャビネットメーカーと目された西園寺公望の秘書、原田熊雄が残した口述記録を輪読し、当該期の政治をめぐる種々の問題について議論を深めていきたい。扱う巻数は春学期の進行状況により多少変更する可能性がある。

日本政治論合同演習（春学期）

日本政治史の研究

教授 笠原 英彦

教授 寺崎 修

教授 玉井 清

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて報告を行い、討論する。

日本政治論合同演習（秋学期）

日本政治史の研究

教授 笠原 英彦

教授 寺崎 修

教授 玉井 清

授業科目の内容：

各自の研究テーマについて報告を行い、討論する。

地域研究論特殊演習（春学期）

教授 小此木 政夫

授業科目の内容：

修士論文および博士論文の指導を中心にする。学生諸君の論文発表に関する討議および論評の形式で進める。

地域研究論特殊演習（秋学期）

教授 小此木 政夫

授業科目の内容：

修士論文および博士論文の指導を中心にする。学生諸君の論文発表に関する討議および論評の形式で進める。

地域研究論特殊演習（春学期）

中東地域研究の論文指導とセミナー

教授 富田 広士

授業科目の内容：

受講者の研究報告を中心に、演習を行う。また、それと並行して、英書の内容報告とディスカッションを行う。

地域研究論特殊演習（秋学期）

現代中国政治・外交研究

教授 国分 良成

授業科目の内容：

各自の研究論文の中間報告を中心にすすめる。

地域研究論特殊演習（春学期）

ロシア研究

教授 横手 慎二

授業科目の内容：

ロシアの政治と外交について、参加者の関心に合わせてゼミナール形式で行う。

地域研究論特殊演習（秋学期）

ロシア研究

教授 横手 慎二

授業科目の内容：

ロシアの政治と外交について、参加者の関心に合わせてゼミナール形式で行う。

地域研究論特殊演習（春学期）

教授 井上 一明

授業科目の内容：

修士論文に関する指導をおこなう。

地域研究論特殊演習（秋学期）

教授 井上 一明

授業科目の内容：

修士論文に関する指導をおこなう。

地域研究論特殊研究（春学期）

教授 小此木 政夫

授業科目の内容：

南北朝鮮の国内政治と対外関係に関するより深い理解を目的とする。文献講読、学生諸君の発表、ゲスト講義などを織り交ぜて、講義を進める。

地域研究論特殊研究（秋学期）

中東地域研究（国内政治）の文献講読とセミナー

教授 富田 広 士

授業科目の内容：

中東各国の国内政治に関する英語文献の内容報告を行い、それを手掛かりに、途上国地域の動態について比較分析を行う。

地域研究論特殊研究（秋学期）

多文化交錯社会オーストラリアの人種・民族・エスニック集団関係と多文化主義

教授 関 根 政 美

授業科目の内容：

本授業では、授業担当者の専門である「脱工業化・グローバリゼーションと多文化交錯世界の人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治社会学」に関連するテーマを中心に行う。授業担当者は、上述のテーマを〈現代先進社会（日本含む）〉に共通する問題として、理論的な考察をする国際政治・社会学者であるとともに、現代オーストラリアを題材に、上述のテーマに従った考察を行う地域研究者でもある。本授業では、地域研究として現代オーストラリアを題材として授業を行う。授業は演習形式を採用する。履修者諸君には、英文のオーストラリアに関する最新の研究書や論文を読んでもらい、内容について報告とコメントをしたうえで、質疑応答をしながら授業を進めてゆくつもりである。履修者の数にもよるが、報告は複数の学生に競争的に行ってもらおう。それは、各履修者独自の観点からコメントを提出してもらい、授業での議論を盛り上げてほしいからである。とくに本授業を履修するに当たり、オーストラリアについての詳しい知識は必要ないが、テーマとの関係から、春学期の政治・社会論特殊研究（春）「グローバリゼーションと人種・民族・エスニシティ・多文化主義の政治・社会学」を履修しておくことが望ましい。

地域研究論特殊研究（春学期）

日中関係史研究

教授 国 分 良 成

授業科目の内容：

1980年代の日中関係に関する研究を行う。今年度は特に1970年代末から1980年代前半を中心に扱う。

地域研究論特殊研究（秋学期）

アメリカ現代政治の考察

客員教授 久 保 文 明

授業科目の内容：

アメリカ政治（政治史、政治思想、外交、外交史を含む）を本格的に研究している大学院学生を対象に、各自の研究報告とアメリカ現代政治に関する代表的著作の講読・討論を行う。報告できる程度のアメリカ政治に関する研究の蓄積があり、またアメリカ政治の基本的文献の読了に意欲をもつことが参加の条件となる。

地域研究論合同演習（春学期）

第三世界における1980年代以後の民主化の再考

教授 井 上 一 明

助教授 出 岡 直 也

名誉教授 根 岸 毅

授業科目の内容：

「民主化」と「民主化の政治学」、そして「経済と政治（特に民主主義）の関係」についてラテンアメリカとアフリカのケースから再考する。

地域研究論合同演習（秋学期）

多文化世界における「市民社会」概念の形成

教授 富 田 広 士

教授 国 分 良 成

教授 横 手 慎 二

教授 井 上 一 明

教授 山 本 信 人

教授 高 橋 伸 夫

助教授 出 岡 直 也

専任講師（有期） 粕 谷 祐 子

授業科目の内容：

本塾大学21世紀COEプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成—多文化世界における市民意識の動態—」では、大学院教育、特に後期博士課程の研究教育の充実を重視している。その際、博士院生諸君には、従来の各人の研究とこのCOEプログラム研究の関係を強く意識しながら、研究を進めることが期待されている。その事業の一環として、本セミナーでは、「多文化世界における『市民社会』概念の形成」について、各地域研究の視点と枠組みから分析・ディスカッションを行う。中心テーマは、各地域・国家において「市民社会」概念が多文化・多民族的な社会状況の中でいかに形成され、理解・認識され

ているのか、という点に置かれ、この点をめぐり言説あるいは実態の分析を行う。

国際政治論特殊演習（春学期）

欧州統合

ジャン=モネ チェア 教授 田中俊郎

授業科目の内容：

ヨーロッパ連合（EU）に関して、学生諸君の報告を求め、報告を中心に討論したい。

国際政治論特殊演習（秋学期）

欧州統合

ジャン=モネ チェア 教授 田中俊郎

授業科目の内容：

ヨーロッパ連合（EU）に関して、学生諸君の報告を求め、報告を中心に討論したい。

国際政治論特殊演習（秋学期）

教授 添谷芳秀

授業科目の内容：

修士論文・博士論文の研究計画、途中成果、全体構想等を報告し、履修者全員で討論する。

国際政治論特殊演習（春学期）

修士論文・博士論文指導

教授 赤木完爾

授業科目の内容：

修士論文および博士論文の指導を中心に進める。あわせて現代国際政治・安全保障研究に関連する文献を講読する。また指定したテーマで報告を求めるともある。

国際政治論特殊演習（秋学期）

論文指導

教授 田所昌幸

授業科目の内容：

修士論文の指導を随時行う形で、授業を運営する。

国際政治論特殊演習（春学期）

教授 山本信人

授業科目の内容：

修士論文に関する報告と指導を中心に進める。

国際政治論特殊演習（秋学期）

教授 山本信人

授業科目の内容：

修士論文に関する報告と指導を中心に進める。

国際政治論特殊研究（春学期）

EU統合と加盟国

ジャン=モネ チェア 教授 田中俊郎

授業科目の内容：

EU 統合と加盟国をテーマに、具体的なケースとして EU 市民の欧州人としてのアイデンティティの問題をとりあげる予定。

国際政治論特殊研究（春学期）

教授 添谷芳秀

授業科目の内容：

拙著『日本のミドルパワー外交（仮題）』（5月7日出版予定）を材料に、さらに議論を深めたい。

国際政治論特殊研究（春学期）

安全保障研究

教授 赤木完爾

授業科目の内容：

安全保障研究に関連する諸論点を議論する。主題は理論と歴史にまたがる。理論に関しては攻撃-防御変数の問題を中心に扱う。歴史分析については、主として 20 世紀の戦争と平和、ならびに戦略を扱う。

国際政治論特殊研究（春学期）

冷戦後の国際秩序

教授 田所昌幸

授業科目の内容：

冷戦後の国際秩序について、以下のような文献を輪読する形でセミナーを運営したい。

国際政治論特殊研究（春学期）

東南アジア地域研究入門

教授 山本信人

授業科目の内容：

本セミナーでは、東南アジア地域研究に関する基本的文献を濫読する。少なくとも、「テキスト」欄に提示した二種類の基本書を読破する。カヴァーする範囲は原則として、東南アジア全域に関する 19 世紀以降の政治史である。

憲法特殊演習

Legal Writing and Presentation

(共同担当) 教授 小林 節
(共同担当) 講師 西山 敏夫

授業科目の内容：

法律問題に関する報告書，論文の他，契約書や英米で法廷に提出する意見書について，実例を示し，担当者の実体験をふまえ，履修者もそのような文書を作ることができるように，訓練する。

憲法特殊研究

教授 小林 節

授業科目の内容：

履修者の博士論文のテーマについて研究会を重ねることになる。

憲法特殊研究

現代日本における憲政の課題

(共同担当) 教授 小林 節
(共同担当) 講師 平沢 勝栄

授業科目の内容：

憲政の最前線で活躍している政治家と憲法理論家が，学生とともに，今の日本で現実になっている憲法上の課題を，タブーなく分析し，その成果を半年ごとに本にしている。

憲法特殊研究

アメリカ憲法研究

教授 大沢 秀介

授業科目の内容：

アメリカ憲法に関する文献を輪読する。なお，受講者にはアメリカ憲法についての知識が要求される。

憲法特殊研究

講師 向井 久了

授業科目の内容：

憲法上の主要問題のいくつかを取り上げて，履修者に対する個別指導を中心に行います。テキストは各履修者と相談のうえで決定します。

憲法合同演習

教授 小林 節
教授 大沢 秀介
教授 小山 剛
教授 駒村 圭吾

授業科目の内容：

今の予定としては，毎回 1 人のペースで履修者の研究中間報告か重要な最高裁憲法判例の研究報告をすることなどを考えているが，具体的には，年度始めに，履修者の希望も聴いて決めたい。

政府規制産業法特殊演習

電力・ガス・テレコム等の規制

教授 藤原 淳一郎

授業科目の内容：

電気事業法，ガス事業法，電気通信事業法の 3 つの事業法の改正を受けた制度設計が始まり，かつ独禁法改正も予想される。これらのトピックスをはじめ，問題提起的な内外文献を講読する。

行政法合同演習

教授 藤原 淳一郎
助教授 吉村 典久
専任講師 青木 淳一
講師 首藤 重幸

授業科目の内容：

- ① 改正行政事件訴訟法の研究
- ② 各自の研究テーマについての中間報告
- ③ 判例研究（内外）

国際法特殊研究

教授 大森 正仁

授業科目の内容：

国際法の現代的諸問題についての英文文献・資料を読み，発表・討論の形式で研究を行う。

国際法合同演習

教授 大森 正仁
講師 青木 隆

授業科目の内容：

国際法の基本的な英文文献を読み，そこに含まれる問題点について検討・討議を行ってゆく。対象とする文献および授業の進め方については最初の授業で説明する。

法制史特殊研究

教授 霞 信彦

授業科目の内容：

履修者各自の目的とする法制史分野の研究論文作成を目指し、そのための指導をおこなう。

法制史特殊研究

教授 岩谷 十郎

授業科目の内容：

近代日本の法制史問題についての特殊研究を行う。
受講者の抱えている個々のテーマに即した個別的論点を掘り下げる形で少人数にて行いたい。

法制史合同演習

法文化の翻訳と移入

教授 森 征一

教授 笠原 英彦

教授 岩谷 十郎

教授 西川 理恵子

授業科目の内容：

本演習は、日本の近代期に出された代表的な法律学文献を参加者一同による輪読を通して深く理解し、内外の関連文献を参照しつつ、今日の日本の法学的前提がどのように歴史的に形成されてきたのかを考えることを目的としている。

03年度までは、西周訳『権利闘争論』をとりあげ、イェーリングの原典とその各国語訳とを対照させ、日本における権利概念の定着を問題としてとりあげた。昨年度は、穂積陳重『法典論』をとりあげ、日本民法典を中心とした各国近代期における法典編纂の問題を様々に議論した。

今年度については、江木衷『法律解釈学』（明治18年）を素材として、近代日本における法解釈理論の出発点を見極め、その後の展開を各国の法解釈学的状況との比較から考えることを予定している。

法制史総合同演習

教授 霞 信彦

文学部 教授 長谷山 彰

授業科目の内容：

履修者が興味をもつ、日本法制史に関する題材を選び、それについての研究発表をおこなうとともに、担当者が問題点の指摘や研究内容に対するコメントを加えることを通じて、法制史研究のための基礎的な知見を涵養していきたいと考えている。さらにそれが、各

自の研究論文作成の土台となればよいと思う。

教 職 課 程

中学あるいは高校の教員免許状を取得しようとする場合、教職課程を履修することになりますが、学生諸君は教職課程センターにおいて、教職課程登録の手続きをしなければなりません。教員免許状取得を志す学生は、学事日程表「教職課程ガイダンス」に必ず出席してください。その際教職課程の履修案内等を配布します。

※ 学事日程表の「教職課程ガイダンス」および「教育実習事前指導」以外に、教員免許状を取得するためには諸ガイダンスや説明があり本人が必ず出席しなければなりません。「教職課程履修案内」には、日程その他について詳しく記載されていますから必ず読んでください。

また、ガイダンス日程・場所・時間・教職諸行事等については、西校舎中央入口右側手前の「教職課程掲示板」の掲示にも常時注意してください。

慶應義塾大学 在外研修プログラム

慶應義塾大学では、全学部および研究科に在籍している学生を対象に、夏季休業中に海外で在外研修プログラム「慶應義塾大学 ウィリアム・アンド・メアリー大学夏季講座」「慶應義塾大学 ケンブリッジ大学ダウニングコレッジ夏季講座」を開講します。

これは、外国語による講義およびディスカッションのほか、大学内の寮生活などを初めとする多彩な諸活動を通して、さまざまな異文化交流を体験することで、国際性豊かな学生を育成することを目的としています。

短期間に質の高い充実した内容が盛り込まれていますので、海外生活体験をしたい方、外国語によるコミュニケーション能力向上を期待する方、将来長期の留学を考えている方などにとって、ふさわしい講座といえるでしょう。

形態は原則として、往復とも大学手配の航空便による団体旅行形式で、現地研修には本学の教職員が同行します。

また、現地への出発前には事前研修を数回実施します。(事後研修を実施する場合もあります。)

なお、環境をめぐるテーマを扱い、講義やディスカッションだけでなく豊かな自然環境を活かした体験学習旅行を含むワシントン大学でのプログラムを今年度から開設します。

このほか、春季休業期間中には、パリ政治学院の講師陣による EU に関する講義のほか、フランス語会話のクラスや EU の諸機関の訪問も含む「パリ政治学院春季講座」についても引き続き実施することを計画しています。

これら 2 つのプログラムについては国際センターのホームページを参照してください。

なお、プログラムは、自然災害、戦争、航空機等交通機関にかかわる事故並びに前記以外の人為的、不慮不可抗力による事故などのために中止する可能性があることをあらかじめご了承ください。

問合せ先 三田国際センター

URL: <http://www.ic.keio.ac.jp/j-index.html> 詳細や変更は、随時ホームページ等で発表します。

ガイダンス 4月4日(月) 三田 528 教室 13:00~14:30
4月5日(火) 藤沢 12 教室 15:45~17:15
4月6日(水) 矢上 14-201 教室 13:00~14:30
4月6日(水) 日吉 J11 教室 17:00~18:30

慶應義塾大学 ウィリアム・アンド・メアリー大学夏季講座

The Keio University College of William & Mary Cross-Cultural Collaboration

原 田 隆 史 文学部助教授

柏 崎 千佳子 経済学部助教授

授業科目の内容:

ウィリアム・アンド・メアリー大学は、米国東海岸ヴァージニア州ウィリアムズバーグにあり、教育・研究で高い評価を得ている州立大学です。創立は 1693 年で、アメリカではハーバード大学について古い歴史を誇っています。

本講座は、毎年定められるテーマに沿った英語による講義、グループワーク、フィールドワーク、インタビュー、プレゼンテーション等で構成されています。また、大学内での寮生活や、ボランティアワーク、住民との交流、講演会、ワシントン DC 近郊の家庭でのホームステイ等を通じ、さまざまな異文化交流を体験することができます。

単位数:

4 単位

本講座の科目は、卒業に必要な単位として認められることがあります。その扱いは各学部・研究科によって異なりますので各自確認をしてください。

教科書:

特にありませんが、研修に参加するにあたり必要と思われる文献・資料は事前研修の際にお知らせします。

授業の計画:

現地研修期間: 2005 年 7 月 29 日(金)~8 月 16 日(火)(予定)

4 月下旬より事前研修(6 回程度)、また、帰国後には事後研修(2 回程度)を行います。

研修内容: ウィリアム・アンド・メアリー大学教員による講義および質疑応答、ダイアログクラス、ウィリアム・アンド・メアリー大生をまじえてのグループワーク、フィールドワーク、プレゼンテーション、ワシントン DC 近郊の家庭でのホームステイなど。

参加申し込みについて:

(1) 募集人数: 40 名(提出書類により選考を行います。)

(2) 募集対象: 全学部・研究科正規生(ただし通信教育部をのぞく)

(3) 提出書類: 参加申込書(所定用紙)、学習計画書(日本語及び英語。各 A4 一枚程度)、最新の学業成績表のコピー(3 月中旬に保証人宛に送付されるもの)、英語能力証明書のコピー(TOEFL、TOEIC、各種英語検定など)、RESEARCH PROPOSAL(所定用紙)書類選考後、グループ分けの時に利用します。

(4) 募集期間: 4 月 7 日(木)~4 月 14 日(木) 各地区国際センター(窓口時間終了後の提出は一切受け付けません。)

(5) 選考結果発表： 4月28日(木)13:00(予定)

成績評価方法：

事前・事後研修の出席，中間発表，現地研修期間中の活動，Final Presentation，日本帰国後の Final Report により採点します。

慶應義塾大学 ケンブリッジ大学ダウニングコレッジ夏季講座

中野 誠彦 理工学部助教授

スネル，ウィリアム 文学部助教授

授業科目の内容：

ケンブリッジ大学は、オックスフォード大学と並ぶ英国の名門校で、美しいキャンパスは勉学に最適な環境にあります。

授業は英語による講義，ケンブリッジ大学在籍生を交えてのディスカッション，エッセイの作成・提出を中心としており，ケンブリッジ大学の教員が指導に当たります。講座期間中は，専門分野の知識を深めるだけでなく，ダウニングコレッジ内での寮生活や，ケンブリッジ大生が企画する諸活動に積極的に参加することで，幅広い異文化交流を体験することができます。

単位数：

4単位

本講座の科目は，卒業に必要な単位として認められることがあります。その扱いは各学部・研究科によって異なりますので各自確認をしてください。

教科書：

現地での開講科目の参考文献を，国際センター作成の募集要項に記載しています。また，事前研修時にリストにして配布します。

授業の計画：

現地研修期間： 2005年8月8日(月)～9月7日(水)

5月～7月に三田キャンパスにて事前研修を3回程度行います。

講義日程：第1週：

Placement Interviews, English & writing preparation classes

第2週：

Ancient Greece and Western Civilization, Genethics: ethical issues arising from developments in genetics

第3週：

English Literature, The Science of Chaos

第4週：

Society and Politics in Contemporary Britain, Astronomy: Unveiling the Universe

9月6日(火) Closing ceremony

第2週から第4週までは，各週2科目ずつ用意された授業の内1科目を選択，合計3科目を選択履修。

各科目とも定員が30名のため，事前に参加者の希望をもとに履修調整を行います。

開講科目は事情により変更されることがあります。

研修内容：ケンブリッジ大学の教員による講義及び質疑応答(午前)

ケンブリッジ大生(TA: Teaching Assistant)を交えてのディスカッション(午後) エッセイ作成・提出。

参加申し込みについて：

(1) 募集人数：60名(提出書類により選考を行います。)

(2) 募集対象：全学部・研究科正規生(ただし通信教育部をのぞく)

(3) 提出書類：参加申込書(所定用紙)，学習計画書(日本語及び英語。各A4一枚程度)，最新の学業成績表のコピー(3月中旬に保証人宛に送付されるもの)，英語能力証明書のコピー(TOEFL, TOEIC, 各種英語検定など)，履修希望科目申告表(所定用紙)

(4) 募集期間：4月7日(木)～4月14日(木) 各地区国際センター(窓口時間終了後の提出は一切受け付けません。)

(5) 選考結果発表： 4月28日(木)13:00(予定)

成績評価方法：

現地でのエッセイの評価をもとに行います。

国際センター設置講座

国際研究講座ならびに日本研究講座受講希望者へ

国際センターでは、外国および日本の文化や社会、国際関係を理解するための英語による講座を開講しています。本年度国際研究講座で取り扱う国／地域は、米国、カナダ、オーストラリア、アジア、ラテンアメリカにおよび、EU関係の講座も開講します。一方日本研究講座では、政治、経済、産業、文学、芸術、思想など幅広い側面から日本を探求します。

海外からの外国人留学生と共に英語で学ぶ授業としてユニークなものであり、学問を通しての国際交流の場として日本人学生の積極的な参加を歓迎します。

なお、本講座の履修単位の取り扱いは各学部・研究科により異なりますので、所属する学部・研究科の履修案内に従ってください。

1. 対象 大学学部生，大学院生，ならびに別科生
2. 単位 各科目 2 単位
(なお，医学部・医学研究科および法務研究科ではすべての授業科目が履修の対象となりません)

3. 手続方法

学事センターで所定の履修申告をしてください。国際センターに出向く必要はありません。

学部・大学院が設置主体の科目については、学部・大学院の登録番号を使用して登録手続きをしてください。

所属する学部・研究科で履修対象とならない場合は、三田、日吉の国際センターで相談してください。

4. 受講料 無料
5. 掲示 休講などの連絡事項は、三田の国際センター掲示板に掲示されます。

国際研究講座 (INTERNATIONAL STUDIES)

オーストラリアのビジュアルアート

(春学期)(Spring)

AUSTRALIAN VISUAL ARTISTS: AN INTRODUCTORY COURSE

ニコルズ , クリステーン 国際センター講師 (東京大学客員教授)

Christine Nicholls

Lecturer, International Center (Visiting Professor, University of Tokyo)

Course Description:

In this topic Dr Nicholls will introduce students to a selection of (mainly) contemporary Australian visual artists, and their work. Approximately half of the artists whose work will be discussed in the course will be Aboriginal. This will necessitate an introduction to the religious basis and underlying philosophy of Indigenous artistic production. In addition to powerpoint presentations introducing the class to the work of individual artists, the class will view and then discuss a number of films showing the artists' approach to their work. The course will also introduce cultural theory required for understanding contemporary art: postmodernism; cultural hybridity; simulacra; theories of "the gaze"; "the spectacle" and Judith Butler's ideas about gender and performativity

Text Books:

Nicholls, Christine, 2003, Art, Land, Story, Working Title Press, Adelaide, Australia, ISBN 1 876288 41 8 , price \$13.00 Australian (about 1200 yen) and Nicholls, Christine, 2003, Art, History, Place, Working Title Press, Adelaide, ISBN 1876288434 Australian price \$13.00 Australian (about 1200 yen)

Note that I will also be using handouts, so that students can avoid buying more expensive books. Text materials can be downloaded from the following Website <http://seekbooks.com.au>

Reference Books:

Andrew Sayers, Publisher: Oxford University Press, ISBN: 0192842145

Format: Paperback AUD\$39.95

Grading Methods:

Reports, and some oral presentation in class. Attendance, Participasion will also be taken into consideration.

Questions, Requests:

The two text books can be purchased on <http://www.seekbnooks.com.au> at a very reasonable rate (less than \$12.00 Australian dollars)

異文化と自己理解

(春学期)(Spring)

CULTURE AND THE UNCONSCIOUS

シヨールズ , ジョセフ 国際センター講師 (立教大学助教授)

Joseph Shaules

Lecturer, International Center (Associate Professor, Rikkyo University)

Sub Title:

Looking for the hidden roots of cultural difference

Course Description:

Culture has two sides, a visible side — food, clothing, architecture — and a hidden side of unconscious beliefs, values and assumptions. In this course we will learn the story of the discovery of hidden culture. We will explore culture's unconscious influence over us, and see how hidden cultural difference creates conflict in relationships and communication. This will involve learning hidden patterns of cultural difference related to things like: time, personal space, cooperation, independence, fairness, equality, emotion. Students will discuss their intercultural experiences, share their opinions and give presentations. The ultimate goal of this course is a deeper self-understanding.

Text Books:

Handouts to be supplied by the teacher.

Reference Books:

- 1) Different Realities — Adventures in intercultural communication, by Shaules & Abe, published by Nan'un-do.
- 2) Riding the Waves of Culture, by Trompenaars and Hampden-Turner, published by McGraw Hill

Class Schedule per week:

1. Class introduction
2. The discovery of hidden culture — Mead, Sapir & Whorf, Hall
3. A model of hidden culture — The onion model.
4. Student presentations
5. Cultural in human relations — independence and cooperation
6. Culture, emotion and self-expression — How we show feelings
7. Culture and status — Who is important and why?
8. Student presentations
9. Culture and gender — Gender separate vs. gender similar
10. Different modes of time — polychronic and monochronic
11. Student presentations
12. Final class

Message to those taking this Course:

This course is designed for students who have an interest in understanding people. An important part of our identity and values comes from how we were raised — in particular, the hidden values and assumptions of our culture. To understand this hidden side of ourselves, we must examine not only cultural difference, but our own personality. There will be lectures, discussion, and students presentations.

Grading:

Grades will be based on attendance, in-class presentations and a short final exam.

東南アジア世界の諸相

(春学期 X Spring)

WORLD OF SOUTHEAST ASIA

野村 亨

総合政策学部教授

Toru Nomura

Professor, Faculty of Policy Management

Sub Title:

Understanding Contemporary & Historical Aspects

Course Description:

In this class, students are exposed to contemporary as well as historical aspect of Southeast Asia. The information acquired in this lecture will surely be quite useful for those who want to be engaged in business in this fast-developing region.

Text Books:

None. Handouts will be given from time to time.

Reference Books:

Several books will be suggested during the class.

Class Schedule per week:

1. Orientation
2. What is SEA ?
3. SEA & Japan
4. SEA & European Power
5. Nature and Climate of SEA
6. Languages of SEA
7. Music of SEA
8. Politics of SEA
9. Other aspects of SEA

Please note that above order may change with short notice. For further information, please ask the professor directly.

Message to those taking this Course:

Students are recommended to bring along a map of Asia and / or Southeast Asia in every session.

Classroom rules will be indicated at the first session.

Grading Methods:

In class Exams, Attendance, Participation

Questions, Requests:

Should be forwarded to : nomura@sfc.keio.ac.jp

No petition on scores will be acceptable.

現代中国の国家と社会

(春学期) (Spring)

STATE AND SOCIETY IN CONTEMPORARY CHINA

ワンク , デイビッド

国際センター講師 (上智大学教授)

David L. Wank

Lecturer, International Center (Professor, Sophia University)

Course Description:**Overview**

This course assumes no prior knowledge about contemporary China, or about communist social and political organization. It is designed to provide a historical and thematic overview of post-1949 authority relations and patterns of politics in China. The first half of the course looks at the distinguishing features of state and society, such as central economic planning and one-party rule, that took shape during the first decade of the People's Republic in the 1950s. The second half of the course looks at the ensuing patterns of politics and conflict and how they have evolved over time. The course readings include original documents, autobiographies, and writings by sociologists, as well as political scientists and anthropologists.

Organization

Each class meeting will consist of a lecture. The lectures are a historical narrative of economy, society, and politics from 1949 to present. They are coordinated with the readings, which illustrate specific themes mentioned in the lectures. In addition we will see one Chinese movie.

Text Books:**Readings**

All readings listed in the course outline are required of all students. All readings are available online except for the following three books which are available for purchase.

GAO Yuan. *Born Red: A Chronicle of the Cultural Revolution*. Stanford University Press, 1987.

Shu-min HUANG. *The Spiral Road: Change in a Chinese Village Through the Eyes of a Communist Party Leader*. Westview Press, 1998 (second edition),

Andrew G. WALDER. *Communist Neo-Traditionalism: Work and Authority in Chinese Industry*. University of California Press, 1986,

Class Schedule per week:**INTRODUCTION****Unit 1**

Lecture on the "state and society" concept in political sociology

Reading on models of state and society for China

Wank, "State and Society in American Studies of Contemporary China"

HISTORICAL BACKGROUND**Unit 2**

Lecture on historical background

Reading on the origins of the party-state

Mao, "The Role of the Chinese Communist Party in the National War"

Unit 3

Lecture on communism in China and the Chinese Communist Party, 1917-1949

Reading on defining features of the party-state

Huang, *The Spiral Road*, chps. 1-5

Movie: To Live (directed by Zhang Yimou)

THE NEW ORDER, 1949-1957

Unit 4:

Lecture on stabilization immediately after the revolution, 1949–1953,

Readings on the party as an organization and status group

Vogel. “From Revolutionary to Semi-bureaucrat”

P. Link (ed.). “What if I Really Where?”, “A Bundle of Letters”, and “The Tyrant Bids Farewell to His Mistress”

Liu, “People or Monsters”

Unit 5

Lecture on building a centrally planned economy

Readings on the “corporateness” of social institutions

Whyte and Parish. *Urban Life in Contemporary China*, chps. 2,4,8,9,12.

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, chps 1-3.

Unit 6

Lecture on the bureaucratic administration of state and society

Readings on social inequality

Whyte and Parish. *Urban Life in Contemporary China*, ch. 3

Unger. “The Class System in Rural China”

DEEPENING THE REVOLUTION, 1958–1976

Unit 7

Lecture on the Great Leap Forward, 1958–1960

Readings on careers and social mobility;

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, ch. 4

Shirk. *Competitive Comrades*, pp. 63-178.

Unit 8

Lecture on economic retrenchment and competition within the elite, 1961–1965

Readings on the personalization of authority

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, chps. 5, 8

Oi. “Comunism and Clientelism: Rural Politics in China”

Unit 9:

Lecture on the Cultural Revolution

Readings on the conflict and instability in the polity

Gao. *Born Red*, entire

CHINESE SOCIALIST MODERNIZATION, 1979–

Unit 10

Lecture on the interregnum and further elite conflict, 1974–1979

Readings on the commercialization of power

Huang. *The Spiral Road*, chps. 6-12

Oi. “Market Reform and Corruption in Rural China”

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, chps. 6-7

Shirk. “The Decline of Virtuocracy in China”

Unit 11

Lecture on marketization and new patterns of conflict, 1979–1989

Readings on the Democracy Movement

Han. *Cries for Democracy: Writings and Speeches from the 1989 Chinese Democracy Movement*. pp. 5-16, 28-33, 36-44, 50-57, 59-62, 72-81, 83-91, 97-111, 118-126, 134-187, 197-208, 217, 221, 231-241, 246-251, 255-280, 285-295, 299-318, 335-349, 355-367

Saich. *The Chinese People's Movement: Perspective on Spring*, 1989, pp. 25-49, 83-163.

Unit 12

Lecture on the deepening of marketization and new conflicts

Readings on new social movement
Mallee, "Migration, Hukou, and Resistance in Reform China"
Zweig. The Externalities of Development"

Grading Methods:

A. Short writing assignment (15 percent of final grade)

There will be a short writing assignment based on the movie. It will be graded Excellent, Satisfactory, Poor. If you miss the movie you will be asked to finish readings the Spiral Road and write a 1,000 word review of by the following class.

B. In-class exams (45 percent of final grade)

There will be two in-class exams of short identification and/or multiple choice answers based on the lectures. They will be graded on the regular A-F scale.

C. Final writing assignment (40 percent of final grade).

This will be graded on an A-F scale. As this assignment is considered a take-home final, failure to hand it results in an "F" grade for the entire course regardless of your grades on the other course assignments).

D. Attendance is expected of all students enrolled in course. Attendance will be taken.

グローバルヴィレッジ構築に向けて：日本とサブ サハラ アフリカ地域 (春学期 X Spring)
BUILDING THE GLOBAL VILLAGE

高橋良子	環境情報学部教授
Yoshiko Takahashi	Professor, Faculty of Environmental Information
フリードマン デビッド	環境情報学部教授
David Freedman	Professor, Faculty of Environmental Information

Sub Title:

Perspectives on Japanese Policy in Sub-Saharan Africa

Syllabus:

In an increasingly connected world, there are no specialty areas. Integration into a growing global economy encompasses both economic and trans-economic issues. At the Davos World Economic Forum 2001, the term "culturomics" was coined to define how various intellectual disciplines need to be combined in order to offer a fuller world view.

This course will focus on geo-political areas that stand outside the "global economy" (at this point) and issues that such areas face as they plan to integrate their economies and cultures into the "global village."

As the countries of Sub-Saharan Africa attempt to formulate policies in areas such as HIV care and education, sustainable development, conflict management and the growth of open societies, these policies connect with similar policies and issues around the world. Japan has made aid for African nations and support for the NEPAD (New Partnership for Africa's Development) a major part of its international policy. Last year, for example, at the third TICAD (Tokyo International Conference on African Development), Japanese Prime Minister Junichiro Koizumi pledged US\$1 billion for education and health care in Africa, which made Japan as one of the largest aid donors to Africa. Yet despite these official policies, Japanese trade with some Sub-Saharan countries has actually dropped, and the Japanese public remains distantly aware of Sub-Saharan Africa and the forces that have shaped its present situation and the role of the Japanese government in Sub-Saharan countries.

This course will help deepen students' understanding of the contemporary Sub-Saharan African nations and their socio-political and cultural issues which affect global governance and Africa. Through a series of lectures offered by ambassadors and embassy officials from the African Union (<http://www.mbandi.co.za/orsadc.htm>) students will explore the variety of links diplomatic, educational, economic and cultural that tie Japan to contemporary Africa.

Texts (tentative recommendations):

- 1) <http://web.africa.ufl.edu/asq/v5/v5i2a4.htm> (African Studies Quarterly Japan-Emerging Trends in Japan-Africa Relations: An African Perspective)
- 2) Dynamics of Japan's Relations with Africa: South Africa, Tanzania and Nigeria By: Ampiah, Kweku Published By: Routledge

Tentative Course Schedule (this schedule is subject to change due to the availability of various Ambassadors and embassy officials.):

Class 1 Introduction and Organization: A short discussion of Japan's involvement in Sub-Saharan Africa and the organization of student research group based on country.

- Class 2 A Short History of Africa: Overview lecture on African histories
- Class 3 Sub-Saharan Africa and Japan: Overview lecture by an official of the Ministry of Foreign Affairs of Japan
- Class 4 Sub-Saharan African Aid and the Bretton Woods System: An examination of early aid projects to the newly independent African states and constraints by the prevailing economic theories of the Bretton Woods system; NEPAD's responses to some of the issues arisen from this system
- Class 5 "Mediated" Africa: The effect of the "classic" media images of African societies on policy, perceptions and tourism
*Ambassador of Kenya
*Ambassador of Tanzania
- Class 6 The African Response to AIDS: An examination of policies adopted to address the social and economic issues of AIDS pandemic.
*Ambassador of Uganda
*Ambassador of Zambia
- Class 7 Mid-term Review: Discussion of the students' ideas for their individual final papers, and work with their research group on their presentation.
- Class 8 African Issues and Solutions: An examination of the some of the issues of the post-colonial legacy
*H.E. Dr. B. Nugbane, Ambassador of the Republic of South Africa
*Ambassador of the Republic of Zimbabwe
- Class 9 Models of Development for Micro-Economies: Policy options pursued by smaller African nations with non-integrated economies
*Ambassador of Botsawana
*Ambassador of Malawi
- Class 10 African Policy and Japanese Scholarship : An intermediary role played by academic research and exchange between policy development and application.
*Ambassador of Angola
- Class 11 Symposium (tentative) In case of scheduling problems with the symposium this class will be a concluding lecture covering such topics as African Resources: Eco-tourism. spiritualities and communitas-the possibilities of non-material resources in development.
- Classes 12 & 13 Final group project presentations and class summary

Evaluation:

As this class is based on the talks given by the guest speakers and the students response attendance is of the UTMOST importance. Daily participation will account for 45% of the final grade. Group work both in hosting the guest speaker from the group's chosen country and the final oral group presentation will account for a further 20% of the evaluation. A final individual research paper of 5 page minimum (single space, 12 pt font) with a separate bibliography will account for the final 35% of the grade.

Note to Interested Students:

1. Students interested in this course, please be present at the first meeting and have researched the following sites:
<http://www.mofa.go.jp/region/Africa/> 2) and <http://www.jica.go.jp/English/activities/regions/09afr.html>
2. Although the class will take place in 4th period, there will sometimes be an opportunity for interested students to spend sometime after the class period with the visiting Ambassadors of that day. Please consider this when planning your schedule

国際人権法

(春学期) (Spring)

INTERNATIONAL HUMAN RIGHTS LAW

細谷明子

国際センター講師

Akiko Hosotani

Lecturer, International Center

Sub Title:

Issues, procedures, and advocacy strategies regarding the promotion and protection of human rights worldwide

Subject of the class:

Students will study five different aspects of international human rights including:

- (1) Procedures for implementing international human rights involving state reporting to treaty bodies; individual complaints; thematic, country rapporteurs, and other U.N. emergency procedures for dealing with gross violations; humanitarian intervention; criminal prosecution and procedures for compensating victims; diplomatic intervention; state v. state complaints; litigation in domestic courts; the work of nongovernmental organizations; etc.

- (2) Major international institutions including the human rights treaty bodies; the U.N. Commission on Human Rights and its Sub-Commission on the Promotion and Protection of Human Rights; the U.N. Security Council; international criminal tribunals; the International Criminal Court; U.N. field operations authorized by the U.N. Security Council or under the authority of the U.N. High Commissioner for Human Rights; the Inter-American Commission on and Court of Human Rights; the European Court of Human Rights and other parts of the European human rights system; the U.N. High Commissioner for Refugees; and the International Labor Organization
- (3) Human rights situations in various countries such as South Africa, Iran, Myanmar, East Timor, Kosovo, Cambodia, former Yugoslavia, the Democratic Republic of Congo, Japan, the United States, Europe, Sudan, Ghana, and India
- (4) Substantive human rights problems related to the rights of the child, economic rights, the right to development, torture and other ill-treatment, minority rights, the right to a free and fair election, human rights in armed conflict, crimes against humanity, arbitrary killing, indigenous rights, self-determination, discrimination against women, the rights of refugees, etc.
- (5) Learning methods such as advising a client, role-playing, the dialogue methods, drafting, and advocacy in litigation

The principal book:

David Weissbrodt, Joan Fitzpatrick, and Frank Newman, International Human Rights: Law, Policy and Process (3rd ed. 2001) and supplement Selected International Human Rights Instruments and Bibliography for Research on International Human Rights Law

Assignments:

Assignments are listed below as to each class session:

- Apr. 12: Preface and Chapter 1: Introduction to International Human Rights Law and Drafting Human Rights Treaties
- Apr. 19: Chapter 4: Ratification and Implementation of Treaties; the Covenant on Economic, Social, and Cultural Rights
- Apr. 26: Chapter 5: State Reporting under International Human Rights Treaties; Cultural Relativism
- May 10: Chapter 6: What U.N. Charter-Based Procedures are Available for Violation of Human Rights?
- May 17: Chapter 7: Humanitarian Intervention
- May 24: Chapter 8: Can Human Rights Violation Be Held Accountable?; ad hoc Tribunal for the former Yugoslavia, or; Documentary, Long Night's Journey into Day (South African Truth Commission)
- May 31: Chapter 9: International Human Rights Fact-Finding
Lecture: Professor David Weissbrodt, the Rights of Non-Citizens (tentative)
- Jun. 7: Chapter 10: How Can the Government Influence Respect for Human Rights in Other Countries?
- Jun. 14: Chapter 11: Inter-American Human Rights System; the Organization of African Unity
- Jun. 21: Chapter 12: European Human Rights System
- Jun. 28: Chapter 13: Domestic Remedies for Human Rights Violations; Enforcing International Human Rights in Japan's Courts, Legislature and Administration
- Jul. 5: Chapter 15: Refugee and Asylum Law; Jurisprudence of Human Rights; Cultural Relativism
- Jul.12: Questions & Answers for reviewing the exam

Comment on the Class:

The class encourages students to analyze case situation and to evaluate the most effective methods to prevent human rights violations. Because of the evolving nature of the laws and issues in this field, students can participate as strategists and investigators.

Grading Policy:

Students will receive their grade for the course based on (1) class attendance (10%), (2) significant contribution to class discussion (10%), (3) an essay (30%), and (4) a final Exam (50%).

Office Hours:

Wednesday, 1-3 p.m. or by appointment

世界政治におけるラテンアメリカ

(春学期) Spring)

LATIN AMERICA IN WORLD POLITICS

アントリネス, マリオ

国際センター講師

Mario Antolinez

Lecturer, International Center

Course Description:

The countries of Latin America and the Caribbean form a vast and complex part of the Western Hemisphere. Although the strategic geopolitical relevance of the region has been recognized, Latin American values and attitudes regarding politics, business and life in general

remain profoundly misunderstood, if not totally unknown by many. Not surprisingly, what people think they know about the region is based on unfair stereotypes and generalizations generated by some dramatic event covered by the world media.

Thus, the main objective of this course is to foster a greater understanding of the region's realities. The course is designed as a multidisciplinary study focusing on Latin American politics, economics and foreign policy, and it is divided in two parts. Part I deals with the main features of Latin America as a region, while Part II consists mainly of a country-by-country approach.

Text Books:

Hillman Richard, "Understanding Contemporary Latin America". Lynne Rienner Publishers, 2001.

Reference Books:

- Atkins Pope, "Latin America in the International Political System". Westview Press, 1995.
- Black Knippers Jan, "Latin America: Its Problems and Its Promise". Westview Press, 1998.
- Calvert Peter, "The International Politics of Latin America". Manchester University Press, 1994.
- Cortes Roberto, "The Latin American Economies". Holmes & Meir, 1985.
- Child Jack, "Geopolitics and Conflict in South America". Praeger, 1985.
- Lael Richard, "Arrogant Diplomacy". Scholarly Resources, 1987.
- Levine Donrel, "Religion and Politics in Latin America". Princeton University Press, 1981.
- Lowenthal Abraham, "Partners in Conflict: The United States and Latin America". Johns Hopkins University Press, 1990.
- Molineu Harold, "U.S Policy toward Latin America: From Regionalism to Globalism", Westview Press, 1990.
- Peeler John, "Latin American Democracies". University of North Carolina Press, 1983.
- Rosenberg Mark, "Americas: An Anthology". Oxford University Press, 1992.
- Smith Peter, "Modern Latin America". Oxford University Press, 1997.
- Tokatlian Juan, "Teoria y Practica de la Política Exterior Latinoamericana", 1983.
- Wesson Robert, "U.S. Influence in Latin American in the 1980's. Praeger.

Class Schedule per week:

PART I

- Session 1: Introduction
- Session 2: The Actors
- Session 3: The Inter-American System
- Session 4: Latin American Integration and Association
- Session 5: Economic Outlook
- Session 6: International Relations
- Session 7: Latin America and the United States

PART II

- Session 8: Mexico and Brazil: The Regional Giants
- Session 9: Cuba: The Socialist Way
- Session 10: The Andean Region: Breakdown and Recovery
- Session 11: The Southern Cone: Authoritarianism and Democracy
- Session 12: Central America: Dictatorship and Revolution
- The Caribbean: Colonies and Micro-states
- Session 13: Final Exam

Grading:

The course is organized as a combination of lecture and seminar, and will be conducted in English. Performance will be evaluated on the basis of attendance (30%), class participation (20%), oral presentation (20%) and a final exam (30%).

グローバルビジネスにおける革新と戦略

(春学期) Spring)

INNOVATION AND STRATEGY IN GLOBAL BUSINESS

トビン , ロバート I. 商学部教授

Robert I. Tobin

Professor, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

This course examines successful innovations in global organizations-including market-changing products, inventive approaches to leadership and work, synergy between technology and product development, and the crafting, implementing and executing of business

strategy. Ideas, customers, leadership, technology, markets, and talent are all part of the mix when companies innovate and craft business strategy—and will be examined in this course.

Students will develop the skills and tools that are critical for inventing and utilizing new business concepts, re-inventing old ones, and making innovation part of their lives.

The course will be conducted seminar -style with lecture-discussions, student group presentations, case studies, video segments, experiential class activities, and research assignments.

Text Books:

Leading the Revolution by Gary Hamel
Supplementary Reading Materials and Case Studies
Additional Book To Be Assigned

Reference Books:

Students are encouraged to read related materials in The Asian Wall Street Journal, Business Week, and Fast Company and to watch related business television broadcasts.

Class Schedule per week:

List of Topics:

- Introduction: Time of Change & Innovation
- Trends In International Business Leadership /and Strategy
- Encouraging Ideas / Innovation
- What to Do About Decaying Strategy
- How to Become A Global Innovator
- New Market Expansion and Entry
- U.S. ,China, Thailand, Japan
- Global Leaders/Global Partnerships
- A look at Global Leaders
- Global Companies/Working Overseas
- Impact and Meaning of Anti-Globalization Forces
- Creativity in Leadership
- Future of International Business

Additional information about this course available at www.tobinkeio.com

Message to those taking this Course:

A challenging, innovative course designed to encourage you to think in new, innovative ways. Be prepared for a challenging, rigorous course. This course attracts a large number of Keio's top students from every faculty and exchange students from around the world. No business background is necessary. There is substantial opportunity for student interaction and collaboration.

When students have questions, they can contact the instructor before or after class.

Grading:

Evaluation based on successful completion of assignments and projects, participation and on-time attendance, and an examination. In the event of unavoidable absence, please contact another student for assignments and be prepared for the next class. All assignments must be typed and no late papers are accepted.

Questions, Requests:

When students have questions, they can contact the instructor before or after class.

現代ロシア研究

(春学期)(Spring)

UNDERSTANDING RUSSIA

ナコルチェフスキー ,アンドリィ

文学部助教授

Andrei Nakortchevski

Associate Professor, Faculty of Letters

The main purpose of this course is an attempt to understand contemporary Russia, to understand people who live in this still somewhat enigmatic land in the context of its own history of contacts with other nations. This course will not be a standard course in history and culture. We will talk more about things which usually remain unsaid in academic papers — about how average Russians live, what they like and dislike,

what they value and what they hate. We will try to comprehend a legendary “enigmatic soul” of Russians, to enter their inner world and look at it from within. We will also discuss general features of unique Russian civilization developed geographically and culturally between East and West. We will try to understand Russia escaping any distortions as best we can, using a lot of video materials as illustrations and sometimes as a base for discussion.

What does it mean to be a Russian? This will be the main question to which we will try to find an answer during these classes.

アメリカ研究：アメリカの歴史・文化と外交政策

(春学期) (Spring)

AMERICAN STUDIES

ウィリアムス , ムケシュ 国際センター講師

Mukesh K. Williams Lecturer, International Center

Sub Title:

American History, Culture and Foreign Policy

Rationale:

After the collapse of the Soviet Union in 1991 the United States emerged as the most important nation in the world. Every nation has some kind of relationship with the United States, which is either profitable or unprofitable. No nation can ignore the United States or fail to understand American history, culture and foreign policy. Most nations therefore include American Studies within their academic, bureaucratic and administrative orientation. Since the nineteenth century nation states especially America have tried to define key words and ideas relating to freedom, welfare, civil rights, sovereignty, representation and democracy to create a composite intellectual and political culture. The American Studies Program will introduce students to the inter-disciplinary study of American history, culture and foreign policy and help them to understand how Americans and non-Americans think about America.

Course Outline:

The course will introduce 4 modules, each module containing a big idea namely:

1. Nation and Narration: constructs the Pocahontas story/myth; human arrival in North America; Native American life; the Americas, West Africa and Europe on the eve of contact; American industrial heritage; the work of Samuel Slater in the late eighteenth and early nineteenth centuries in Pawtucket in constructing industrial America.
2. Immigration and Cultural Change: ‘Old’ and ‘New’ immigration; the world of the immigrants; a new working class; the limits of mobility and ethnic diversity; the Chinese Exclusion Act; new forms of leisure and mass entertainment; the American Dream; 1965 Immigration Policy; multiculturalism and identity politics.
3. National and International Identities: Reconstructing World War II, American neutrality and the road to war; post-war economic boom, the rise of consumer society; the crabgrass frontier; the Baby Boom; the birth of television and the influence of advertising; roles of women and *The Feminine Mystique*; the Korean War; the arms race; the Red Scare and McCarthyism; the early civil rights movement; teen rebellion and rock’ n roll; the media and Vietnam War; rise of CNN.
4. American Foreign Policy—Neutrality to Involvement (1865–1917): Early American isolationism, moral foreign policy; postwar naval/air supremacy (1920–2004), manifest destiny, American unilateralism, America as the policeman of the world, clash of civilization and war against terror.

The course will help students to confront the contradictions and inherent tensions in the American narrative without the false hope of an easy solution. We will not fail to discuss democratic aspirations, concepts of justice, American solidarity/Christian and Islamic divide and national identity. Along the way we would also question the methods and perspectives by which we study our subject by asking some of the following questions:

- a) How do Americans think of themselves as a nation and the rest of the world? And how do people from other nations think about America? (Samuel Huntington, *The Clash of Civilization*; radical evil/Christian good; liberal/democratic frameworks—Richard Bernstein, *Radical Evil*)
- b) How is space constructed in the lives of individuals in America? How changes brought in by pre-industrial, industrial and post-industrial societies reconstituted the lives of people in the U.S.? (Vertical/horizontal expansion; notions of bigness/assertion; David Reisman, *The Lonely Crowd*; national parks—European signatures/Native American erasures—Yosemite and Yellowstone National Park)
- c) What are the popular methods of understanding the culture and society of America? (Clifford Geertz and others)
- d) How do we imagine the past and its effects on social and cultural representation? (Hayden White, Stuart Hall and David Hollinger)
- e) How do the concepts of American unilateralism and manifest destiny define American foreign policy?

Aims:

The students will get an opportunity to:

1. acquire presentation and negotiation skills
2. learn new concepts, methods and vocabulary
3. understand stereotypes of knowledge, reason/critical thinking, culture, gender and politics (bias, manipulation, prejudice, discrimination and hegemony)
4. synthesize diverse opinions and perspectives from within and outside America
5. develop skills to write/think purposefully and strategically
6. acquire the habit to pursue independent thinking

Reference Books:

Short selections from the following books and essays:

Richard J. Bernstein, *Radical Evil: A Philosophical Interrogation*, (Cambridge: Polity Press, 2002)

———, *The New Constellation: Ethical-Political Horizons of Modernity/Postmodernity*, rpt.,1998; (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1992).

Julia Kristeva, *Nations Without Nationalism*, (New York: Columbia University Press, 1993)

Samuel Huntington, *The Clash of Civilization and the Remaking of World Order*, (New York: Touchstone, 1997).

Clifford Geertz, *The Interpretation of Culture*, (New York: Basic Books: 1973).

———, *Available Light: Anthropological Reflections on Philosophical Topics*, (Princeton: Princeton University Press, 2000).

Todd Gitlin, *The Twilight of Common Dreams: Why America is Wracked By Culture Wars*, New York: Henry Holt & Company, 1995).

David A. Hollinger, *Postethnic America*, (New York: Basic Books, 1995).

Giles Gunn, "Introduction: Globalizing Literary Studies," *The Modern Language Association of America*, 2001, pp. 16-31.

Rober Young, *White Mythologies: Writing History and the West*, rpt 2003; (London: Routledge, 1990).

Tzvestan Todorov, *The Conquest of America: The Question of the Other*, (Norman: The University of Oklahoma Press, 1999).

Stuart Hall, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, (London: Sage, 1997).

David Reisman, *The Lonely Crowd*, (New Haven: Yale University Press, 2001).

Werner Sollors ed., *Theories of Ethnicity: A Classical Reader*, (London: Macmillan Press, Ltd., 1996).

Charles Taylor, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, (Princeton: Princeton University Press, 1994).

Class Schedule per week:

- | | |
|------------------------|--|
| 1 st Week: | Shopping |
| 2 nd Week: | Introduction to the course, handouts, a short reading list; Imagining the nation—European and Native American ideas. Extract from Todorov's <i>The Conquest of America</i> ; Sollors, <i>Theories of Ethnicity</i> ; de Tocqueville, <i>Democracy in America</i> , |
| 3 rd Week: | 3 Worlds Meet—Europe, West Africa and Native Indian-Video Script. Disney imagining Pocahontas—multicultural, racial (anti-British and anti-Indian) and feminist issues |
| 4 th Week: | Immigration and Cultural Change, video; OMD Directive 15. Immigrant writers such as Saul Bellow/Malamud Isaac Singer/Anzia Yezeriska, Toshio Mori, Hisaye Yamamoto, John Okada, Jhumpa Lahiri, Amy Tan et. al. Handout: Giles Gunn, "Globalizing Literary Studies." |
| 5 th Week: | A brief discussion of topics of presentation such as European pioneers, Native American concept of land/music/family life/politics, immigrants/ multiculturalism/working class life in big cities (Reisman, <i>The Lonely Crowd</i>); personal is political, civil rights movement—Malcolm X/Martin Luther King/FBI; Japanese Americans/Internment camps/loyalties etc. Choose topics for presentation. |
| 6 th Week: | Make small groups (about 2/3 students) to discuss presentation topics followed by question-and-answer discussion session. Summing up—representation of social and political reality. Create a format for presentation/outline. |
| 7 th Week: | World Wars I and II/Postwar America. Extracts from Gitlin and Hollinger; Show all three videos (if time permits). |
| 8 th Week: | Readings form speeches of Malcolm X and Martin Luther King Jr., A discussion of Harlem and the First Abyssinian Church, New York; Handout from Stuart Hall, <i>Representation</i> ; Taylor and Appiah, <i>Multiculturalism</i> . |
| 9 th Week: | American Foreign Policy: Show video US and the World (1865-1917); extract from Huntington's <i>The Clash of Civilization</i> . |
| 10 th Week: | Henry Kissinger and others on American Foreign Policy |
| 11 th Week: | End-Semester Presentation and 4-page final report |
| 12 th Week: | End-Semester Presentation and 4-page final report |
| 13 th Week: | End-Semester Presentation for latecomers/course evaluation |

Message to those taking this Course:

Please read the handouts and textual material at home so that you are better prepared to discuss topics in class more enthusiastically and creatively.

Grading Methods:

1. End-Semester Class research-based presentation in class (60% credit)
2. An end-semester 4-page report on the topic chosen for presentation (20 % credit), homework based on the text/supplementary material (10% credit)
3. Attendance, Participasion 10% credit.

アフリカン イシューズ： アフリカにおける近代と危機の意味

(春学期)(Spring)

AFRICAN ISSUES

近藤英俊

国際センター講師 (関西外国語大学助教授)

Hidetoshi Kondo

Lecturer, International Center (Associate Professor, Kansai Gaidai University)

Sub Title:

The meaning of modernity and crises in Africa

Course Description:

Children, who are emaciated with protruding bellies and fly-infested faces, are crying for food, or worse, already motionless in their mothers' arms. For many, such a shocking scene is typically associated with Africa. This popular imagery has its origin in mass media that are often sensationalistic as to African coverage. The truth is that Africa is the continent of wonderfully rich and diverse cultures, where people live their vibrant everyday life. Yet, from this, it does not immediately follow that Africa is a trouble-free region. Just as Japan and other industrial countries have many social problems, Africa does have critical issues to be pursued.

This course is intended to explore some of the major problems that Africa is currently facing. This year we will focus on the issues of movement of people in contemporary Africa. Migration is an important feature of the lives of a large number of African. Contrary to a conventional view that African villagers never see the outside world, they often move away from their villages without severing their ties with homes. It is a practice of *longue durée* as well as experiencing contemporary transformations. However, movement does not merely refer to geographical movements of people but more importantly to social and cultural shifts. People commonly move between groups (therefore change their personal identities), between works, between religious faiths, between medical practices and lots more, which presupposes considerable social and cultural plurality.

Using wide range of academic disciplines, we will explore geographical movements, and social and cultural shifts in contemporary Africa. Thus, the topics we deal with include: (1) urban-rural migration, (2) multiplicity of identities and their changes, (3) diversification of occupations and jobs, (4) situational changes in religious and medical practice, (5) crisis situations attributable to such movements and plurality. The course will highlight movement as modernity in Africa.

Text Books:

Texts will be distributed in due course.

Reference Books:

1. Trager, L. 2001. *Yoruba Hometowns*. Linne Tiennen.
2. Kondo, H. 2003. "Illness in Between". *Japanese Review of Cultural Anthropology* 4

Message to those taking this Course:

The course comprises lectures and class works. For class works, students are required to read and summarise a part of books or articles (minimum 30 pages per week) before attending the class. In the class, students will discuss their readings in a small group and then present it in front of all the rest. This is by no means an easy course!

Grading Methods

Assessment is based on active participation in class works and an essay (3000 words) submitted at the end of the term.

国際開発協力論

(秋学期)(Fall)

INTERNATIONAL DEVELOPMENT COOPERATION

長谷川 純一

国際センター講師 (東京大学客員教授)

Junichi Hasegawa

Lecturer, International Center (Visiting Professor, University of Tokyo)

Sub Title:

Framework for Poverty Reduction in Developing Countries

Course Description:

70% of the world population live in developing countries. Discussions will be provided for the students who are expected to live and work in the global world. The main topics of the class are: 1) nature of developing countries and development strategies; 2) actual practice and methodology of aid; 3) public opinion on ODA, national interest and international society; and 4) international organizations, bilateral aid agencies and history of development cooperation.

Text Books:

Printed materials will be provided for the actual cost.

Reference Books:

Todaro, Michael and Stephen C. Smith, *Economic Development 8th Edition*, Harlow/Boston, Pearson Education/Addison-Wesley, 2002

Easterly, William, *The Elusive Quest for Growth Economists' Adventures and Misadventures in the Tropics*, Cambridge: The MIT Press, 2001

Class Schedule per week:

1. Introduction to International Development Cooperation
2. Economies of Developing Country
3. Evolution of Development Economics
4. Actual Practices of ODA
5. ODA, Governing Law and National Interest
6. Japanese ODA and Public Opinion
7. 50 Years of ODA and Thoughts behind It
8. Aid Organizations
9. What is the Role of NGOs?
10. Pursuing Effective Aid
11. Current Topics in Donors' Circle
12. Is Aid Effective? <Micro Macro Paradox>
13. (TBD)

Message to those taking this Course:

Let us think about Development! No prior knowledge is required, but your active participation is strongly encouraged.

Grading Methods:

One Term Paper will be requested. Evaluation will be made based on active class participation (50%) and Term Paper (50%).

Inquires

mailto: j-hasegawa@jbic.go.jp

異文化研究：国際化と異文化理解プロセス

(秋学期)(Fall)

INTERNATIONALISM AND CULTURAL LEARNING

シヨールズ, ジョセフ 国際センター講師 (立教大学助教授)

Joseph Shaules Lecturer, International Center (Associate Professor, Rikkyo University)

Sub Title:

Human relations in the new global community

Course Description:

Traveling, living abroad and dealing with people from other cultures sometimes leads to understanding, tolerance and rich human relations. At other times, it increases stereotypes, creates conflict, causes culture shock and even identity crises. In this course, we will study this process of cultural learning. We will look at the stages that sojourners (travelers, expatriates etc.) go through when adapting to new environments, including how one's view of the world, values, and even identity can change. We will try to understand what it means to be "international" or "bi-cultural". The emphasis will be on the personal cultural learning experience, rather than geopolitical issues. There will strong emphasis on student discussion, student presentations, and students' intercultural experiences.

Text Books:

Handouts to be supplied by the teacher.

Reference Books:

- 1) Different Realities — Adventures in intercultural communication, by Shaules & Abe, published by Nan'un-do
- 2) Identity, by Shaules, Tsujioka & Iida, published by Oxford University Press

Class Schedule per week:

1. Class introduction
2. The nature of intercultural contact — Deep and shallow cultural learning
3. Visible and invisible culture — the cultural onion
4. Student presentations
5. The goals of cultural learning — sympathy, empathy & constructions of reality
6. The “Deep difference” model of intercultural development — the three reactions
7. The roots of prejudice — Intercultural resistance
8. Student presentations
9. Towards ethnorelativism — Intercultural acceptance
10. Biculturalism and beyond — Intercultural adaptation
11. Community and the “multi-cultural man”
12. Student presentations
13. final class

Message to those taking this Course:

This class is especially recommended for students with interest in (or experience of) living abroad. Students will share their personal point of view, and are expected to share experiences and ideas during discussion and presentations. This class is open to all students, regardless of their previous level of intercultural experience.

カナダという国とカナダの国際的な役割

(秋学期) (Fall)

CANADA AND ITS INTERNATIONAL ROLE

イエローレース, ジェームズ 国際センター講師 (カナダ日本連盟日本代表)

James Yellowlees

Lecturer, International Center (Director-Japan, Canadian Education Alliance)

Course Description:

The course will focus on introducing the history, economy and social and political systems of Canada. Students will then examine contemporary Canada and its role in the international community. We will make use of videos and computer assisted media.

Message to those taking this Course:

Canada is a very interesting nation that has a lot of potential. If you are interested in learning more about Canada please consider taking this course.

Grading Methods:

Grading Criteria: A five-page written Report on one aspect of Canadian Politics, Economy, Society or Culture.

国際関係

(秋学期) (Fall)

INTERNATIONAL RELATIONS

セツト, アフターブ

慶應義塾大学 グローバルセキュリティ研究所 所長

Aftab Seth

Director, Keio University Global Security Research Center

Sub Title:

A view from a practitioner

Course Description

This series will cover a wide range of subject:

Civilisational cross fertilization, The Cold War, South Asia where one sixth of humanity resides, the vital questions arising from attempts being made to bring about integration at Track I and Track II levels, the increasing role being played by NGOs and civil society in harmonising divergences on a range of issues, the vibrant country Vietnam its troubled past and its bright future, and related topics. These lectures will be

presented in the context of 35 years spent by the lecturer, in the practice of Diplomacy, 7 of which were as a Consul General, in charge of post which is a sub office of an Embassy and 11 years as an Ambassador to 3 countries, Greece, Vietnam and Japan.

Text Books:

象は痩せても象である 英語版・“Even if an elephant gets thin, it is still an elephant”

Reference Books:

Leadership in an interdependent world by Ghita Ionescu, Longman
Reconciliation in the Asia Pacific edited by Yoichi Funabashi, US Institute of Peace Press
Peace and security in the Asia Pacific region edited by Kevin Clements, UN University Press
Contemporary Conflict Resolution, Hugh Miall, Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse by Polity Press
South Asia in the world edited by Ramesh Thakur and Oddny Wiggen UN University Press
The debate over Vietnam by David W. Levy, Johns Hopkins, University Press
Origins of the Cold War edited by Melvyn P Leffler and David S Painter Routledge publishers
Beyond the Judgement of Civilisation by Ushimura Kei Translated by Steven J Ericson by International House of Japan, Japanese title Bunmei no sabaki o koete.
Is Japan still number one, Ezra E Vogel Pelanduk Publications 2000
Victor's Justice Tokyo War Crimes Richard H Minear Princeton University Press
Japanese Higher Education a Myth by Brian J McVeigh published by ME Sharpe 2002
The Journal of Oriental Studies: Special Series The Spirit of India VOL 13 2003, by the Institute of Oriental Philosophy
The Man who Harvests Sunshine by Andras Erdelyi: the Modern Gandhi: MS Swaminathan (to be continued)
Ten Years of the Sasakawa South East Asia Cooperation Fund by Sasakawa Peace Foundation
Innovation and Change selected essays and Christianity in the Arab World by Prince El Hassan bin Talal of Jordan published by Majlis El Hassan Amman Jordan 2003 and SCM Press London respectively.
Bulletin of the Royal Institute for Inter-Faith Studies Vol 5 Number 2 Autumn/Winter 2003 printed by the Institute in Amman Jordan

Class Schedule per week:

- 1) Introduction
- 2) & 3) India and Japan in a resurgent Asia-2 lectures including the role of an embassy
- 4) Cross fertilization in civilizations. A shared past
- 5) The Cold War, origins and demise
- 6) Asian Integration: Economic and Cultural
- 7) Conflict Prevention, Management and Resolution
- 8) South Asia-Perspectives and prospects
- 9) Leadership-its role in diplomacy: governance and inner peace
- 10) Regionalism, Multiculturalism and Multilateralism
- 11) Vietnam: perspective and prospects
- 12) Europe-Unity-Peace
- 13) Role of NGO's in international relations a case study: the MS Swaminathan Foundation, Institute of Satya Sai Education, Sasakawa Peace foundation, Toyota Foundation, The Royal Institute for Inter-Faith Studies

Message to those taking this Course:

There will be an attempt to invite guest speakers who will be Ambassador from other countries. This may lead to some changes in the titles of the lectures and the structure. The aim is to share experiences in the craft of diplomacy, the practical aspects of conducting international relations, including bilateral relations between 2 countries. Students from all faculties are welcome.

Grading Methods:

- Written Exam
- Graded on the basis of participation in class and group discussions and regular attendance.
- There will also be an oral interview for meritorious students

VISIONS OF THE PAST: CROSS-CULTURAL COMPARISON OF HISTORICAL FILM

エインジ, マイケル W. 経済学部助教授

Michael W. Ainge Associate Professor, Faculty of Economics

Course Description:

Historical Drama is a well-established film genre in most nations. While the majority of historical films ostensibly try to “re-create” past events, and present a “window on the past”, others depict the past in such a way as to comment on the nature of presenting history on film. In this course, we will examine historical films from around the world—Asia, Africa, Europe, Latin America and North America—with an eye on how they treat their historical subjects and on which attendant historiographical issues they raise. We will learn to recognize the basic issues and problems of presenting history on film (as compared to history recorded in books and manuscripts, for example), and this will allow us to discuss and compare how filmmakers in different cultures have responded to those problems.

First, we will define the two dominant types of historical film, the drama and documentary, analyzing their conventions, as well as assessing their limitations. Then, we will proceed to survey some alternative approaches to representing the past on film. All along, we will try to uncover the “hidden” ideological and interpretive assumptions in the films. We will have to consider the relationship between fact and film, and the questions of accuracy, completeness, complexity, argument. Finally, students will be expected to view a film independently, and to write a paper analyzing that particular film in light of the questions and theories discussed in the class.

Text Books:

A partial list of films on the course syllabus:

CEDDO (SENEGAL, 1978)

HEARTS AND MINDS (U.S.A., 1975)

THE MARRIAGE OF MARIA BRAUN (W. GERMANY, 1979)

QUILOMBO (BRAZIL, 1984)

SANS SOLEIL (FRANCE, 1982)

TANGO (SPAIN/ARGENTINA, 1998)

WALKER (U.S.A., 1987)

Last Samurai (U.S.A., 2003)

Grading Methods:

Students will be required to watch the assigned films on video before class, as homework, and to prepare questions for discussion in English in class. Assigned films will be available with English and/or Japanese subtitles. Evaluation will be based on: class participation(40%), and understanding of the course material as demonstrated in a term paper(60%).

DEVELOPMENT AND SOCIAL CHANGE

倉沢 愛子

経済学部教授

Aiko Kurasawa

Professor, Faculty of Economics

Sub Title:

Effect of Development Policy and Social Change at Grass-roots Community in Indonesia

Course Description:

I will describe social changes brought by rapid and heavy development policy, taking a case of Indonesia. My analysis is based on field research in two sites (one urban and another rural) where I have been watching since 1996. I will focus on changes on such aspects as human relations within the community, flow of information and changes in communication mode, religious piety, life-style etc. I will show you video which I recorded at the research sites.

Through this course first of all I want you to get clear image on people's life in a relatively “unknown” world, and so doing, to reconsider such questions as what is “development” and what is “prosperity. Does economic development really bring you prosperity and happiness? Critical analysis and evaluation are most welcome.

Text Books:

give you hand-out

Reference Books:

倉沢愛子 『ジャカルタ路地裏フィールドノート』 中央公論新社 2001年

Class Schedule per week:

- (1) Introduction on Indonesia
- (2) Suharto's development policy and foreign aid (national level analysis)
- (3) Development policy in economic sector
- (4) Development policy in health sector (2 times)
- (5) Development policy in education
- (6) Neighborhood Association and Control of people
- (7) Increased flow of Information
- (8) Strengthening of Muslim belief (2 times)
- (9) Emergence of new urban middle class
- (10) Globalization and flow of pop culture
- (11) Definition of "prosperity"

Message to those taking this Course:

read several books on developing countries in Southeast Asia

Grading Methods:

Reports (4-5 pages (A4) of essay), Attendance,Participasion (requires 70% attendance)

アジア諸国におけるビジネスマネジメント

(秋学期)(Fall)

BUSINESS MANAGEMENT IN ASIAN COUNTRIES

トビン , ロバート I. 商学部教授

Robert I. Tobin

Professor, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

This course focuses on strengthening your understanding of the major issues and challenges involved in the leadership of businesses in Asia. There will be a special focus on business strategy and the styles of management of firms headquartered in Japan, North America and Europe.

Among the topics will be the unique political, economic, social and cultural influences on managing Asian operations, issues related to corporate governance and ownership, entrepreneurship and strategy.

The course will be conducted seminar-style with presentations and discussions based on assigned readings, case studies, video segments, projects, experiential class activities, case studies and research assignments.

Text Books:

Text TBA

Additional assigned articles, case studies and supplementary readings

Reference Books:

Students are encouraged to read related materials in The Wall Street Journal, Business Week, and The Economist and to watch related television broadcasts.

Class Schedule per week:

Introduction
 How to Succeed in Asian Markets
 Asian Market Leaders
 Hybrid Management Styles
 Leading Foreign Firms Successfully
 Local Company and Country Trends
 Country Information Presentations
 Pan-Asia Strategy
 Case Studies: Challenges of Joint Ventures and Blending Style
 Political and Economic Risks in Asia

Executive Development and HR
Challenges in Asia
Competition with Family Businesses
Business in Frontier Markets
Company Presentations

Additional information about this course available at www.tobinkeio.com

Message to those taking this Course:

A challenging, innovative course that examines the business approaches of countries in this region. Students call this an eye-opening course. Be prepared for a challenging, rigorous course. This course attracts a large number of Keio's top students from every faculty and exchange students from around the world. No background in business is required. There is substantial opportunity for student interaction and collaboration.

Evaluations:

Evaluation based on successful completion of assignments and projects, participation and on-time attendance, and an examination. In the event of unavoidable absence, please contact another student for assignments and be prepared for the next class. All assignments must be typed and no late papers are accepted.

Questions, Requests:

When students have questions, they can contact the instructor before or after class.

EU・ジャパン・エコノミック・リレーションズ

(秋学期)(Fall)

EU - JAPAN ECONOMIC RELATIONS

林 秀毅

経済学部非常勤講師 (新光証券商品企画部部长・グローバルストラテジスト)

Hayashi, Hideki

Part-time Lecturer, Faculty of Economics (Global Strategist, General Manager Financial Products Planning Department Shinko Securities Co., Ltd)

Course Description:

This course is intended to understand the EU-Japan relations, offered in English. Emphasis will be on the economic side of EU-Japan relations, rather than the political or historical.

In each lecture, points will be discussed based on Powerpoint documents. As it is expected to be a small class, active questions and comments by students are welcome.

At the end of each lecture, the topic to be discussed in the following week will be announced. Students are supposed to submit report on the topic one week after.

Text Books:

Julie Gilson, "Japan and the European Union. A Partnership for the Twenty-First Century", Palgrave Macmillan, 2000. (Several Copies of the text are on reserve at the library.)

References:

Kaji, Hama and Rice, "The Xenophobe's Guide to the Japanese," Oval Books, 1999.

Class Schedule (Subject to change):

Lectures will be based mostly on chapters of the text.

Chapter 1 Introduction: Assessing Bilateral Relations (1)

Chapter 2 Developing Cooperation 1950s - 80s (2)

Chapter 3 Japan and its Changing Views of Japan (3, 4)

Chapter 4 European Integration and Changing Views of Japan (5, 6)

Chapter 5 The 1990s and a New Era in Japan-EU Relations (7, 8)

Chapter 6 Cooperation in Regional Forums (9, 10)

Chapter 7 Addressing Global Agendas (11, 12)

Chapter 8 Conclusions: A partnership for the Twenty-first Century (13)

Each number in parenthesis indicates the number of the lectures subject to change. Additional articles and materials will be introduced, if necessary.

Message to Those Taking This Course:

The knowledge on European language (French, German, Italian, or Spanish) is preferable, but not essential.

Evaluation:

Exam. Reports. Attendance.

Questions and consultation:

Anytime during the class, also by e-mail.

産業史各論（科学技術政策史）

（春学期 X Spring）

HISTORY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY POLICY

ルイス, ジョナサン

商学部非常勤講師（一橋大学助教授）

Jonathan Lewis

Part-time Lecturer, Faculty of Business and Commerce (Associate Professor, Hitotsubashi University)

Course Description:

This course investigates the aims, effectiveness and unexpected consequences of science and technology policies around the world. It focuses on the roles of states, in promoting and regulating scientific research and technological development.

In previous years I have talked in Japanese for the first half of each class and English for the second half, but will adjust this to fit students' preferences.

Reference Books:

Etzkowitz, Henry, 2002. *MIT and the Rise of Entrepreneurial Science*. Routledge.

Fuller, Steve, 1997. *Science*. Open University Press.

Levy, Pierre, 2001. *Cyberculture*. University of Minnesota Press.

Low, Morris; Nakayama, Shigeru and Yoshika, Hitoshi, 1999. *Science, technology and society in contemporary Japan*. Cambridge University Press.

Penley, Constance. 1997. *NASA/Trek: popular science and Sex in America*. Verso.

Samuels, Richard J., 1994. *Rich Nation, Strong Army*. Cornell University Press.

加藤弘一 著「*電腦社会の日本語*」文春新書, 2000

中山茂 他 著「*通史 日本の科学技術*」ガクヨウ書房, 1995

Class Schedule per week:

1. オリエンテーション
2. 技術政策の概要
3. イノベーションと技術普及論
4. 宇宙ロケットの開発史
5. プロジェクト・オライオン（原子力ロケット）
6. 国際宇宙ステーション
7. 海洋研究
8. 規格の役割。文字コードを例に
9. 著作権制度
10. オープン・ソース・ソフトウェア
11. コンピュータセキュリティ
12. 科学技術政策と大学
13. まとめ

Evaluation:

Each student is provided with a website. Students follow policy developments in a field of science and technology of interest to them, and posts their findings frequently to their website. Points are awarded for class attendance and for website entries.

Inquiries:

Jonathan_lewis@mac.com

<http://www.lewis.soc.hit-u.ac.jp>

SEMINAR: LECTURE OF ETHICS 1

樽井 正義	文学部教授
Masayoshi Tarui	Professor, Faculty of Letters
エアトル, ヴォルフガング	文学部助教授
Ertl, Wolfgang	Associate Professor, Faculty of Letters

Sub Title:

Global Justice

Course Description:

Having been focused almost exclusively on the structure of singular societies, contemporary political philosophy has only recently begun to tackle normative issues of a global scale. The most prominent example is John Rawls who reapplied his famous original position argument on the level of peoples. Strikingly enough and to the dismay of many of his followers, Rawls thinks that there are only extremely weak principles of redistribution operating globally in marked contrast to the demands within a liberal society. In reaction to Rawls's claims a lively debate developed as to whether it might be possible to derive far stronger principles of global distributive justice and what they might look like. Two issues turned out to be of crucial importance: is there an equivalent to the so-called difference principle according to which inequalities are only justified if they are to the benefit of the worst-off? Between which entities are these principles supposed to operate, between peoples or states or rather between individual human beings? We are going to look at these discussions in more detail without confining ourselves to considerations of Rawls scholarship. Instead we shall also try to take into account different lines of thought.

Texts:

Pogge, Thomas (ed.): Global Justice. Oxford, Malden (Mass.): Blackwell 2001.(available in paperback)

Course Schedule (Subject to Change):

- 1) Introduction
- 2) Background: Rawls's "Law of Peoples"
- 3) Priorities of Global Justice
- 4) Global Inequality and International Institutions
- 5) Global Distributive Justice
- 6) Contractualism and Global Economic Justice
- 7) The Disanalogy of States and Persons
- 8) Cosmopolitan Justice and Equalizing Opportunities
- 9) The Global Scope of Justice
- 10) Towards a Critical Theory of Transnational Justice

GRADUATE SEMINAR ON EUROPEAN INTEGRATION

田中俊郎	ジャン＝モネ チェア教授
Toshiro Tanaka	Professor, Jean Monnet Chair
細谷雄一	法学部専任講師
Yuichi Hosoya	Lecturer, Faculty of Law
庄司克宏	法務研究科 教授
Shoji Katsuhiko	Professor, Law School

Course Description:

The European Union strives to establish a new order in Europe. While the EU attempts to deepen its construction through the Maastricht Treaty, the Amsterdam Treaty, the Nice Treaty and the Treaty establishing a Constitution for Europe, it has enlarged its scope to South and East, from 15 to 25 member states on May 1 2004.

This year, the seminar will focus on the enlargement and the deepening of the EU, trying to shed more lights on the historical development, to analyze its problems and outline future perspectives on the subject.

Course Schedule (Subject to Change):

1. Official Language: English
2. Presentation by students and discussion to follow.
3. Special guests will be invited from the European Commission, Embassies of the member states and acceding countries in Japan, and researchers including professor from "Science Po" in Paris will be invited.

Evaluation:

Each student will be expected to give oral presentations and join in discussion during the semester. Each student is also expected to submit a term paper by the end of the semester (Length: 15 double-spaced typewritten pages including footnotes.)

Inquiries:

Call Extension 22006 for appointment.

金融特論

(秋学期) (Fall)

ADVANCED STUDY OF FINANCE

深尾光洋

商学部教授

Mitsuhiro Fukao

Professor, Faculty of Business and Commerce

Sub Title:

Corporate Governance and Financial System

Course Description:

The governance structure of limited liability companies that stipulates the relationship among the management, stockholders, creditors, employees, suppliers and customers is important in determining the performance of the economy. Although the OECD countries are generally characterized as market economies, there are considerable differences among these countries in the organizational structure of the economy.

One of the major aims of this course is to understand the institutional differences in corporate-governance structures of companies in major industrial countries including the United States, Japan, Germany, France and the United Kingdom. The differences in the corporate-governance structure have a number of implications for the performance of companies. For example, the cost of capital and the effective use of human resources would be affected by this structure.

In recent years, the deepening international integration of economic activities has heightened awareness of cross-country differences in corporate-governance structure and putting a strong pressures for convergence in some aspects of corporate governance systems. The course will also survey these trends.

1. General Concept

Fukao, Mitsuhiro, *Financial Integration, Corporate Governance, and the Performance of multinational Companies*, Brookings, 1995.

2. Hostile Takeovers

Scheifer, Andrei, and Lawrence H. Summers, "Breach of Trust in Hostile Takeovers", in *Corporate Takeovers: Causes and Consequences*, edited by Alan J. Auerbach, University of Chicago Press, 1988.

Roe, Mark J. "Takeover Politics", in *Dear Decade*, edited by M. Blair, 1993.

3. Elements of Governance

Kaplan, Steven N., "Top Executive Rewards and Firm Performance: A Comparison of Japan and the United States," *JPE*, Vol. 102, No.3, June 1992

Franks, Julian R., "Lessons from a comparison of US and UK Insolvency Codes," *Oxford Review of Economic Policy*, Vol.8, No.3, June 1994

Bank of Japan, "The Japanese Employment System," *Bank of Japan Quarterly Bulletin*, May 1994.

Black, Bernard, "Creating Strong Stock Market by Protecting Outside Shareholders," remarks at OECD/KDI conference on Corporate Governance in Asia: A comparative Perspective, Seoul, March 3-5, 1999.

Newbury, Robert W., Rachel Leahey, Annick Siegl and Stacey Burke, *Board Practices 2000*, IRRC, 2000.

William C. Powers, Jr., Raymond S. Troubh, and Herbert S. Winokur, Jr., "Report of Investigation by the special investigative committee of the board of directors of Enron corp.," February, 2002.

4. Financial System

Fukao, Mitsuhiro, "Japanese Financial Instability and Weaknesses in the Corporate Governance Structure," Seoul Journal of Economics, Vol.11, No.4, 1998.

Fukao, Mitsuhiro, "Barriers to Financial Restructuring: Japanese Banking and Life-Insurance Industries," paper for a NBER conference on "Structural Impediments to Growth in Japan" on March 18-19, 2002.

Grading will be based on the term paper and class participation.

The topic of the term paper has to be related to the content of the class. For example:

Comparison of governance structures among some countries, Governance structure of government owned companies and private companies, Issues related to bankruptcy procedures, Security exchange law and governance system, Incentive mechanism for directors, Banking problems and deposit insurance system.

Text:

Fukao, Mitsuhiro, Financial Integration, Corporate Governance, and the Performance of Multinational Companies, Brookings, 1995.

会計学	(秋学期) (Fall)
Accounting	
伊藤 眞	商学部教授
Makoto Ito	Professor, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

International Accounting Standard and International Financial Reporting Standard

International Accounting Standards (IAS) issued by the International Accounting Standards Committee (IASC), and International Financial Reporting Standards (IFRS) issued by International Accounting Standards Board (IASB), which is restructured from IASC, have been making their presence felt around the world recent years. IASB has been and is continuing to study accounting issues and prepare new IFRS and improve IAS.

Some multinational enterprises, whose headquarters are located in Europe, have been preparing their consolidated financial statements in compliance with IAS (including IFRS) for purpose of cross-boarder security offerings and listings on foreign securities offering.

All enterprises, which are domiciled and listed in the European Union, will be required to report in accordance with IAS from year 2005. Many countries are taking steps to harmonize their national accounting standards with IAS with some modifications to allow for local environment.

In this course, we will study the brief history of IAS, IASC and IASB, Framework for the Preparation and Presentation of Financial Statements, and some significant accounting standards, such as IAS2 "Inventory", IAS11 "Construction contracts", IAS12 "Income Taxes" and IAS39 "Financial Instruments: Recognition and Measurement", which will be compared with the US Generally Accepted Accounting Principles (US GAAP) and Japanese GAAP, when necessary.

After the first session of introduction to IAS, each student will be assigned in advance to report on a Standard, followed by discussion, case studies and my supplementary explanation or comments.

Text:

International Financial Reporting Standards 2005, IASB

The number of students who register this course through International Center will be limited to 5 persons.

国際経済	(秋学期) (Fall)
International Economy	
小島明	商学研究科教授
Akira Kojima	Professor, Graduate School of Business and Commerce

Course Description:

The class covers various international economic policy issues including trade, Investment (foreign direct investment), foreign exchange policy, WTO process, FTAs (Free Trade Agreements), regional integration, competitiveness issue, economic development strategy and so on.

Students will be put in the very front line of policy debate of international economy. Real voices of policy makers, business leaders and scholars will often be given to the students through recorded tapes and videos. As I have good many chances to participate to many important international policy debates, the student can be given the chance of sharing such experiences of mine. Practical, as well as theoretical approach will be introduced.

Texts:

“Globalization and its Discontent”, Joseph E. Stiglitz, Norton, 2002

METI “White Paper on International Trade 2004” (This document can be accessed through METI web site, both in Japanese and English.)

Recommended Readings:

Various analytical reports and documents of IMF, World Bank and other institutions are recommended as required.

日本研究講座 (JAPANESE STUDIES COURSES)

異文化コミュニケーション 1 日本のコミュニケーションパターンから見た場合
INTERCULTURAL COMMUNICATION 1

(春学期) (Spring)

手塚千鶴子
Chizuko Tezuka

国際センター教授
Professor, International Center

Sub Title:

Seen from Japanese communication patterns

Course Description:

This course has three interrelated purposes. The first is to help students learn some essential elements of Japanese psychology and culture, and their implications for communication patterns of Japanese people both among themselves and in intercultural settings. The second is to help students to examine both difficulties/challenges and excitements/joys of intercultural communication by learning key concepts and issues of intercultural communication. The third is to facilitate both Japanese and international students' on-going intercultural communication both by increasing self-awareness of how their respective cultures affect their communication patterns and by arranging them to learn to work together successfully on group projects which will serve as testing grounds for their intercultural communication.

Text Books:

No designated textbook and handouts will be distributed.

References:

Japanese culture and behavior: selected readings by Takie Lebra & William Lebra
Japanese patterns of behavior by Takie Sugiyama Leba
An introduction to intercultural communication by John C. Condon & Fathi Yousef
Intercultural communication :a reader (6th edition) by L. A. Samovar & R. E. Peter

Course Schedule:

1. Orientation and quiz on the impact of globalization on Japan
2. Conformity pressure vs. individualism in Japanese culture: a case study of Toko Shinoda, a female artist
3. What puzzles you about Japanese culture and society ? and Orientation to Group Projects
4. Understanding Japanese culture through examining mother-child relationship pictures and How to have good intercultural communication in class
5. Culture as mental software, functions of culture, and culture and communication
6. *Amae* psychology: prototype of *Amae* and definition of *Amae*
7. How *Amae* psychology and an emphasis on *Wa* gets translated into Japanese communication patterns: *Sasshi, Enryo and Honne* vs. *Tatema*
8. How to overcome difficulties in intercultural communication: attribution, empathy and ethnocentrism
9. Preparation for Group Project
10. The Concept of *Sunao* and its implications for Japanese communication patterns: conflict avoidance, readiness to compliance ?, and open-mind
11. Comparing concepts of self between individualistic cultures and collectivistic cultures and its implications for intercultural communication between the two
12. Group project presentation 1
13. Group project presentation 2
14. Wrap-up

Message to Those Taking This Course:

Students who take this course are strongly encouraged to do risk-taking by sharing your opinions and feelings. Thus contributing to class by active participation in pair-work, group work and class discussion is a must, as the instructor believes that students learn a great deal from their classmates. As group projects, a major source for students' satisfaction, take so much time and energy in and outside of class, students' commitment is essential here. And your input to make this class better and interesting is always welcome by the instructor.

Evaluation:

Overall grades will be based on attendance, essays, participation in class, group project presentation, and final individual project paper

based on group project.

Inquiries:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or through e-mail at ctezuka@ic.keio.ac.jp.

英国と米国のマスコミに描かれた日本
JAPAN IN THE FOREIGN IMAGINATION

(春学期) (Spring)

キンモンズ, アール H. 国際センター講師 (大正大学教授)
Earl H. Kinmonth Lecturer, International Center (Professor, Taisho University)

Course Description:

This course examines foreign (primarily Anglo-American) views of Japan from the earliest awareness of Japan until the present. For Japanese, the course serves as an introduction to the many ways Japan has been and is seen by foreign observers. For non-Japanese, the course serves to introduce students to the limits and peculiarities of scholarly and journalistic writing on Japan. For both, the course is intended to give students an awareness of the degree to which not just journalists but also allegedly objective scholarly observers are in fact heavily influenced by the historical and political circumstances in which they write.

Recommended Reading:

Appropriate readings will be suggested in conjunction with the lectures.

Class Schedule (Subject to change):

1. Introduction to the course — “Whose images of which Japan?”
2. European knowledge of Japan before the coming of Perry
3. The Meiji Restoration and the Meiji Renovation as seen by foreign observers
4. The avid students become the Yellow Peril
5. Taisho Democracy and interwar Japan as seen by foreigners
6. Shame and constipation — Anglo-American anthropologists psyche out the Japanese enemy during the Pacific War
7. New Dealers in the American Occupation — progressive misunderstanding of the causes of militarism
8. Cold War politics and post-war American studies of Japan
9. The many and varied explanations for Japanese economic and technological success
10. Rote memory or creative teaching — the variegated image of Japanese education
11. Erotic geisha or smothering mother — the variegated image of Japanese women
12. Waiting for convergence, planning for containment — rational choice versus revisionism in the American view of Japan’s “bubble economy”
13. “Comfort Women” and “The Rape of Nanking” — American self-righteousness confronts Japanese evasiveness
14. Taking Japan Seriously? The who, the why, and how of foreign reporting on Japan
15. From super state to superannuated state — American images of “post bubble Japan”

Message to Those Taking This Course:

The final examination will be based on the lectures. Because no textbook is used, attendance is particularly important.

Evaluation:

Students will be expected to write one short paper on some aspect the foreign image of Japan or the Japanese image of a foreign country. There will be a final examination for the course based on the lectures. The final examination will be given during the scheduled examination period. The course grade will be computed as attendance and participation (20%), report (40%), and final examination (40%).

Inquiries:

Questions during or after lecture are welcome. Questions may be submitted in English or Japanese by email to ehk@gol.com. Special consultation before or after lecture can be provided upon request.

Sub Title:

Understanding Key Success Factors for Developing and Implementing Corporate Strategies

Course Description:

Objectives:

1. This course tries to identify key success factors of linking corporate strategies with the management systems and practices. Using case studies and discussion, we will look at the micro level management strategies and practices.
2. The course also tries to develop analytical and experiential learning skills as well as discussion/presentation skills in students.

Under the increasingly global economy, companies are constantly reviewing their strategies and management practices to meet the new challenges. It is recognized that the competitiveness of corporations includes their ability to modify and change, as the environment changes, their management systems and practices. The course offers the opportunity to understand the linkage between corporate strategies and the process of developing management practices. In-depth understanding of selected corporations in Japan as "best practice" will be pursued through case studies, company visits and student's own research

Basic frameworks will be provided during the course. Each student is expected to develop individual list of key success factors of implementing strategies through management practices, based on the case studies used during the course.

Classes are conducted in English. Discussions and information sharing will also take place through e-mails. Both undergraduate and graduate level students are welcome.

Recommended Readings:

Will be advised at the beginning of the course.

Class Schedule (Subject to change):

1. Course Orientation (1 session)
2. Discussion of Strategy development framework (1 session)
3. Discussion of cases (Major Japanese companies) (4 sessions)
4. Discussion of cases (Medium scale and entrepreneur cases) (2 sessions)
5. Students research presentations (4 sessions)
6. Company visit (2 sessions)

Message to Those Taking This Course:

To develop these skills and enhance understanding, students are required to read and analyze assigned case studies and do some further fieldwork.

Evaluation:

Performance will be evaluated on the basis of:

1) Participation in class discussion, 2) field work report and presentations, and 3) a final report. Fieldwork can take either group visit to companies and/or research on a company with student's own initiative.

Inquiries:

Questions and discussions can take place through e-mails as well as in the classroom.

Course Description:

Japanese prose literature of the modern period will be discussed in this lecture course. In “Journey Through the Floating World” last summer, we covered the pre-modern literature of the Tokugawa period, an era that came to an abrupt end with the Meiji Restoration of 1868. The resulting political and social upheaval had a traumatic effect on many aspects of Japanese life, and literature was no exception. Some savored the sharp break with the past, while others looked back on their own cultural heritage for inspiration and continuity. We will focus on the development of the modern novel through the works of such writers as Natsume Soseki, Mori Ōgai, Akutagawa Ryūnosuke, Kawabata Yasunari, Tanizaki Junichirō and Mishima Yukio. Modern film adaptations will also be introduced.

Text Books:

Instructions and materials are provided on the class website (www.armour.cc/mezame.htm)

Recommended Reading:

A list of reference works and useful links are available on-line.

Class Schedule (Subject to change):

A detailed list of the works covered in this course is available on the class website.

On completion of this lecture course, students should:

1. Be familiar with the major works of poetry, prose and drama in the period covered;
2. Comprehend the major literary currents in the period covered and be able to identify the importance of the major works in the development of these currents;
3. Be familiar with the major figures in Japanese literary history (including commentators and critics) and their achievements;
4. Understand the cultural background (including religious aspects) of the works covered and, where necessary, the political events that form a backdrop to the literature;
5. Be familiar with the reception of Japanese literature in the West.

In the last few weeks of the course, those students requiring a grade will have an opportunity to report on a reading and research project of their own choosing.

Message to Those Taking This Course:

The course assumes that the student has a working knowledge of English. Prior knowledge of Japanese literature is not required, though it is desirable. Naturally some familiarity with the Japanese language, spoken and written, is a plus.

Evaluation:

Grading is primarily based on the student's research project, presented to the class (using PowerPoint) according to a published schedule; a Q&A session will follow each presentation and a student's responses are taken into consideration in the grading process. Overseas students who want their credits to be transferred to their home university are advised to present their research results in the form of an academic paper, complete with notes and bibliography. Naturally, regular attendance is important in order to receive a passing grade; the International Center requires that a record be kept.

Course Description:

Goal:

In this course, we will analyse contemporary Japanese society and business from an ethical perspective.

Through lecture and case discussion, I would like to find a balancing point of culturally contextualized management and globally acceptable norms for future international business. Also, I would like to discuss the strong points of Japanese Style Management which could be transferable to other cultures, and the weak points which would be universally unacceptable.

Method:

First, I will highlight the historical and theoretical aspects fundamental to analyzing Japanese society and business from an ethical perspective. Then I will assign you to read short cases which describe recent incidents that have caused public controversy both in Japan and elsewhere.

Texts:

Reischauer, E.O. The Japanese Today: Change and Continuity. The Belknap Press of Harvard University Press, 1988.

Handouts

Recommended Reading:

TBA

Class Schedule (Subject to change):

1. Introduction: Geography, Climate and Demography of Japan
2. Historical Orientation of Japan.
3. Interpretation of Contemporary Japanese Society 1
4. Interpretations of Contemporary Japanese Society 2
5. Interpretations of Contemporary Japanese Society 3
6. Midterm Exam.
7. Government and Business Interface
8. Japanese Corporate Governance
9. Ethical Issues in Japanese Workplace 1
10. Ethical Issues in Japanese Workplace 2
11. Japanese Business in Transition 1: Community
12. Japanese Business in Transition 2: Environment
13. Final Exam.

Message to Those Taking This Course:

This is a course for international students who want to learn about the fundamentals of Japanese society and business. It is necessary for you to have advanced-level English discussion skills. Through this discussion, I hope you will deepen your understanding of Japanese society and business, and develop cultural insights that help in dealing with practical issues in an international setting.

Evaluation:

Mid-Term Examination (TBA) 30%, Final Exam/ Project (TBA) 40%, Class Participation 20%, Home work 10%

美術を「よむ」 - 日本美術史入門

(春学期) Spring)

INTRODUCTION TO THE ARTS OF JAPAN

村井則子

国際センター講師

Noriko Murai

Lecturer, International Center

Description:

This course explores the history of Japanese art from the mid-nineteenth century to the present. Modernity was first and foremost articulated through the construction of the nation state “Japan.” Visual arts played a central role in providing the modern nation with a cultural, social, and psychological identity. We will study the significance of modernity and modernism in different media including painting, sculpture, photography, and architecture. We will also consider broader issues such as commodity consumption, gender, and imperialism in the context of visual representation.

Requirements:

1. Short paper (4-5 double-spaced pages)
2. Take-home midterm exam
3. Take-home final exam
4. Two field trips to museums in the area

Readings:

There are no textbooks for the course. A *Source Book* containing all required readings for the course will be put on reserve.

Proposed Syllabus:

1. *Introduction*
2. *Constructing "Japanese Art"*
READING: Ellen Conant, "Refractions of the Rising Sun: Japan's Participation in International Exhibitions 1862-1910," (1991); Christine Guth, "From Temple to Tearoom," (1993).
3. *From Edo to Meiji: Takahashi Yuichi and Kanô Hôgai*
READING: Tôru Haga, "The Formation of Realism in Meiji Painting: The Artistic Career of Takahashi Yuichi," (1971); Ellen Conant, "Tradition in Transition, 1868-1890," (1995).
4. *Body and the Nude*
READING: Norman Bryson, "Yôga and the Sexual Structure of Cultural Exchange," (1994).
5. *Okakura Kakuzô and the Aesthetic Ideology of Asia*
READING: Excerpts from Okakura Kakuzô, *The Ideals of the East*, (1903) and *The Book of Tea*, (1906); Emiko Usui, "National Identity, the Asiatic Ideal, and the Artist: Okakura Presents the Nihon Bijutsuin in Boston," (1999).
6. *The Modern Artist, Urban Spectacle and the Modernist Vision*
READING: John Clark, "Artistic Subjectivity in the Taisho and Early Showa Avant-Garde," (1994); Miriam Silverberg, "Constructing the Japanese Ethnography of Modernity," (1992).
7. *Orientalism, Nativism, and Traditionalism*
READING: Alexandra Munroe, "Circle: Modernism and Tradition," (1994); Yoko Kikuchi, "Hybridity and the Oriental Orientalism of *Mingei* Theory," (1997).
8. *Images After Ground Zero*
READING: John Dower, "Japanese Artists and the Atomic Bomb," (1993); Yamanashi Emiko, "Painting in the Time of 'Heavy Hands'," (1997).
9. *Action and Expression: the Gutai Association*
READING: Sin'ichiro Osaki, "Body and Place: Action in Postwar Art in Japan," (1998).
10. *"Anti-Art" in the 60s*
READING: Alexandra Munroe, "Morphology of Revenge: The Yomiuri Independent Artists and Social Protest Tendencies in the 1960s," (1994).
11. *The Postwar Unconscious: Performance and Photography*
READING: Mark Holborn, "The Object Eye," "Junin-no-me," and Eikoh Hose," (1986); Susan Klein, "The Origin and Historical Context of Ankoku Butô," (1988).
12. *Architecture and the Public Space*
READING: Kenneth Frampton, "Twilight Gloom to Self-Enclosed Modernity: Five Japanese Architects," (1986).
13. *Image in the Age of Digital Manipulation: the 90s and beyond*
READING: Norman Bryson, "Morimura: 3 READINGS," (1996); Yuko Hasegawa, "Pachinko, Mandala and Merry Amnesia," (1997); Alexandra Munroe, "*Hinomaru Illumination*: Japanese Art of the 1990s," (1994).

Bibliography:

Bibliography will be distributed at the first class.

日本の近代思想：福澤諭吉と丸山真男

(春学期) Spring)

JAPANESE TRADITION OF MODERN THOUGHT: FROM YUKICHI FUKUZAWA TO MASAO MARUYAMA

坂本 達哉

経済学部教授

Tatsuya Sakamoto

Professor, Faculty of Economics

Sub Title:

Seminar for reading and discussing some key texts from the works of the two most influential thinkers

Course Description:

This course aims to introduce students to a long and complicated history and its unique characteristics of Japanese modern thought as best represented by the works of Yukichi Fukuzawa, the founder of Keio University, and those of Masao Maruyama, the most single influential thinker in the post-war Japan.

Text Books:

No particular text book will be used, but excerpts from the central writings by Fukuzawa, Maruyama and other great Japanese thinkers will be provided as the course develops.

Class Schedule per week:

A feature of the course is its seminar style presentation. It uniquely attempts to include ample opportunities for an exchange of opinions between instructor and students and between students. Every class will be divided into three parts. First, an introductory lecture by the instructor will be made to highlight the historical and intellectual backgrounds of the relevant texts to be discussed every time. This is followed by a prepared essay presentation by students. The rest of the class will be devoted to a class discussion. The first half of the entire course will deal with the works of Fukuzawa and the second those of Maruyama.

Message to Those Taking This Course:

This course is intended for international as well as Japanese students who eagerly wish to learn the wealth of Japanese intellectual tradition from Fukuzawa to Maruyama in English.

Grading Methods:

Grading will be based on attendance, in-class presentations and a short term paper.

日本人の心理学 (1)	コンフリクト・マネイジメント	(春学期) (Spring)
JAPANESE PSYCHOLOGY IN CONTEMPORARY JAPAN (1)		
手塚 千鶴子	国際センター教授	
Chizuko Tezuka	Professor, International Center	

Sub title:

Conflict Management

Course content:

This course is designed to explore how Japanese manage interpersonal conflict both among themselves as well as in interaction with foreigners and its implications for Japanese society which is becoming more multicultural in this accelerated globalization age. Though a Western notion of conflict in the West claims that it is inevitable yet not necessary bad, the Japanese society has been described to believe in its self-image as a conflict-free society and to abhor and avoid interpersonal conflicts at any cost. With this apparent contrast in mind, students will learn characteristics of Japanese conflict management strategies, their cultural and social psychological backgrounds, and the challenges for both Japanese people and foreigners in trying to creatively deal with intercultural conflicts. And students will be asked to take some social psychological measures for self-understanding.

Textbooks:

no designated textbook and handouts will be distributed.

References:

Conflict in Japan edited by Ellis Krauss, Thomas Rohlen, and Patricia G. Steinhoff, University of Hawaii Press, 1990.

Japanese Culture and Society: model of interpretation edited by Kreiner and Olscheleger, Monographien 12, Deutschen Institute fur Japanstudien der Philipp-Frantz-von-Siebold-Stiftung, 1996.

Course schedule (subject to change)

1. Orientation to the course and test-taking on conflict management style
2. Harmony Model vs Conflict Model of Japanese society and orientation to writing conflict episode journals
3. Non-confrontational Strategies of Conflict Management: Bullying in Japanese Schools
4. Non-confrontational Strategies of Conflict Management: *Karoushi and Gaman* in Japanese Work Place
5. Japanese cultural values underlying non-confrontational strategies
6. How Japanese express anger
7. Comparison of conflict management between Japan and U.S.A.
8. Intercultural conflict around the *Ehimemaru* Incident in Jan, 2001

9. Intercultural conflict between Japanese teachers and int'l students
10. Japanese conflict management seen from a perspective of a bicultural writer, Kyouko Mori
11. How to make use of our own anger creatively
12. Wrap-up session

Messages to students:

Students who take this course are strongly encouraged to do risk-taking by sharing your opinions. Active participation in pair-work, group work and class discussion is a must.

Evaluation:

Overall grade will be based on attendance, essays, participation in class, final presentation, and its resultant final paper. .

Questions and consultation:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or through e-mail at ctezuka@ic.keio.ac.jp.

近代日本の対外交流史

(秋学期) (Fall)

MODERN HISTORY OF DIPLOMATIC AND CULTURAL RELATIONS BETWEEN JAPAN AND THE WORLD

太田昭子

法学部教授

Akiko Ohta

Professor, Faculty of Law

Course Description:

The course aims to provide an introductory and comprehensive view of the history of diplomatic and cultural relations between Japan and the World in the latter half of the nineteenth century and early twentieth century. A basic knowledge of Japanese history is desirable, but no previous knowledge of this particular subject will be assumed. A small amount of reading will be expected each week.

Textbooks:

No specific textbook will be used.

Recommended Readings:

The reading list will be given at the beginning of the term.

Class Schedule (Subject to change):

1. Japan and the World before the Opening of Japan (2 lectures): General introduction and the reappraisal of the Seclusion Policy
2. The Opening of Japan and international society in the 1850s and 1860s
3. The First Treaty with the West and the subsequent treaties(2 lectures): the analysis of the U.S.-Japanese Treaty of Peace and Amity will be included
4. Japanese Visits Abroad (2 lectures): the evaluation of the cultural and diplomatic significance of the Japanese visits abroad (official missions / official students / stowaways and castaways
5. Japanese perception of the West, changing attitudes and feelings in the 1860s (1 lecture)
6. Western perception of Japan in the 1850s and 1860s (1 lecture)
7. The significance of the Iwakura Mission (1 ~ 2 lectures)
8. Development of Japanese Nationalism in the Meiji Era (2 lectures): comparative analysis of several primary sources
Optional excursion to the Yokohama Archives of History may be included in the programme.

Evaluation:

Students are expected to make a short report on a research project of their own choosing and hand in a term paper of about 3,000 words (about five pages, A4, double space) by the end of the term, and take the final examination.

Volunteers for a mini-presentation (about 10-15 minutes) on the topics related to the lecture are most welcome. (Details will be explained in class.)

手塚千鶴子
Chizuko Tezuka

国際センター教授
Professor, International Center

Sub Title:

Identity of Japanese sojourners

Course Description:

The first purpose is to help students learn how Japanese people have been experiencing exciting as well as confusing encounters with cultures different from their own and how such cross cultural encounters in and outside of Japan have been affecting their sense of identity and communication styles as an individual (and as people) from the times of Japan's First Opening to the world in the late Edo Period up to the present from the three perspectives: history, cultural adjustment, and intercultural communication, utilizing case studies. The second purpose is to help both Japanese and international students who are brought together to Mita campus by the globalization and internationalization to make best use of this class to communicate effectively through discussion and other student-centered activities.

Textbooks:

No designated textbook and handouts will be distributed.

Recommended Reading:

Tsuda Umeko and Women's Education in Japan by Barbara Ross, Yale Univ Press, 1992.

The White Plum: a biography of Ume Tsuda by Yoshiko Furuki, Weatherheel, 1991.

Intercultural Communication: reader 5th ed., Larry Samovar and Richard E Porter, Wadsworth Publishing Company, 1989.

Japanese Culture and Behavior (revised edition) ed.by Takie Sugiyama Lebra and William Lebra, Univ. of Hawaii Press, 1986.

Japanese Patterns of behavior ed by Takie Sugiyama Lebra, Univ. of Hawaii Press, 1976.

Exploring Japaneseness: on Japanese Enactments of Culture and Consciousness ed by Ray

Class Schedule (Subject to change):

1. Orientation to the course
2. A brief historical review of Japan's encounter with the outside world as an island nation up to the late Edo Period
3. Japan's attitude towards the West after the First Opening of Japan with an emphasis on absorbing the Western civilization
4. Japan's endeavor to modernize herself in comparison with Korea and China
5. A case study of Umeko Tsuda 1: a successful sojourn in America
6. A case study of Umeko Tsuda 2: many years of struggle adjusting back to Japan
7. Cross cultural adjustment I: culture as mental software, stages of cross cultural adjustment, and facilitating factors of cross cultural adjustment
8. A case study of Paris Syndrome or Double Suicide in Los Angeles: overadjustment and challenges for Japanese sojourners
9. A case study of a Malaysian woman married to a Japanese: cultural identity
10. Identity: ego identity, personal identity, and social identity, process of identity formation, and issues of identity fluctuation in cross cultural adjustment
11. A case of Jiro, a Japanese returnee who spent 6 years in U.S.A.: formulation and transformation of cultural identity and adjustment issue back in Japan
12. A case study of Masao Miyamoto adjusting back to Japan in the Showa Period in comparison with Umeko Tsuda in the Meiji Period
13. Challenge for both Japanese and non-Japanese in the globalizing world
14. Wrap-up

Messages to Those Taking This Course:

Those students who are willing to participate actively in class are most welcome. Students are strongly encouraged to engage actively in pair work, a small group discussion and class discussion.

Evaluation:

Overall grad will be based on attendance, homework, essays, participation in class, and final term paper.

Inquiries:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or

Sub Title:

A case study of cross-cultural contact

Course Description:

Christianity in Japan presents us with a number of paradoxes. For example, although the majority of Japanese today choose Christian-style weddings, the actual number of Christians amounts to less than one per cent of the total population (as opposed to about 25 per cent in its close cultural neighbour, South Korea). This 'failure' contrasts with the relatively greater growth of Christianity in the late sixteenth and early seventeenth centuries, even though the total number of missionaries was much smaller and the linguistic and logistical barriers greater. Perhaps the greatest paradox occurred after Christianity was virtually eliminated through an increasingly severe campaign of persecution from 1614 onwards. Small groups in isolated communities succeeded in preserving recognisably Christian beliefs and practices. However, many of these groups refused to accept the authority of Roman Catholic missionaries when they returned to Japan in the second half of the nineteenth century.

In the course we will consider these and other issues, using a combination of primary and secondary materials. By studying the activities and ideas of missionaries, Japanese Christians, and Japanese who did not become Christian, students will gain general understanding of the dynamics of cross-cultural contact. They will also learn about the nature of history through interpreting primary materials and studying different approaches to the history of Christianity in Japan.

Recommended Reading:

There will be a selection of assigned readings for each class (in Japanese, English and occasionally in other European languages or Chinese). Students will find it useful to start the course with a basic knowledge of Japanese history, Japanese religion, and Christianity. All suggestions for reading will be displayed on my web site (<http://web.hc.keio.ac.jp/~hjb/>).

Class Schedule per week:

1. Orientation and overview
2. The background: Christianity missionary activity and religion in Japan
3. Jesuit approaches to Japan
4. Japanese approaches to Christianity
5. Christianity and Japanese politics
6. Christianity in Tokugawa Japan (1) Government policies
7. Christianity in Tokugawa Japan (2) Responses to government policies
8. The return of Roman Catholic missionaries and the 'hidden' Christians
9. Christianity and social change in Japan 1859-1945
10. Christianity and patriotism in Japan 1859-1945
11. Christianity in Japan in the second half of the twentieth century
12. Christianity in Japan today
13. Concluding remarks

Message to those taking this Course:

I hope to attract students from a variety of backgrounds. This is because the course will gain from the combined viewpoints of people from areas which have sent Christianity missionaries to Japan, such as Portugal and the United States, and of people from areas which have played host to Christian missionaries, both in Asia (including Japan itself) and elsewhere.

I will expect students to attend all classes, on time, to do the assigned readings, and to participate in class presentations and discussions. Sessions will be organised into a combination of formal lectures and interactive seminars.

Grading Methods:

Oral presentations(30%) , Reports(At least one short and one long (50%) , Attendance and Participation(20%)

Questions, Requests:

Students wishing to ask a question or arrange an appointment should talk to me before or after classes, or send an e-mail. My e-mail address is given on my web site (<http://web.hc.keio.ac.jp/~hjb/>)

多民族社会としての日本

(秋学期)(Fall)

MULTIETHNIC JAPAN

柏崎千佳子

経済学部助教授

Chikako Kashiwazaki

Associate Professor, Faculty of Economics

Course Description:

This course introduces students to 'multiethnic Japan'. Although Japanese society is often portrayed as ethnically homogeneous, its members include diverse groups of people such as the Ainu, Okinawans, *zainichi* Koreans, and various 'newcomer' foreign residents. In this course, students will learn about minority groups in Japan and their relations with the majority 'Japanese' population. The goal of this course is to acquire basic knowledge and analytic tools to discuss issues concerning ethnic relations in Japan and elsewhere.

Texts:

Reading materials consist of excerpts from a variety of sources and will be provided by the instructor.

Class Schedule (Subject to change):

1. Introduction
2. Is Japan ethnically/culturally homogeneous?
3. Theories of ethnic relations
4. Zainichi Koreans: past and present
5. Zainichi Koreans: identity formation
6. Nikkei-Brazilians
7. Visa overstayers
8. "Foreign brides"
9. People from buraku
10. The Ainu
11. Okinawans
12. Presentations on the final project
13. Summary — Rethinking Japanese society

Message to Those Taking This Course:

The class is conducted entirely in English. Much of class activity is devoted to oral presentations and discussion. Students are expected to read the assigned materials beforehand and to participate actively in the class.

Evaluation:

Evaluation will be based on participation in classroom discussion (20%), presentations (20%), and reading/writing assignments including a short essay and a term paper of 1,800+words (60%).

政策決定、歴史的記憶、人種から見る明治期日本外交

(秋学期)(Fall)

JAPANESE DIPLOMACY IN THE MEIJI ERA

飯倉章

国際センター講師 (城西国際大学教授)

Akira Iikura

Lecturer, International Center (Professor Josai International University)

Sub Title:

Decision-making, historical memory and race

Course Description:

This course aims to examine Japanese diplomacy in the Meiji era from diverse angles and provide students with some new perspectives on the historical events in the period such as the triple intervention, the Anglo-Japanese alliance, and the Russo-Japanese War. Students will gain an understanding of Japanese diplomacy in the Meiji era and learn how to analyze historical events through decision-making theories, historical memory, and the concept of race.

Text Books:

No textbook will be used. Handouts will be given as reading assignments.

Reference Books:

Recommended readings will be suggested in the course of the lecture.

Class Schedule per week:

1. Introduction to the course and decision-makers in the Meiji era
2. The trauma of Japanese diplomacy: unequal treaties, the triple intervention and the Portsmouth treaty
3. The Yellow Peril and its influence on Japanese foreign relations
4. The Anglo-Japanese alliance and the question of race
5. The lessons of the Anglo-Japanese alliance: Is an alliance with an "Anglo-Saxon" state reliable?
6. Was the war evadable or inevitable?: perception and misperception of Japanese decision-makers before the Russo-Japanese war
7. The Russo-Japanese war as an icon in historical memory
8. Wrong lessons from the "success" of the war and the "defeat" in diplomacy
9. Explaining the Russo-Japanese war through the application of Graham Allison's decision-making theories
10. The changing views of Japan during the Russo-Japanese war: Japan from protégé to world power
11. The wars and leaders in the Meiji era that live in Japanese culture

Message to those taking this Course:

The lecturer will put special emphasis on the Russo-Japanese war of 1904–05 by showing some new scholarly works, popular history and commemorative articles on the war that appear mainly during the years 2004 and 2005, the hundredth anniversary of the war. The lecturer will illustrate the lecture by using slides and videotapes.

Grading Methods:

The final exam will be given based on the lecture. A short term paper on one of designated questions will be assigned. Attendance and class participation will be particularly important.

日本の文学

(秋学期)(Fall)

JAPANESE LITERATURE

アーマー , アンドルー 文学部教授

Andrew Armour Professor, Faculty of Letters

Course Description:

This course is intended to cover the history of Japanese literature from earliest times up to the modern era. Starting with the writing system, we will trace the conspicuous developments in poetry, prose and drama through the Nara, Heian, Kamakura, Muromachi and Edo periods. Included are such works as the *Manyōshū*, *Genji monogatari*, *Heike monogatari*, *Oku-no-hosomichi* and *Sonezaki shinjū*.

Texts:

Instructions and materials are provided on the class website (www.armour.cc/jlit.htm).

Recommended Readings:

A list of reference works and useful links are available on-line.

Class Schedule (Subject to change):

A detailed list of the works covered in this course is available on the class website.

On completion of this lecture course, students should:

1. Understand how the Japanese writing system developed, how it came to be used to compose works of literature, the problems it poses, and how the modern reader can decipher a manuscript such as that of *Genji monogatari*;
2. Be familiar with the major works of poetry, prose and drama in the period covered;
3. Comprehend the major literary currents in the period covered and be able to identify the importance of the major works in the development of these currents;
4. Be familiar with the major figures in Japanese literary history (including commentators and critics) and their achievements;
5. Understand the cultural background (including religious aspects) of the works covered and, where necessary, the political events that form a backdrop to the literature;
6. Be familiar with the reception of Japanese literature in the West.

In the last few weeks of the course, those students requiring a grade will have an opportunity to report on a reading and research project of their own choosing.

Messages to Those Taking This Course:

The course assumes that the student has a working knowledge of English. Prior knowledge of Japanese literature is not required, though it is desirable. Naturally some familiarity with the Japanese language, spoken and written, is a plus.

Evaluation:

Grading is primarily based on the student's research project, presented to the class (using PowerPoint) according to a published schedule; a Q&A session will follow each presentation and a student's responses are taken into consideration in the grading process. Overseas students who want their credits to be transferred to their home university are advised to present their research results in the form of an academic paper, complete with notes and bibliography. Naturally, regular attendance is important in order to receive a passing grade; the International Center requires that a record be kept.

20 世紀日本の文学に与えたヨーロッパ文学の影響

(秋学期) (Fall)

THE IMPACT OF WESTERN LITERATURE ON JAPANESE TWENTIETH-CENTURY FICTION

レイサイド, ジェイムス 法学部教授

James M. Raeside

Professor, Faculty of Law

Course Description:

This course of lectures is intended to give a selective account of the way that Western literature was received in Japan during the 20th century, and the different ways that Japanese novelists engaged with the genres and techniques of foreign predecessors and contemporaries.

Consideration will be limited to Japanese novelists, though poets will also figure amongst the Western writers. The lectures will follow a basically chronological order, beginning with the Natsume Soseki and ending with Murakami Haruki.

Reference Books:

Students interested in this course should try to read at least some of the following (names appear without macrons).

Natsume Soseki 夏目漱石 『草枕』

English Translation A Three-Cornered World/ Unhuman Tour

Nagai Kafu 永井荷風 『墨東奇談』

English Translation: A strange Tale from East of the River

Akutagawa Ryunosuke 芥川龍之介 『蜘蛛の糸』、『地獄変』、『河童』

English Translation "The Spider's Thread"; "The Hell Screen" Kappa

Tanizaki Junichiro 谷崎潤一郎 『痴人の愛』、『夢喰う虫』

English Translation Naomi; Some Prefer Nettles

Mishima Yukio 三島由紀夫 『愛の渇き』、『憂国』

English Translation: Thirst for Love; "Patriotism"

Endo Shusaku 遠藤周作 『沈黙』

English Translation Silence

Noma Hiroshi 野間宏 『わが塔はそこに立つ』

(There Stands my Pagoda)

Oe Kenzaburo 大江健三郎 『新しい人よ眼ざめよ』

English Translation Rouse Up O Young Men of the New Age!

Murakami Haruki. 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

English Translation Hard-boiled Wonderland

General surveys of Japanese literature such as those by Donald Keene and Shuichi Kato will also provide good background information.

Grading Methods:

Reports

Sub Title:

The slow pace of economic reform

Course Description:

This course aims to help the student to understand the Japanese economic system, the style of economic regulations/deregulations and how the central/local government's involvement in many areas of the economy differs from other industrial nations. The lectures will (A) cover the contents of the text book, 'Arthritic Japan' which is useful in explaining the postwar Japanese economic system and the problems the Japanese have been facing during the last decade, (B) show several illustrative videos and (C) survey some distinctively Japanese approaches to developing infrastructure and regulating industries. There will also be some special one-off guests who will talk about their experiences in dealing with regulations in the Japanese trade environment (all speeches will be given in English).

Text Books:

Edward, J. Lincoln, Arthritic Japan: the slow pace of economic reform, Brookings, 2001.
(Now available in Japanese translation (Nippon-hyoron-sha, 2004))

Reference Books:

Additional materials will be provided during some sessions as necessary.

Class Schedule per week:

(Subject to some changes):

Session 1 guidance and introduction

Session 2-4 the Japanese postwar economic system and related theories

Session 5-6 industrial policy and government involvement in the economy

Session 7-8 the bubble economy and macroeconomic policies

Session 9 the arguments about the current "structural reform" issue

Session 10-11 Japanese society, its traditions, structure and implications for the economic system

Session 12-13 problems (in topics) with regard to current systemic economic reform and deregulation

Message to those taking this Course:

The students who will attend this course do not need to have more than a basic knowledge of economics, but they are expected to have a general interest in the Japanese economy in all its aspects. Quite often the lecturer will give the students copies of journal articles (such as those from the Japan Times) as supplementary materials. The students will discuss these during the sessions. Sometimes the lecturer will ask the students to submit specific essays based on some of these articles or the videos shown in the lectures.

Grading Methods:

Evaluation will be carried out by (A) essays which will be submitted after the course ends and (B) essays submitted during some sessions based on articles provided.

Questions, Requests

The lecturer's contact address is noriko@fbc.keio.ac.jp

Sub Title:

'Amae' Reconsidered

Course content:

This course is designed to reconsider comprehensively the concept of 'Amae' which was first introduced as a key concept for understanding Japanese psychology by Dr. Doi, as the Japanese society itself has undergone a considerable change under the influence of the globalization since then, and because there has been the accumulated theoretical, speculative or empirical research including cross cultural one which shows the existence of *Amae* outside of Japan. Therefore, this course will explore answers to the following questions: 1) is *Amae* still a key concept for understanding Japanese psychology?, 2) how the expression and satisfaction of *Amae* needs is transformed in contemporary Japan, 3) to what extent and in what form *Amae* is found among people across cultures, and 4) what kind of challenges and/or benefits this Japanese concept can give to those people who do not find the exact equivalent in their mother tongues.

Textbooks:

no designated textbook and handouts will be distributed.

References:

The Anatomy of Dependence by Takeo Doi, Kodansha International, .1973.

The Anatomy of Self by Takeo Doi, Kodansha International, 1986.

Dependency and Japanese Socialization by Frank A. Johnson, New York University Press, 1993.

Course schedule:

1. Orientation to the course and the drawing task of "my relationship with my mother in my childhood"
2. Multiple definitions of *Amae*
3. Understanding *Amae* through visual images: comparison of 'Peanuts' and 'Doraemon'
4. Healthy *Amae* Interaction: mutuality and reciprocity in Japanese social relationships
5. Transformation of *Amae* in contemporary Japanese companies
6. Transformation of *Amae* in contemporary Japanese families seen through empirical research
7. Transformation of *Amae* in contemporary Japanese families seen through children's drawings of meals and HTP test
8. Cross cultural empirical research on *Amae*
9. An American expatriate's response to *Amae* interaction in Japan
10. *Amae* in cross cultural counseling cases in Japan
11. Functions of healthy *Amae*: social support?
12. *Amae* and Aggression from cross cultural perspectives
13. What do foreigners gain by learning about the concept of *Amae* contribute to peoples
14. Wrap-up session

Messages to students:

Those students who are willing to participate actively in class are most welcome. Students are strongly encouraged to engage actively in pair work, a small group discussion and class discussion. Students are expected to complete reading assignment before coming to class.

Evaluation:

Overall grade will be based on attendance, homework, essays, participation in class, and final term paper.

Questions and consultation:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or through e-mail at ctezuka@ic.keio.ac.jp.

日本の宗教：救済の探求

(秋学期 X Fall)

RELIGIONS IN JAPAN: IN SEARCH OF SALVATION

ナコルチェフスキー, アンドロイ

文学部助教授

Andrei Nakortchevski

Associate Professor, Faculty of Letters

Course Description:

In this course I would like to introduce main religious teachings existed in Japan from old times and up to our days. For the reason the name of the course is specified purposely as "Religions in Japan" and not as "Japanese Religions." Otherwise we have to limit our discourse to the only genuine Japanese religion — Shinto and maybe some eclectic so called "new religions", and forget about Buddhism or Christianity.

Each of these religions will be presented in three aspects: dogmatic (the only exception will be done for Christianity and I will accent the peculiarity of a perception of this religion in Japan), historical and cultural. Dogmatic aspect means an introduction to the core postulates and their transformation over time. Historical aspect allows us to trace a destiny of a religious teaching in Japanese history, and cultural aspect implies a study of influences to and interactions with other spheres of cultural activities — art, literature, science, etc.

Besides the above mentioned aspects, the fourth theme, namely religion's promise to solve the individual's existential and social problems, will be constantly touched on in this course. From these theme derives the subtitle — "In Search of Salvation." Especially this aspect becomes important when we deliberate "new religions", including the notorious Aum Shinrikyo in particular.

About half of the lectures will be devoted to Buddhism as the most philosophically profound and variable teaching, but I would like to introduce not only institutionalized religion as Buddhism, Shinto, Christianity, as well as Taoism and Confucianism to some extension, but also the most interesting so called folk religions, for example, tradition of shugendou (mountain asceticism), different variants of shamanic practices, etc.

日本経済の展望

(秋学期)(Fall)

ECONOMIC SURVEY OF CONTEMPORARY JAPAN

市川博也

国際センター講師 (上智大学教授)

Hiroya Ichikawa

Lecturer, International Center (Professor, Sophia University)

Course Description:

An advanced applied course of economics concerning the contemporary Japanese economy. The course will examine the roots of the instability of the present financial system and critically examine the Japan Model, which once was used to explain the success of the Japanese economy in the postwar period. This examination includes discussion of the legacy of wartime control and debates over the East Asia Miracle. Problems related to the aging population, social security, the burden of government debt, competition policy, deregulation (including the financial big bang), corporate governance, government-business relations, trade disputes, foreign direct investment, ODA policy, environmental issues, and the role of Japan in the world will be discussed. Students are required to read economic and financial news every day for class discussion.

Text Books:

Takafusa Nakamura "The Postwar Japanese Economy" University of Tokyo Press, 1995

Class Schedule per week:

1. Introduction
Identify major economic problems facing Japanese economy.
2. Discuss Paul Krugman "The Myth of Asia's Miracle" *Foreign Affairs*, November/December 1994.
3. Discuss Takafusa Nakamura "The Postwar Japanese Economy," chapter 2. "Reform and Reconstruction" University of Tokyo Press. 1995.
4. Discuss chapter 3 "Rapid Growth" in Takafusa Nakamura "The Postwar Japanese Economy"
5. Discuss "The Mechanism and Policies of Growth"
See Nakamura chapter 4.
6. Discuss the dual structure: Labor, Small Business, and Agriculture" Richard Katz, "Japanese Phoenix-the long road to economic Revival", M.E. Sharp. 2003.
chapter 3 "Overcoming the dual economy — backward sectors are the key to Japan's revival".
chapter 4 "Overcoming Anorexia — the labours Sisyphus —"
See Nakamura chapter 5.
7. Discuss "The End of Rapid Growth" See Nakamura Chapter 6.
8. Discuss Japanese Economy and International Environment
Richard Katz, chapter 9 "Globalization — the Linchpin of Reform-"
chapter 11 "Foreign Direct Investment — A Sea Change —".
See Nakamura chapter 7.
9. Discuss "The Collapse of the Bubble Economy" Thomas F. Cargill, Michael M. Hutchinson, Takatoshi Ito, "The political Economy of Japanese monetary Policy,"
chapter 5 "The Bubble Economy and its Collapse"
chapter 6 "Asset-Price Deflation: Nonperforming Loans, Usen Companies, and Regulatory Inertia." The MIT Press. 1997
Richard Katz, chapter 12. "Financial integration — The Iceberg Cracks —".
See also Nakamura chapter 8.
10. Restoring Japan's Economic Growth
chapter 1 "Diagnosis: Macroeconomic Mistakes, Not Structural Stagnation"
chapter 2 "Fiscal Policy Works When it is tried".
chapter 3 "The Short and Long of Fiscal Policy" in Adam S. Posen, Restoring Japan's Economic Growth, Institute for International Economics, 1998.
Richard Katz, chapter 6 "Fiscal dilemmas," chapter 7 "Monetary magic bullets are blanks", chapter 8 "Japan cannot export its way

out”.

Richard Katz, chapter 13 “What is structural reform?” chapter 14 “Financial reform” chapter 15 “Corporate Reform-No competitiveness without more competition”.

11. Discuss Financial and International Risks and Inflation Target.
Chapter 4. “Mounting Downside Risks: Financial and International”
Chapter 6. Recognizing a mistake, not blaming a model” in Adam S Posen.
12. Can Japan Compete?
Chapter 2. “Challenging the Japanese Government Model”
Chapter 3. “ Rethinking Japanese Management”,
Chapter 5. “ How Japan can Move Forward: The Agenda for Government”
Chapter 6. “Transforming the Japanese Company” Michael E. Porter, Hirotaka Takeuchi & Mariko Sakakibara, “Can Japan Compete?” Macmillan Press Ltd. 2000
Richard Katz, chapter 16 “Competition policy — Not enough competition, even less policy”.
13. Deregulation and state enterprises, Tax reform Richard Katz, chapter 18 “deregulation and state enterprises — The Moment is Clear, the destination is not.”
Chapter 19. “Tax Reform — Don’t Exacerbate Anorexia”.

Message to Those Taking This Course:

Basic knowledge of Microeconomics & Macroeconomics prerequisite.
High proficiency in English required: TOEFL (PB)550+ (CB)213+

Evaluation:

Class Participation (Active Discussion) + Essay + Term Examination

家族の近代

(秋学期)(Fall)

THE FAMILY IN HISTORICAL PERSPECTIVE

ノッター , デビッド 経済学部助教授

David M. Notter Associate Professor, Faculty of Economics

Course Description:

In this course we will examine the family in historical and sociological perspective. The emphasis will be on “modern” family arrangements in nineteenth- and twentieth-century America, but some consideration will also be given to the family in Japan and Europe, and modern family arrangements will also be compared and contrasted with traditional family arrangements. The course will be organized thematically in accordance with the stages of the life course: childhood; adolescence; marriage; and old age.

Text Books:

Family: The Making of an Idea, an Institution, and a Controversy in American Culture by Betty G. Farrell

Grading Methods:

Evaluation will be based on attendance, participation in formal class discussions, essays, and a final paper.

日本の金融ビッグバン

(春学期)(Spring)

FINANCIAL DEREGULATION (BIG BANG) IN JAPAN

ハリス , グレアム O.B.E. 商学部非常勤講師

Graham Harris O.B.E. Part-time Lecturer, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

In this class we will study the role of foreign and Japanese financial institutions in Japan including banks, securities and insurance companies. We will evaluate the Big Bang changes and ascertain whether or not they are achieving their purpose.

Text Books:

Current materials will be used.

Class Schedule (Subject to change):

Big Bang deregulatory changes, together with the general turmoil in the financial markets are creating new opportunities for both foreign

and Japanese institutions. Existing companies are having to modify their strategies and new financial companies are being established — many basing their business model on the Internet.

We will examine these opportunities, separate the real from the imaginary and discuss the currents and future effect that foreign financial institutions are having on the Japanese financial scene.

We will also include topics such as the Japanese Post Office; accountancy changes leading to more corporate disclosure and transparency; and the government/FSA involvement in the continuing deregulation process.

Evaluation:

Students will be evaluated on the basis of attendance, class participation, essays, and oral presentation

ジャパニーズ・エコノミー

(春学期)(Spring)

JAPANESE ECONOMY

小島 明

商学研究科教授

Akira Kojima

Professor, Graduate School of Business and Commerce

Course Description:

Japan's Economic Performance and policy debate in post war period up to now is covered with global economy perspective. Issues such as management practices, financial big-bang, foreign direct investment (FDI), bad loan problems, exchange rate, system reforms are all discussed with preferably active participation of students. Students can have real exposure to the most current policy debate amongst special through Video and Tapes etc.

Recommended Readings:

“Japan's Policy Trap Dollars, Deflation and the Crisis of Japanese Finance”, by Akio Mikuni and R. Taggart Murphy. (Brookings Institution Press, 2002)

“Balance Sheet Recession Japan's Struggle with Uncharted Economics and its global implications”, by Richard C, Koo, 2003 John Wiley & Sons Pte Ltd.

Message to Those Taking This Course:

Active participation by students strongly desired.

Evaluation:

Report and in-class exam

ECONOMY OF JAPAN

吉野 直行

経済学部教授

Naoyuki Yoshino

Professor, Faculty of Economics

Course Schedule per week (Subject to Change):

「Economy of Japan」

1. Historical fluctuations of Japanese Economy and the Monetary Policy
2. Flow of Funds Table of Japanese Economy
(Government Sector, Financial Sector, Firm Sector, Households' Sector)
3. Monetary Policy of Japan, Asset Price Inflation and Recent Recession
4. Fiscal Policy of Japan, Budget Deficits
5. Industrial Policy of Japan, Tax Policy and Fiscal Investment Policy
6. Capital Market of Japan (Bond market, equity market)
7. Bank Failures and Bank Restructuring
8. Aging population of Japan and Its impact on Japanese Economy
9. Privatization of Postal Savings and Japanese Financial Market
10. Currency Crisis of Asia, Its causes and consequences
11. Exchange Rate Policy of Asia and Optimal Exchange Rate System
12. Effectiveness of Public Works in Japan and Revenue Bond
13. Central and Local Government Relations in Japan
14. Japanese Policy Making and Incentive Mechanism
15. Final Examination

科学技術文化特論

(秋学期) (Fall)

SCIENCE, TECHNOLOGY AND CULTURE

ドゥウルフ, チャールズ

理工学部教授

Charles De Wolf

Professor, Faculty of Science and Technology

Course Description:

The leitmotif of this course is the question of how our perceptions of and approaches to science are influenced both by the Zeitgeist and by the particular culture in which we have grown up. How, for example, is the "evolution controversy" in America a peculiarly "American" phenomenon? How is it that Japanese scientists and engineers appear to be (on the whole) remarkably indifferent to ideological issues? Other topics include: (1) What is a proper or possible subject of scientific inquiry. To what extent, for example, can the study of language be considered "scientific"? (2) What is the appropriate role of scientists in matters political and social? In addition to the primary goals discussed above, it is hoped that this course will enable non-Japanese students to have a better understanding of Japanese history and culture through a cross-cultural approach to the philosophy of science. Students are strongly encouraged to participate actively, discussion being preferred to "lecturing."

Texts:

Materials to be distributed by instructor

Recommended Readings:

To be announced

Class Schedule (Subject to change)

1. Words for science: the concept of science in historical and cultural perspective
2. "Hard sciences" vs. "Soft sciences"
3. Linguistic science I: an historical overview
4. Linguistic science II: How "scientific" is linguistics?
5. Science and culture
6. Science and ideology
7. Science vs. scientism

- 8.The evolution debate in cross-cultural perspective
- 9.Science in Japan: an historical overview
- 10.Science and technology: science vs. technology
- 11.The role of the scientist in society: a cross-cultural persepective
- 12.Loose ends

Evaluation:

Attendance and participation are most important.

知的資産センター設置講座（平成 17 年度開講）

1. 知的資産センター設置講座開講にあたり

慶應義塾大学では、研究成果の社会への還元を、教育・研究と並ぶ大学の使命と考えています。そして、「慶應義塾で生れた研究成果は義塾にとって貴重な知的資産であり、大学はこれら知的資産の保護と活用を積極的に促進・支援する」という理念を公表しています。

こうした方針に基づき、知的資産センターは慶應義塾で生れた研究成果を社会へ還元するために、慶應義塾大学の技術移転機関として 1998 年 11 月に設立されました。技術に関するものだけでなく、電子メディアを始めとして広汎な研究成果を対象とするとともに、新しい事業の創出に資するという意味をこめて「知的資産センター」と名付けられました。

知的資産センターの事業は、研究成果の特許保護、技術の移転、起業の支援と拡大しています。そして、教職員の熱意と高いポテンシャルをもった研究成果に支えられ、既に数多くの慶應義塾の特許出願が生まれ、技術移転も活発化し、多くの新製品を生み出しています。さらに、バイオ分野を中心にベンチャー企業のスタートアップも相次いでいます。

また、知的資産センターは技術移転に密接に関係する知的財産に関する教育・研究も任務としています。

情報技術の劇的な革新に伴い電子メディア、ビジネスモデル特許に代表されるように、知的財産は社会のあらゆる分野に密接に関係してきました。こうした時代の変化に対応していくためには、専攻分野に係わらず知的財産に関する幅広い知識と理解が求められています。

そこで、知的財産に関する教育の一貫として、全学部の学生を対象として知的財産全般について基本的な事項の理解を図るため、設置講座を開設しました。

2. 設置科目、履修上の取扱いについて

今年度は「知的資産概論」の 1 科目を、春学期三田キャンパスで開講します。

授業時間は 18:10~19:40、単位は 2 単位です。その他授業に関する情報は、三田掲示板、<http://www.ipc.keio.ac.jp> でお知らせします。

受講を希望する場合は、履修の取扱いについて各学部、研究科の履修案内で確認の上、各学部窓口で履修申告をしてください。

3. 講義要綱

知的資産概論 ―知的財産の保護と活用をめぐる課題―
(ナテグリニド特別講座)

知的資産センター所長（商学部教授）清水 啓 助

授業科目の内容：

研究活動や創造活動の成果を知的財産として、戦略的に保護・活用し、我が国産業の国際競争力を強化するという国家戦略が策定され、知的財産に対する関心は高まっています。知的財産には、技術（特許）、デザイン（意匠）、ブランド（商標）、音楽・映画のコンテンツ（著作権）といったものがあり、権利の内容や活用法はそれぞれ固有な特色があります。本講義では、代表的な知的財産の権利保護・活用における現状と課題についての理解を深め、知的財産に関する幅広い知識を得ることを目標とします。

テキスト：

講義資料を配布します。

参考書：

「知的創造時代の知的財産」 清水啓助他著、慶應義塾大学出版会

「特許がわかる12章」 竹田著 ダイアモンド社

「著作権の考え方」 岡本著 岩波新書

授業の計画：

- 1 知的財産の新たな時代
- 2 特許の仕組み

- 3 著作権の仕組み
- 4 商標ブランドの価値
- 5 マルチメディアに関する知的財産
- 6 キャラクタービジネス
- 7 音楽に関する著作権問題
- 8 企業における知的財産戦略
- 9 知的財産に関する世界の動向
- 10 知的財産の紛争処理
- 11 ベンチャー・起業の仕組み
- 12 知的財産ビジネス
- 13 技術の移転

なお、講義は外部講師を含め、オムニバス形式で行います。

履修者へのコメント：

積極的に学ぶ意欲を持つ学生を歓迎します。

単位の取扱については、学部により異なりますので注意してください。

成績評価方法：

平常点及びレポートによる評価

質問・相談：

授業の最後に質問の時間を設けます。

関 係 規 程 抜 粹

法学研究科在籍者に特に関わりの深い規定について抜粹してありますので、履修要項と合わせて参照してください。奨学金，授業料減免，留学等を申請する時には，できる限り指導教授と相談してください。なお，大学院学則については，入学時に配布する慶應義塾大学大学院学則を参照してください。

〈1 学 位〉

- 1-1 学位規程（抜粹）
- 1-2 学位の授与に関する内規

〈2 奨 学 金〉

- 2-1 大学院奨学規程
- 2-2 小泉信三記念大学院特別奨学金規程
- 2-3 小泉信三記念大学院特別奨学金規程細則

〈3 授業料減免〉

- 3-1 授業料等減免規程
- 3-2 留学期間中の学費の取り扱いに関する規程

〈4 そ の 他〉

- 4-1 大学院在学期間延長者取扱い内規
- 4-2 大学院在学期間延長者並びに年度途中の修了者に対する在学料
その他の学費に関する取扱い内規

学位請求論文製本表紙見本

1 学 位

1-1 学位規程（抜粋）

昭和31年2月17日制定
平成13年12月7日改正

第1条（目的） 本規程は、慶應義塾大学学部学則及び大学院学則に規定するもののほか、慶應義塾大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

第2条（学位） 本大学において授与する学位は次の通りとする。

1 学 士

文 学 部

人文社会科学

哲学専攻	学士（哲学）
倫理学専攻	学士（哲学）
美学美術史学専攻	学士（美学）
日本史学専攻	学士（史学）
東洋史学専攻	学士（史学）
西洋史学専攻	学士（史学）
民族学考古学専攻	学士（史学）
国文学専攻	学士（文学）
中国文学専攻	学士（文学）
英米文学専攻	学士（文学）
独文学専攻	学士（文学）
仏文学専攻	学士（文学）
図書館・情報学専攻	学士（図書館・情報学）
社会学専攻	学士（人間関係学）
心理学専攻	学士（人間関係学）
教育学専攻	学士（人間関係学）
人間科学専攻	学士（人間関係学）

経済学部

法 学 部

商 学 部

医 学 部

理工学部

機械工学科	学士（工学）
電子工学科	学士（工学）
応用化学科	学士（工学）
物理情報工学科	学士（工学）
管理工学科	学士（工学）
数理科学科	
数学専攻	学士（理学）
統計学専攻	学士（工学）
物理学科	学士（理学）
化 学 科	学士（理学）
システムデザイン工学科	学士（工学）
情報工学科	学士（工学）
生命情報科	学士（理学）又は 学士（工学）
総合政策学部	学士（総合政策学）
環境情報学部	学士（環境情報学）
看護医療学部	学士（看護学）

2 修 士

文学研究科

哲学・倫理学専攻	修士（哲学）
----------	--------

美学美術史学専攻	修士（美学）
史学専攻	修士（史学）
国文学専攻	修士（文学）
中国文学専攻	修士（文学）
英米文学専攻	修士（文学）
独文学専攻	修士（文学）
仏文学専攻	修士（文学）
図書館・情報学専攻	修士（図書館・情報学）
経済学研究科	修士（経済学）
法学研究科	修士（法学）
社会学研究科	
社会学専攻	修士（社会学）
心理学専攻	修士（心理学）
教育学専攻	修士（教育学）
商学研究科	修士（商学）
医学研究科	
医科学専攻	修士（医科学）
理工学研究科	
基礎理工学専攻	修士（理学）又は 修士（工学）
総合デザイン工学専攻	修士（理学）又は 修士（工学）
開放環境科学専攻	修士（工学）
経営管理研究科	修士（経営学）
政策・メディア研究科	
政策・メディア専攻	修士（政策・メディア）

3 博 士

文学研究科

哲学・倫理学専攻	博士（哲学）
美学美術史学専攻	博士（美学）
史学専攻	博士（史学）
国文学専攻	博士（文学）
中国文学専攻	博士（文学）
英米文学専攻	博士（文学）
独文学専攻	博士（文学）
仏文学専攻	博士（文学）
図書館・情報学専攻	博士（図書館・情報学）
経済学研究科	博士（経済学）
法学研究科	博士（法学）
社会学研究科	
社会学専攻	博士（社会学）
心理学専攻	博士（心理学）
教育学専攻	博士（教育学）
商学研究科	博士（商学）
医学研究科	博士（医学）
理工学研究科	
基礎理工学専攻	博士（理学）又は 博士（工学）
総合デザイン工学専攻	博士（理学）又は 博士（工学）
開放環境科学専攻	博士（工学）
経営管理研究科	博士（経営学）
政策・メディア研究科	
政策・メディア専攻	博士（政策・メディア）

② 前項第3号に定めるほか博士（学術）の学位を授与することができる。

③ 第5条に定める者には、学位論文を提出した研究科に応じ第1項第3号の学位を授与する。

第2条の2（学士学位の授与要件） 学士の学位は、大学を卒業した者に与えられる。

第3条（修士学位の授与要件） 修士の学位は、大学院前期博士課程を修了した者に与えられる。

第4条（課程による博士学位の授与要件） 博士の学位は、大学院博士課程を修了した者に与えられる。

第5条（論文による博士学位の授与要件） 博士の学位は、研究科委員会の承認を得て学位論文を提出して論文の審査に合格し、かつ大学院博士課程の修了者と同等以上の学識があることを確認（以下「学識の確認」という）された者に与えられる。

第6条（学識の確認の特例） ① 大学院博士課程における教育課程を終え、学位論文を提出しないで退学した者のうち、退学の日から起算して研究科委員会が定める年限以内に論文による博士学位を申請した者については、研究科委員会が適当と認めた場合、学識の確認の一部若しくはすべてを行わないことができる。

② 学位論文以外の業績及び経歴の審査によって、研究科委員会が学識の確認の一部若しくはすべてを行う必要がないと認めた場合には、当該審査をもって学識の確認の一部若しくはすべてに代えることができる。

第7条（課程による学位の申請） ① 第3条の規定に基づき修士学位を申請する者は、学位論文3部を指導教授を通じて当該研究科委員会に提出するものとする。

② 第4条の規定に基づき博士学位を申請する者は、学位申請書に学位論文3部及び所定の書類を添え、指導教授を通じて当該研究科委員会に提出するものとする。

第8条（論文による学位の申請） 第5条の規定に基づき博士学位を申請する者は、学位申請書に学位論文3部及び所定の書類を添え、その申請する学位の種類を指定して、学長に提出しなければならない。

第9条（審査料） 第5条の規定に基づき博士学位を申請する者に対する審査料は、次の通りとする。

- 1 本大学大学院博士課程の教育課程を終え学位論文を提出しないで退学した者 50,000円
- 2 本大学学士又は修士の学位を与えられた者で前号の定め以外の者 70,000円
- 3 第1号・第2号のいずれにも該当しない者 100,000円
- 4 本塾専任教職員である者 20,000円
(医学研究科については40,000円)

第10条（審査並びに期間） ① 修士及び博士の学位論文の審査並びにこれに関連する試験等の可否は、当該研究科委員会が判定する。

② 博士の学位論文の審査並びにこれに関連する試験及び学識の確認等は、論文受理後1年以内に終了するものとする。

第11条（審査委員会） 研究科委員会は、学位論文の審査並びにこれに関連する試験等を行うために、関係指導教授及び関連科目担当教授2名以上から成る審査委員会（主査及び副査）を設置しこれに当たらせる。ただし、必要がある場合は助教授又は専任講師・講師（非常勤）等を特に審査委員会に加えることができる。

第12条（審査結果の報告・判定方法） ① 審査委員会は、論文審査の要旨並びに試験の成績等を記録して研究科委員会に報告し、かつ、その意見を開陳する。

② 研究科委員会は、委員の3分の2以上の出席により成立し、その3分の2以上の賛同をもって学位論文の審査並びに試験の可否を決定する。

③ 前項の議決は、無記名投票をもって行う。

第13条（学位授与） 研究科委員会において学位論文の審査並びに試験に合格した者に対し、学長は当該研究科委員会の報告に基づき学位を授与する。

第14条（学位論文要旨の公表） 本大学は博士の学位を授与したとき、当該博士の学位を授与した日から3月以内にその論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

第15条（学位論文の公表） 博士の学位を授与された者は、当該博士の学位の授与を受けた日から1年以内にその論文を印刷公表し「慶應義塾大学審査学位論文」と明記するものとする。ただし、学位の授与を受ける前にすでに印刷公表したときはこの限りではない。

第16条（学位の表示） 学位の授与を受けた者が学位の名称を用いるときは、学位の後にこれを授与した本大学名を「(慶應義塾大学)」と付記するものとする。

第17条（学位の取消） 不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したとき、又は学位を得た者がその名誉を汚辱する行為があったときは、当該研究科委員会及び大学院委員会の議を経てその学位を取消するものとする。

第18条（学位記及び書類） 学位記及び学位授与申請関係書類の様式は、別表の通りとする。

第19条（規程の改廃） この規程の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。ただし、第2条第1項第1号及び第2条の2については大学評議会の議を経てこれを行う。

附 則

- ① この規程は平成14年4月1日から施行する。
〔以下省略〕

1-2 学位の授与に関する内規

昭和59年3月16日制定

平成12年5月16日改正

第1条 慶應義塾大学学位規程第13条（学位授与）に関する取扱いは、この内規の定めるところによる。

第2条 論文博士の学位授与及び博士課程単位修得退学者で再入学しない者に対する課程博士の学位授与に関しては、次の通り行うものとする。

1 学位授与日は、研究科委員会の議決日とする。

2 研究科委員会が学位論文審査合格を議決した日以降、「学位取得証明書」を発行できるものとする。

3 学位の授与手続きは、次の通りとする。

イ 研究科委員会の可否判定議決に基づき、研究科委員長はその結果を速やかに学長に報告する。

ロ 学長は、研究科委員長の報告に基づき合格者に学位を授与する。

4 学位記は、学位授与式において授与する。

第3条 修士の学位授与及び博士課程に在学している者に対する課程博士の学位授与に関しては、前第2条第3号と同様の手続きを経て当該年度末（3月23日）をもって学位を授与する。

② 前項の規定にかかわらず、修士課程においてあらかじめ研究科委員会の承認を得て、学位論文を提出締切期日までに提出せず次年度も引続き在学している者が、研究科委員会の特に認めた期日までに学位論文を提出し課程修了を認定された場合には、春学期末日をもって学位を授与することができる。

③ 第1項の規定にかかわらず、後期博士課程（医学研究科に

あつては博士課程)に在学する者で、大学院学則第109条第3項のただし書(医学研究科については同条第4項のただし書)の適用を受け、春学期末日をもって課程修了を認定された場合には、当該春学期末日をもって学位を授与することができる。

- ④ 前項の規定にかかわらず後期博士課程(医学研究科にあつては博士課程)に在学する者で、大学院学則第109条第3項のただし書(医学研究科については同条第4項のただし書)の適用を受け、在学する年度途中において特に課程修了を認定された場合には、認定された日をもって学位を授与することができる。
- ⑤ 第1項の規定にかかわらず、「大学院在学期間延長者取扱い内規」により在学する者が、春学期末日をもって課程修了を認定された場合には、当該第1学期末日をもって学位を授与することができる。
- ⑥ 前項の規定にかかわらず、「大学院在学期間延長者取扱い内規」により在学する者が、在学する年度途中において、特に課程修了を認定された場合には、認定された日をもって学位を授与することができる。
- ⑦ 学位記は、学位授与式において授与する。

第4条 学長は、学位を授与した者の氏名その他必要事項を取りまとめて、年2回大学院委員会の各委員に報告しなければならない。

第5条 この内規の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。

附 則 (平成8年3月8日)

第1条 この内規は、平成12年4月1日から実施する。

第2条 この内規の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。

2 奨学金

2-1 大学院奨学規程

平成2年4月13日制定

平成10年4月21日改正

第1章 総 則

第1条 (根拠) 慶應義塾大学は、大学院学則第16節奨学制度に基づき、貸費及び給費の奨学制度を置く。

第2条 (奨学金の種類・金額) ① 奨学金の種類は、次の通りとする。

- 1 貸費奨学金(無利子) 修士課程(前期博士課程)学生対象(但し、外国人留学生を除く。)
- 2 給費奨学金 後期博士課程(以下「博士課程」という。)学生、医学研究科博士課程学生、私費外国人留学生対象
- ② 前項に定める奨学金の年額は、次の通りとする。

- 1 文、経済、法、社会、商学研究科 400,000円
- 2 医学、経営管理研究科 600,000円
- 3 理工学、政策・メディア研究科 500,000円

第2章 貸 費 生

第3条 (資格) 貸費生の資格は、大学院修士課程の学生(但し、外国人留学生を除く。)とし、次の条件を備えていなければならない。

- 1 研究の意欲を持ち、経済的に修学が困難であること。
- 2 学業成績・人物共に優秀で健康であること。

3 原則として、修士課程1年生であること。

第4条 (期間) 貸費の期間は、大学院学則に定める修士課程標準修業年限の2か年とする。但し、修士課程2年生が貸費生に採用された場合は、1か年とする。

第5条 (申請) 貸費を受けようとする者は、所定の申請書に学業成績証明書、健康診断書及び連帯保証人等の所得証明書を添えて、学生総合センターに申請するものとする。

第6条 (選考) 貸費生は、第3条の条件により選考する。

第7条 (決定) 前条による選考は、別に定める大学院奨学委員会(以下「委員会」という。)において行い、塾長がこれを決定する。

第8条 (家計急変者に対する救済措置等) 天災その他の災害及び家計支持者の死亡、失職等のため家計が急激に変化し、学費の納入が困難になった者等若干名については、第3条第3号の規定にかかわらず、貸費生として追加採用することができる。

第9条 (誓約書) 貸費生として決定された者は、所定の誓約書を連帯保証人と連署の上、学生総合センターに提出しなければならない。

第10条 (身分等変更の届出) 貸費生は、次の各号に該当する場合は、直ちに学生総合センターに届け出なければならない。但し、本人の病気・死亡などの場合は、連帯保証人が代わって届け出なければならない。

1 休学、留学、就学、退学

2 本人及び連帯保証人の氏名、住所、その他重要事項の変更

第11条 (貸与の休止) 委員会は、貸費生が休学・留学した場合、その間貸費生の資格を休止することができる。

第12条 (貸与の復活) 前条の規定により貸費生の資格を休止された者が、休止の理由となったものが消滅した場合、委員会は、申請により貸与を復活することができる。但し、休止された時から3か年を経過したときは、この限りではない。

第13条 (失格) 委員会が次の各号により不適格と認めた場合、貸費生はその資格を失う。

1 大学院学則に基づく退学、停学の場合

2 申請書及び提出書類の記載内容に虚偽があった場合

3 正当な理由がなく第10条に定める届け出を怠った場合

4 その他貸費生として不適当と認められた場合

第14条 (貸与の辞退) 貸費生は、いつでも貸与を辞退することができる。この場合には、連帯保証人と連署の届出書を、学生総合センターに提出しなければならない。

第15条 (貸与金借用証書の提出) 貸費生が次の各号に該当する場合は、貸与金借用証書に貸与金返還総額等を記載し、連帯保証人及び保証人と連署の上、学生総合センターに提出しなければならない。連帯保証人及び保証人の使用する印鑑については、印鑑証明を必要とする。

1 貸与期間が満了した場合

2 貸与を期間中に辞退した場合

3 第13条による失格の場合

第16条 (貸与金の返還) ① 貸与金の返還は、原則として貸与が終了した年の12月から毎年1回の年賦とし、貸与年数の4倍の年数以内に全額を返還するものとする。但し、貸与金はいつでも繰り上げ返還することができる。

② 第13条による失格者については、貸与金の全額を直ちに返還しなければならない。

第17条 (返還猶予) ① 貸費生であった者が次の各号に該当する場合には、委員会は、本人の申請により貸与金の返還を猶予することができる。

- 1 災害又は疾病により返済が困難となった場合
- 2 貸与期間終了後、引き続き修士課程に在学している場合
- 3 修士課程修了後、博士課程進学を目指している場合

② 前項の規定にかかわらず、委員会は、その理由が相当であると認めるときは、申請により貸与金の返還を猶予することができる。

③ 返還猶予期間は1か年とするが、返還猶予の理由が存続する場合は、第1項第3号に基づく場合を除いて、申請により1年ごとに延長することができる。但し、原則として3か年を越えて延長することはできない。

第18条（返還免除） ① 貸費生であった者が次の各号に該当する場合には、委員会は、本人又は連帯保証人の申請により、貸与金の全部又は一部の返還を免除することができる。

1 博士課程に進学し、学位を取得した場合、あるいは博士課程に3か年以上在学して所定の単位を取得し退学した場合。但し、博士課程を途中で退学した者については免除を認めない。

2 貸与金返還完了前に死亡した場合。この場合には、連帯保証人又は相続人は、死亡時から6か月以内に、貸与金返還免除申請書を、死亡診断書又は戸籍抄本を添えて、学生総合センターに提出しなければならない。

② 前項の規定にかかわらず、委員会は、その理由が相当であると認めるときは、申請により貸与金の全部又は一部の返還を免除することができる。

第3章 給費生

第19条（資格） 給費生の資格は、大学院博士課程学生及び私費外国人留学生とし、次の条件を備えていなければならない。

- 1 研究の意欲を持ち、経済的に修学が困難であること。
- 2 学業成績・人物共に優秀で健康であること。

第20条（期間） 給費の期間は、1か年とする。引き続き給費を希望する場合、再申請は妨げないが、3か年（医学研究科は4か年）を超えて給費を受けることはできない。

第21条（申請） 給費を受けようとする者は、所定の申請書に、学業成績証明書、健康診断書及び連帯保証人等の所得証明書を添えて、学生総合センターに申請するものとする。

第22条（選考） 給費生は、第19条の条件により選考する。

第23条（決定） 前条による選考は、委員会において行い、塾長がこれを決定する。

第24条（身分等変更の届出） 給費生は、次の各号に該当する場合は、直ちに学生総合センターに届け出なければならない。但し、本人の病気・死亡などの場合は、連帯保証人が代わって届け出なければならない。

- 1 休学、留学、退学
- 2 本人及び連帯保証人の氏名、住所、その他重要事項の変更

第25条（失格） 委員会が次の各号により不適格と認めた場合、給費生はその資格を失う。

- 1 大学院学則に基づく休学、退学、停学の場合
- 2 申請書及び提出書類の記載内容に虚偽があった場合
- 3 正当な理由がなく第24条に定める届け出を怠った場合
- 4 その他給費生として不適当と認められた場合

第26条（返還） ① 給費生が前条の規定により給費生としての資格を失った場合は、既にその年度に給付された金額の全部又は一部を返還しなければならない。委員会は、この場合の返還方法を、審査の上定める。

② 前項の規定にかかわらず、次の各号に該当する場合は、委員会は、申請により既に給付された奨学金の全部又は一部の返還を免除することができる。

- 1 死亡した場合
- 2 第25条第1号の規定により、給費生として資格を失った場合

第27条（事務） 本制度の運営事務は、学生総合センターの所管とする。

第28条（規定の改廃） この規程の改廃は、委員会の議を経て、塾長が行う。

附 則（平成10年4月21日）

- ① この規程は、平成10年4月1日から施行する。
- ② 平成3年3月31日以前の課程入学者については、旧・慶應義塾大学大学院奨学規程を適用する。
- ③ 平成10年4月1日以後の修士課程（前期博士課程）第1学年入学者については、本規程第3条から第18条を適用しない。
- ④ 平成10年4月1日以後の修士課程（前期博士課程）入学者を、本規程第2条第1項第2号及び第19条の対象に加えるものとする。

2-2 小泉信三記念大学院特別奨学金規程

昭和52年4月12日制定

昭和54年7月27日改正

平成14年5月1日改正

第1条 小泉信三記念奨学金規程第2条第1号に基づき、研究者の養成を目的として大学院に特別奨学金による奨学研究生を置く。

第2条 奨学研究生は、学部第4学年に在学し大学院への進学を志願する学生、または大学院に在学する学生の中から、これを選考する。

第3条 奨学研究生の選考は、各研究科委員会の推薦により、小泉基金運営委員会の議を経て学長がこれを決定する。

第4条 奨学研究生には特別奨学金として、月額30,000円を給付し、その期間は1年とする。ただし、審査の上、この期間を更新することができる。

第5条 この特別奨学金規程に関する事務は、研究助成センターが担当する。

第6条 この規程に関する細則は別に定める。

付 則

- ① この規程は、昭和52年4月1日から施行する。
- ② 現行小泉信三記念大学院特別奨学金規程は旧・小泉信三記念大学院特別奨学金規程とする。

附 則（平成14年5月1日）

この規程は、平成14年5月1日から施行する。

2-3 小泉信三記念大学院特別奨学金規程施行細則

昭和52年4月12日制定

昭和54年7月27日改正

平成14年5月1日改正

第1条 小泉基金運営委員会委員長は、毎年奨学研究生を公募する。

第2条 奨学研究生は、大学院に在学し、次に掲げる各号の条

件を備えていなければならない。

- 1 学業成績・人物共に優秀であること
- 2 将来、研究者たり得る資質ありと認められること
- 3 健康であること

第3条 奨学研究生を志望する者は、次の書類を整えて、保証人連署の上、研究助成センターに提出しなければならない。

- 1 願書
- 2 履歴書
- 3 成績証明書 大学学部1年から申請時までの成績証明書
- 4 健康診断書

第4条 各研究科委員会は、奨学研究生を志望した者について審議し、順位を付して小泉基金運営委員会に推薦しなければならない。

第5条 奨学研究生は、次の理由により身分に変更を生じた場合は、保証人連署の上、直ちに学長に届け出なければならない。

- 1 休学・復学・退学
- 2 本人及び保証人の身分・住所その他重要事項の変更。ただし、本人が病気・死亡等の場合は、保証人が代って届け出なければならない。

第6条 小泉基金運営委員会が、次の理由により不適格と認めた場合は、奨学研究生としての資格を失うものとし、すでに支給した奨学金の全部もしくは一部を返還させることがある。

- 1 この奨学金設定の趣旨に反し、かつ塾生としての本分にもとる行為があった場合
- 2 提出書類に虚偽の記載をした場合
- 3 正当な理由なく第5条に定める届け出を怠った場合

第7条 奨学研究生が退学した場合は、給付を打ち切るものとする。

付 則

- ① この細則は、昭和52年4月1日から施行する。
- ② 現行小泉信三記念大学院特別奨学金規程施行細則は旧・小泉信三記念大学院特別奨学金規程施行細則とする。

附 則（平成14年5月1日）

この細則は、平成14年5月1日から施行する。

3 授業料減免

3-1 授業料等減免規程

平成元年7月18日制定

平成11年11月26日改正

平成14年7月12日改正

第1条（目的） 慶應義塾大学は、疾病・傷害によって授業を長期にわたり休学している学部学生並びに大学院生で、経済上授業料等（大学院にあっては在学料等、以下授業料等という）の納入が著しく困難な学生に対し、審査のうえ、一定の期間授業料等を減免することが出来る。

第2条（対象） 減免を受けようとする者は、1年以上の長期にわたり入院又は通院している者並びに自宅療養をしている者で、休学の2年目以降の者でなければならない。

② 母国において兵役に就くために休学する者。この場合に限り1年目から減免する。

第3条（申請） 前条に該当する者が減免を申請する場合は、

所定の申請書に休学許可書、診断書並びに家計支持者の所得を証明する書類を添えて、学生総合センター長に提出しなければならない。

第4条（減免額） 減免を認められた者の減免額は、文科系学部・同大学院研究科については授業料等の半額、医学部・同大学院研究科、理工学部・同大学院研究科、総合政策学部、環境情報学部及び大学院政策メディア研究科及び看護医療学部については授業料等の半額及び実験実習費の半額とする。なお、総合政策学部、環境情報学部、大学院政策・メディア研究科及び法学部政治学科9月入学者は、休学期間が6か月毎のため減免額も半年分の半額とする。

② 正課又は課外活動中の事故による傷害で休学している場合、その事由を斟酌し、減免額を全額とすることができる。

第5条（審査） 第1条による審査は、大学学部生については大学奨学委員会、大学院生については大学院奨学委員会が行い、塾長が決定する。

第6条（減免の取消し） 休学者が虚偽の申請その他不正の方法で減免を受けた場合には、減免の措置を取り消すとともに、既に減免を受けた授業料等の全部又は一部を納入させることが出来る。

第7条（就学の届出） 休学者が就学した時は、速やかに書面をもってその旨学生総合センター長に届け出なければならない。

第8条（規程の改廃） この規程の改廃は、大学奨学委員会並びに大学院奨学委員会の議を経て、塾長が決定する。

第9条（所管） この規程の運営事務は、学生総合センターの所管とする。

附 則（平成14年7月12日）

この規程は、平成14年8月1日から施行する。

3-2 留学期間中の学費の取り扱いに関する規程

平成元年5月23日制定

平成2年4月1日施行

平成12年5月30日改正

第1条 慶應義塾大学学部学則第153条及び慶應義塾大学大学院学則第124条により外国の大学に留学する学生（以下留学生という）の学費に関する取扱いは、この規程の定めるところによる。

第2条 留学期間中の学費の取扱いは、次の通りとする。

- 1 留学の始まる日（以下留学開始日という）の属する年度の学費は納入するものとする。但し、留学の奨励を図るため、別に定めるところにより、留学に要する経費の一部を補助することがある。
- 2 留学の延長が認められ、その許可された延長期間が留学開始日から起算して1年6か月以上2年以内の場合は、留学開始日から1年を経過した日の属する年度の授業料（在学料）及び実験実習費の半額を免除する。
- 3 留学の再延長が認められ、その許可された延長期間が留学開始日から起算して2年6か月以上3年以内の場合は、留学開始日から2年を経過した日の属する年度の授業料（在学料）及び実験実習費の半額を免除する。

第3条 留学生が留学の許可を取り消された場合は、その間に免除した学費の一部又は全額を納入させることがある。

第4条 この規程の適用に当たり疑義を生じた場合は、その都度塾長が決定する。

第5条 この規程の改廃は、塾長がこれを決定する。

附 則（平成元年5月23日）

- ① この規程は、平成2年4月1日から施行する。
- ② この規程の制定により、昭和56年5月12日制定、同年4月1日施行の留学期間中の学費の取り扱いに関する規程は、これを旧・留学期間中の学費の取り扱いに関する規程とする。
- ③ この規程は、留学開始日が平成2年4月1日以降の者に適用する。
- ④ この規程の施行前、既に留学を許可され留学している者の学費については、旧・留学期間中の学費の取り扱いに関する規程を適用する。

附 則（平成12年5月30日）

この規定は、平成12年4月1日から施行する。

4 その他

4-1 大学院在学期間延長者取扱い内規

昭和59年3月16日制定

第1条 本塾大学大学院後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）において、当該課程修了要件のうち学位論文の審査並びに最終試験を除き所定の教育課程を終えた後、引続き博士学位取得のために在学する者の取扱いは、この内規の定めるところによる。

第2条 在学期間延長を希望する者は、指導教授の許可を得て研究科委員会に「在学期間延長許可願」を提出し、承認を得なければならない。

第3条 研究科委員会は、研究継続の必要性等在学を延長する充分な理由があると認め、かつ教育並びに研究に支障のない場合、大学院学則第128条に定める在学最長年限を超えない範囲で引続き1年間（4月1日～翌年3月31日）の在学を許可できるものとする。

第4条 在学期間延長者が延長期間終了後も引続き在学を希望するときには、新たに「在学期間延長許可願」を提出し、研究科委員会の承認を得なければならない。

第5条 学則定員その他の理由から延長が認められない場合は、大学院学則第153条に定める研究生として受け入れることができる。

付 則

第1条 この内規は、昭和59年4月1日から施行する。

第2条 この内規は、昭和58年度以降に医学研究科博士課程に入学した者並びに昭和60年度以降に後期博士課程に入学又は進学した者に適用する。

第3条 付則第2条の規定にかかわらず、博士課程所定単位修得退学者に対して課程による学位論文提出年限を「博士学位に関する内規」に沿って定めている研究科に在学する者については、昭和59年4月1日からこの内規を適用することができる。

第4条 この内規の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。

4-2 大学院在学期間延長者並びに年度途中の修了者に対する在学料その他の学費に関する取扱い内規

昭和59年3月30日制定

平成8年3月8日改正

第1条 本塾大学大学院において「学位の授与に関する内規」第3条第2項若しくは第3項により第1学期末日をもって課程修了する者の学費は、次の通りとする。

- 1 在学料（毎年）
大学院学則第131条に定める金額の2分の1に相当する額
- 2 施設設備費（毎年）
大学院学則第131条に定める金額
- 3 実験実習費（毎年）
大学院学則第132条に定める金額

第2条 本塾大学大学院後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）において「大学院在学期間延長者取扱い内規」による在学期間延長者の学費は、次の通りとする。

- 1 在学料（毎年）
大学院学則第131条に定める金額の4分の3
- 2 施設設備費（毎年）
免除
- 3 実験実習費（毎年）
大学院学則第132条に定める金額

② 在学期間延長者が「学位の授与に関する内規」第3条第4項および第5項により年度途中の日をもって課程修了する場合の在学料は、その課程修了の日が第1学期末日までの者に限り前項に定める金額の2分の1に相当する額。

第3条 「大学院在学期間延長者取扱い内規」第5条による研究生は、大学院学則第153条第2項に定める登録料を免除し、初年度に限り選考料を徴収しない。

附 則

第1条 この内規は、平成8年4月1日から施行する。

第2条 この内規の修士課程に係る本則第1条については、昭和59年4月1日から適用する。

第3条 この内規の後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）に係る本則第2条及び第3条については、昭和58年度以降に医学研究科博士課程に入学した者並びに昭和60年度以降に後期博士課程に入学又は進学した者に適用する。

② 前項の規定にかかわらず、博士課程所定単位修得退学者に対して課程による学位論文提出期限を「博士学位に関する内規」に沿って定めている研究科に在学する者については、昭和59年4月1日からこの内規を適用することができる。

第4条 この内規の改廃は、塾長が決定する。

学位請求論文製本表紙見本

(1) 表紙

〇〇論文 平成〇年度 (20〇〇)
論 題
慶應義塾大学大学院〇〇研究科
氏 名

(2) 背表紙

	} 1.0 cm
20〇〇	
	} 1.0 cm
〇 〇 論文	
	} 1.0 cm
論 題	
氏 名	} 5.0~6.0 cm